

---

# 利己主義勇者と良き魔王 序章『失われた過去』

雪祖櫛好

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

利己主義勇者と良き魔王 序章『失われた過去』

### 【NZコード】

N6066W

### 【作者名】

雪祖櫛好

### 【あらすじ】

人類は魔族を解析することによって魔法を得た。同胞を殺された魔族はその人間たちを殺した。魔族はそれ以上をしなかつたが、人間は魔族を害悪と断じ、魔族を駆逐することを決めた。魔族は殺されないために人間を殺すことを決めた。 そんな時代。人間側には、人類最強の勇者がいた。彼は人間の為に戦うわけではなかつた。魔族という危険が存在しない、自分にとつての理想郷を創るために、魔族を滅ぼすと決めていた。結果として、彼は魔族を殺し、魔力を奪い、幾つもの人命を救つっていた。魔族側には、世界最強の魔王が

いた。魔王は人類を駆逐することを安易に是とはしなかつたが、魔族全ての為を思い、人間を殺すことを決意した。これはそんな者たちの利己主義でありながら人類全てに利益をもたらす勇者と、世界の平和を願い人類を殺すことを決めた魔王の、戦いの物語。一方にとつて栄光の、もう一方にとつては、悲劇の、物語。

## 第一節 - 1 - その少年は……（前書き）

その少年は……

## 第一節 -1- その少年は……

彼は神童と呼ばれた子供だった。

その才は街の誰よりも高く、将来は確実に魔法学の権威となるだろうと言っていた。

それは彼の両親の影響でもあった。彼の両親は魔法学者であり、その書庫で少年は幼いころから何冊もの魔法学についての本を読んでいた。

少年が十歳のある日、少年は一人で街の外に出ていた。魔法の秘密特訓である。両親を驚かせてやるうと、そう思つて、秘密に魔法の特訓をしていたのである。

その時、街を何匹かの魔族が襲つていた。

恐ろしい魔族で、街の人々はたくさん殺された。

そんな時、彼は帰つてきた。  
彼は魔物を見て恐怖を覚え、しかし、すぐにそれは怒りへと変わつた。

魔物の傍に転がつていた死体が、自らの両親であると氣付いた瞬間に。

彼は怒りに任せ、その才に任せ、魔族を殺した。

一匹は剣で。街の警備兵が魔族に立ち向かうために使い、呆氣なく殺された結果、魔族の近くに落ちていた剣で。

またある一匹は魔法で。剣で殺した魔族の血を浴び、瞬間に増加された魔力を使い、書庫で読んだことがあるだけの魔法書の知識を用いて。

そうやつて、彼は魔物を慘殺した。剣で斬り裂きその血を浴び、魔法で消し飛ばしその魔力を奪い、思いつく限りむごたらしい手段で魔物を殺した。

よくも。よくも。よくも、やつてくれたな。

そんな言葉を叫びながら、怒りにまかせて、慘殺した。

魔族を殺しつくしたとき、彼の身体は魔族の血で濡れていた。

そして、街の人間の方を見た。自分はやつた。仇をとつたぞ。そう言うように。

だが、彼らはそれを恐怖で返した。魔族を見るときと同じ目で、彼を見た。彼のことを神童だと持て囃していた者たちですら、同じように。

彼はそれに呆然とした。自分は仇を取つてやつたのに。そう思つた。

しかし、彼は明晰だつたがために、街を離れる決意をした。

魔法师职业である両親が生きていれば、それは違つたかもしない。だが、それはもう叶わない。この街にいれば、自分は街の人々から恐れられ、避けられるだろう。魔族と同じように見られるだろう。それ故に、彼は街を離れた。

その後、彼は一人の人間と出会つた。そして、彼はその人間と共に行動するようになつた。

その人間は魔法に精通しており、彼に様々なことを教えた。

魔法だけではなく、本当に様々なことを教えた。

『自分のためだけに生きる。自分の利益を最優先とし、自分の欲望を最優先とする。理想を追い求め、自らの幸福を追い求める。常に自らのことを考える』

『周りに期待するな。誰かががやつてくれるはずはなく、それは自分にしかできない。故に、自分でしなくては、何も変わりはしない』

そんなことも彼が教えてもらったことの一つであり、それが彼の人格の根幹となつた。

そのようにして、彼は決意した。

『自分のために生きる』。自分のためとは、自分のしたいこと。自分のしたいことは、自分の願い。自分の願いは、安定した、平和な、幸福に満ちた世界で生きること。『周りに期待するな』。周りには期待しない。自分がやらなければ何も変わらず、自分しかこの世界を変える者はいない。

故に、彼は決意したのだ。

この世界を、平和にすることを。より良くすることを。

そんな世界で生きることが彼の望みであったのだから。そして、周りには期待することなどできず、ならば、自分でするしかないのだから。

そして、彼は、自分のために、世界を救うことを決意した。そのために、魔族を殺しつぶすことを決意した。

「お客さん。あんた、こんな『時世』によく旅なんかに出るねえ」

馬車の中、口元に鬚を生やした男が少年を見て言った。

少年は夜空を思わせる黒髪を持つていた。中性的な容姿であり、かなり幼く見えた。事実、彼は幼く、現在まだ十四歳である。

「それも、俺のような護衛をつけて、さ。そうまでして、何か用事でもあるのか？」

「ああ。少しな」

少年はぶつきらぼうにそう言い、すぐにその口を閉じた。男はそれに何か言いたげだったが、すぐあきらめたように前を見た。

同時に、少年は突然立ち上がり、男から馬の手綱を奪い取った。

「なつ、いきなり、何を」

そう言つのも束の間、少年は驚くほど高い技術で手綱を操作して、馬はそれに従い、まさに導かれるがごとく右に曲がった。

直後、馬車の側面を衝撃が襲つた。

「なつ、何だあ！」

男は悲嘆するように叫び、背後を振り返つた。

そこには巨大な何かがいた。黒い体表に、巨大な体躯。胴体からは牛の脚が何本も生えており、その脚に数え切れないほど眼胞があつた。それは一斉に男を見て、男は思わず「ひいっ！」「と情けない声を出した。

魔族がいた。それも、男が今までに見たこともないほど強大な魔族だった。

「お前程度でも倒せる奴なら任せのつもりだったが、こいつは無理だな。つたく。高い金払ったのに、これじゃあ無駄金じゃねえか」少年はぼやきながら自分の剣を抜いた。それを見て男はぎょっとした。ただの護身用の、つまり『飾りの』剣だと思っていたが、違った。あの剣は、明らかにそんな剣じゃなかつた。男も用心棒で金を稼ぐことができる程度には実力がある。だからこそわかつたのだ。その少年の持つ剣がどれほどのもので、どれほどの血を吸つたのか。

「死ね、畜生が」

その言葉に触発されたかのように、魔族は自らの魔力を用い、魔法を発動した。炎が巻き起こり、少年を襲う。

しかし、少年はそれを剣の一振りで搔き消した。

「無駄な小細工なんて、戦いで使うもんじゃねえ。魔法つてのは、こいつ使うんだよ」

少年は剣を持つていない方の手を突き出し、そこから魔法を発動した。炎でも雷撃でもない、ただの衝撃を。そしてそれはいとも簡単に魔族の肉体を消し飛ばした。

「なんだ、これは……」

男は驚いていた。こんな少年が、あんな魔族を倒すなど、およそ信じられることではなかつた。だが事実だつた。確かに、この少年は容易く魔族を倒してみせた。それは確かだつたのだから。

氣付くと、少年は魔族の残骸に歩み寄つていた。そして、少年はそれに手で触れ、直後、魔族の残骸が一気に萎れた。魔力の吸引。元々の魔力量が魔族に比べて圧倒的なまでに少ない人間が編み出した技術。魔族から、その魔力を奪い取る。それにより、自らの魔力量を増やし、次の戦いに臨む。少年がしているのは、それだろう。

いや、そんなことよりも 男は思い、少年に尋ねた。

「あんた、何者だ？」

「魔王を倒す者」

少年はそんなことを当然のよつに言い放つた。

第一節 - 2 - 酒場には陽気な男たち（前書き）

酒場には、陽気な男たち。

## 第一節 -2- 酒場には陽気な男たち

「お前が、『魔王を倒す者』なんて名乗ってる奴か？ まだガキじゃねえか！」 そう言つて、椅子に座つた男はがはと笑つた。男は机に乗つているジョッキを取り、その中のビールを飲む。ごくごくと喉から音が鳴る。ジョッキから口を離すと、男はふはあと満足したような息を吐き出し、げっぷをする。

「ふざけんじやねえよ！ お前みたいなガキが、あの魔王を倒すう？」 こりやあ傑作だ！ 僕らはそんな御方と話しているらしいぜ！」

臭い息をまき散らし、男は大きく声を上げる。それに同調するように、周りの男がははと笑う。

そんな中、少年は壁にもたれかかっていた。嘲笑を受けても、それに眉をひそめることすらせずに、ただ壁にもたれかかり、目を伏せていた。

「うおいおいおいおい。なんだ？ 魔王を倒すなんてほざいてんのに、こんなただのおっさんたちにびびっちゃつてるんぢゅかあー？」

男が大きく身を乗り出し、少年の顔に当たるか当たらないかの所でげっぷをする。それに周りの男たちからさらに大きな笑いが起る。

「……おい」

少年が口を開き、目を開いた。そして、男をじっと見つめる。

「臭い。顔を近づけるな」

そんな言葉に、男はがはと楽しそうな笑みを漏らし、「こいつ！ やつぱりびびつてやがるぜー」と少年に指を向け、大笑いする。それに男たちも大笑いする。

しかし、そんな中、少年を除いてもただ一人だけ、笑っていない男がいた。少年を見て、びくびくと震えて「もう止めろ。殺されるぞ」なんてことを呟いている男がいた。

それに周りの男は「何言つてんだよ。あいつなんかに殺されるわけねえだろ」「まだあんなガキだぜ？ そんなガキが魔王を倒すだの言つてるんだ。そんな無謀なこと、止めさせなきゃなんねえだろ？」「つまり、俺達がしてるのは善意からの行動つてわけだ」その言葉が終わると、男たちはまた笑う。

だが、その男だけは笑えなかつた。その男は、この日、少年に護衛を依頼されていた男だつた。そして、少年の力を見た男だつた。「止める。止める。本当に、殺されるぞ。一瞬だ。あんな化物、見たことがない。あんな魔物を瞬殺したような人間、見たことがない。駄目だ。あれは。駄目だ。駄目だ」

そんなことを咳き続ける男を見て、周りの男たちは肩をすくめた。こりや駄目だ。そんな感情を表していた。

そういうしている間にも、少年への煽りは続く。

「僕ちやあん。そんなこと、不可能でちゅよお？ 閣下なら、可能性はあるが、僕ちやんにはできないよお。本当は、魔物を見ただけで、漏らしちやうんじやないかなあ？」

そう言つて、がははと笑う男たちに向かつて、少年はきょとんとした顔で言つ。

「閣下？ それは、グローリーのことか？」

「そうに決まつてんだろ」

「あれなら、魔王を倒せる器じやあないぞ。北地区だつたか？ あれを奪還する時も、たいして役に立たなかつた。まあ、他の奴らに比べれば根性はありそつたが、それだけじやあ、な。そして、そんな奴を持ち上げるだけの部下たち。あれなら、あそこにいた魔族たちのが、よつほど優秀だつたぜ。そんな団が国で最強とも謳われているなんて、本当に、どうかしてるぜ」

ふつと笑みを浮かべながら話す少年を見て、男たちは大きな笑いを上げた。

「何がおかしい？」

少年が訊くと、男が腹を抱えながら、

「いや。妄想もここまでいくと、な」 そう言つて、堪え切れないようにはげひやひやと笑いを再開した。

「……お前らはいつもそうだ。今までにこの話をまともに聞いてくれた奴なんて、片手で数えるくらいしかいない」

「はあ？ いんのかよ、そんな奴。いるなら見てみたいぜ」

ひいひい笑いながら言つ男に少年は諦めたように嘆息した。

直後、少年の右手の甲に光を放つ模様が現れた。

男たちはそれに驚き、笑いを一斉に止めた。魔法によつて刻まれた模様だということがわかつたからだ。そして、その模様が、限定された者にしか刻むことのできないものだつたからだ。

模様は少年の手の甲から浮かび上がり、宙でそのサイズが大きくなつた。そしてその輝きを増し、閃光となつた。男たちは思わず目を瞑り、光が消えた。

目を開けると、そこには一人の男がいた。藍色の髪。それと同じ色の瞳。身長は高く、瀟洒な甲冑を着ていた。腰には何本もの剣が携えられている。

その男には見覚えがあつた。いや、正確には聞き覚えがあつた。何本もの剣を行い、いくつもの領地を奪還してきた男。『閣下』と呼ばれる男とその栄光を一分する者。その誇り高い精神と、瀟洒な外見から『騎士』と呼ばれる者。

王室直属護衛隊隊長、リスト・サーディヒルド。

その男が、跪いていた。無礼にも壁にもたれかかったままの少年に向かつて、跪いていた。

「なんだ、リスト。俺は忙しい。用があるなら簡潔にな」

「はい。申し訳ありませんが、至急、王宮へ来て下さい」

「理由は？」

訊ねると、リストは少し首を回し、

「ここでは、少し」

「そうか。わかつた。行つてやる」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

リストは顔を輝かせた。

「ああ。お前を寄越したつてことは、それだけのことなんだわ。じゃあ、行くぞ」

少年がそう言つた瞬間、少年とリストの姿が消えた。

男たちは睡然としていた。

第一節 - 3 - 魔族の王（前書き）

魔族の王。

## 第一節 - 3 - 魔族の王

彼（もしくは彼女）は王だった。人間が付けた名前では魔族と呼ばれる種族の王だった。

彼は強く、賢かつた。だが、今までに、一つだけ後悔していることがあった。

それは、人間が繁殖するのを看過してしまったことだ。脆弱な種族だからと無視していたが、気付いた時には、世界中に蔓延っていた。予想以上に繁殖能力が高かつた。

そして、人間は彼らのことを「魔族」と呼び、恐れた。それだけならば良かつたのだが、なんと人間は彼らを殺そうとしてきた。むろん、彼は人間などには負けるはずもなかつた。しかし、人間に負け、殺される者も存在した。魔族と一くくりには言つても、実際は様々な種類が存在する。その中で、人間よりも脆弱な肉体を持つ者が、その殺された者だった。

彼は怒り、その人間を殺し、その街を消し飛ばした。

それから数十年。

次に、人間は考えつかないような残酷なことをした。魔族を解析し、魔法をその手に得ようとしていた。

その解析方法は、死骸の解剖であつたり、生きたままの解剖であつたり、様々な実験であつたりした。

彼はその人間を殺した。しかしもう遅かつた。

人間は、魔法を得た。

それでも彼は人間よりも圧倒的に強かつた。彼が魔力を放出するだけで人間たちは塵となつた。それほどには。

そして、その人間たちを殺して、彼は安堵した。もう人間たちも憲りただろう。そう思つて、人間たちを放置していた。

だが、人間は彼の予想の範疇にはおさまらなかつた。その繁殖能力と学習能力の高さ。魔法の鍊度は高まり、その他の技術も磨かれ

た。

ついには、とある人間たちが彼ですら認めるほどに強い魔物を倒したという話を聞いた時には、さすがに驚愕を隠せなかつた。

それから、彼は色々と人間を調査した。結果、驚くべきことが判明した。

人間たちは、他の生物から魔力を奪うことができる。

それは驚くべきことで、驚くだけでは済まないようなことだつた。人間は魔力量が少ない。故に、彼も他の魔族も放置していた。だが、魔力を奪うことができるとあらば、話は違つてくる。魔族の力はその全てが魔力依存のものだ。彼も、その魔力量が魔族の中でも膨大であるがために王となつてゐるのだ（無論、それ以外もあるのだろうが）。つまり、もしも人間が自分たちよりも高い魔力を得ることになれば、それは魔族の敗北を表すのではないか。他の生物から魔力を奪うことができるということは、人間の魔力量は増え続けるということ。魔物を倒せば倒すほどに、魔力量が上昇するということ。それはいすれ、王である彼すら超えるものになるという可能性が存在するということ。

彼は戦慄を覚えた。

人間は、無限に強くなる。魔力量は魔法の使用、その他にもただ生きているだけでも消費される。だが、人間が生命維持のために消費する魔力量など、微々たるものだ。姿すら魔力で維持している魔族とは違い、人間は元々魔力にはあまり依存しない生物であつたのだから。魔力とはすなわち生命力。それに依存せず、他の生物を喰らうことによつて生きていつていた人間。『捕食』という魔族には考えられない方法で生を繋いでいた人間。

それが、魔力にも適用されているのだ。いや、ただの『捕食』よりも、さらに効率が良い。魔力を『捕食』した場合、それは元々の魔族の魔力量がそのまま人間の力となるのだ。ということは、人間は、無限に強くなるということではないのか。そして、それは、人間がいざれ、全ての魔族を超える存在になるということではないの

か。 そうなれば、どうなるか。 そんなことは、考えずとも、わかる。

そうして、彼は決心した。

人間を滅ぼすことを。

自分たちが、滅ぼされないために。

「誠に申し訳ございません！ 私が……私が！ あの時、間に合つていれば……！」

豚の顔に象の耳。 その側頭部には捻り曲がった角が生えている。胴体は筋骨隆々としたゴリラに似たもの。 腕はその肩と肩甲骨の辺りから一対生えており、足は馬のようなものが合計七本生えている。その背には針のようなものが六本ほど突き出しており、それは極限まで小さく折りたたまれた翼である。 その体躯は巨大で、二メートルはあるだろう。

そんなものが、玉座に座る人間の少女の姿をしたものの前で跪いていた。

「あれの死を、貴様のミスで防げたとは思つた。 それは、あれへの侮辱だ」

玉座に座る、人間の少女の姿をしたものが優しげな声で言つ。華奢な体躯。 月を思わせる髪。 白砂のように白き肌。 幼げな、しかし凜とした顔立ち。 宝石のよつに紅き眼。 その身体には何も身につけてはいない。

だがどんな魔族でも、それが人間ではないことはすぐにわかつた。いや、魔族でなくとも 人間でも、それが人間ではないことはわかるだろう。

魔族全てを合わせたものよりも大きいといわれるその魔力量。 人間であれば出せないような威圧感。 その圧倒的なまでの美貌。

『魔王』と呼ばれる者。

「……そうでした。 申し訳ございません」

「我に言うな。あれに言え。だが直接は言うな。直接言つことには  
れば、怒るぞ、あれは」

そこでくつくつと魔王は笑いを漏らした。しかし、その笑いはどこか不自然な笑いだつた。何かを堪えるような。何かを隠すような。「あれなら、『悔いている暇があるならば、その分、魔王様に尽くせ』とも言うであらう。故に、これからも、我に忠義を尽くせ。あれの分まで、我に尽くせ。さすれば、あれも嬉しからう」

「はつ！」

魔王の前に跪く魔族は叫ぶようにして大声で応えた。その声の大きさこそが、忠義の証だとも言つようだ。

「では、下がれ。数日、暇をとれる。それまでは英気を養え」

「はつ」

その声と共に、魔族の姿は消えた。

魔王は魔族がいた場所をじつと見つめ、ふうと長い息を吐いた。そして、自らの目蓋を押さえ、くうつと声が漏れ出た。

「魔王様。彼がいなくなつたのは、残念でしたね」

玉座の横に立つ魔族が言った。

その頭は牛と馬や羊が合わさつたかのようなもの。胴から下は人間のような形。だがその色は人間にはありえない黒い紫色で、その背は蠢く腕で覆われている。脚は一本だが、その人間ならば膝に当たる部分に風穴が開いており、そこにぴゅうぴゅうと風が吹き込んでいる。体長は先ほどの魔物よりもさらに巨大。12メートルはある。

その魔族の声で魔王ははつと我に帰り、目蓋から手を離す。

「ああ。とても残念だ。そして、同時に憤ろしく、恐ろしい。人間は、あれを倒せるまでに強くなつたのか。あれは我が軍でも、百位にはに入る強者だぞ」

「はい。彼の管轄区は人間の国、その中でも一番の大国。それに隣接した場所でありますからね」

「そう言えば、人間は、まだいくつかの国に分かれているのか。ど

「までも愚かだな」

「仕方がないのですよ。人間には、貴方様のような優れた指導者がいないのです」

「ほう。言つよくなつたな、シャム。昔は我に無謀にも挑んだ貴様が、そんなことを言つとはな。時代が流れるのは早い、といつことか」

「あの頃のことは忘れてください。私も、若かつたのですよ。こんな姿をしたものが、自分より強いはずがない。そう思つていきました。……尤も、すぐにそんな思いは消えましたがね」

「当然だ。貴様ごとに、我が負けるはずがなかろう」

「仰る通りで」

「二人はくつくつと笑う。

「さて、それでは対応を考えよつか　　將軍。誰でもいいから、来るい」

魔王が言つと、即座に四体の何かが玉座の前に現れた。

「第七、エレクトロ、此処に」

莊厳とも言える声を発したのは、体長三メートルほどの黒き魔族だった。犬のような体躯を持つが、その顔には紅き眼が一対あり、その四本の脚にも同じように一対ずつ紅き眼がある。黒き体毛の中で、尾の先だけが灰色で、そこからどうつとした何かが絶えず空気中に放出され、すぐに霧散していつている。

「第十三、チャイオニヤ、此処に」

どこか不自然に高い声を発したのは、体長50センチメートルにも満たない魔族だった。眼球とそれを守る皮膚。それだけが宙に浮かび上がつていた。皮膚は黒く、瞳は黄色。眼球を覆う皮膚には血管のようなものが張り巡らされており、それは常に脈打つていて。

「第十六、コラプス、此処に」

聞き取りにくいほど鈍く重い声を発したのは50メートルはあるこの部屋ですら收まりきらないが故に、身体の上一部だけを転移させている魔族だった。それは赤黒い岩山のようなもので、そこに小

さな穴が一つ開いている。じつとした身体からは絶えず黒い蒸気が立ち上っている。

「第一十ピーピリー・ブリー、此処に」

可愛らしさとも言える声を発したのは、体長一メートル半くらいいの魔族だった。その姿は魔王と同じく人間のそれに似ている。人間の雌の成体に似たその姿はだがしかし、人間とは違うところがある。魔王とは違い、衣服を着用している彼女（もしくは彼）だが、その隠された部分にはびつしりと模様が刻まれていて、それは常に暗い光を帶びている。目の色は人間とは逆で、瞳の黒と強膜の白がひっくり返っている。髪は肩ほどまで伸ばされた紫色。肌は魔王と同じく白い。

そんな者たちが、一斉に玉座の前に現れた。

「貴様達に任を与える。詳しくはシャムに聞け。私はこれより、仇討ちへと赴く」

「魔王様直々に、ですか？」エレクトロが確認するように訊ねる。それに魔王は首肯し、「我が行かなければなるまい。あれは、良くなってくれた。だから、その弔いだ」

そうして、魔王は玉座から立ち上がり、トンと床を蹴つた。すると、魔王の身体は重力などないように浮かび上がる。

「では、此処は任せた」

「御意」シャムが魔王に向かつて頭を下げる。  
直後、魔王の姿が消えた。

第一節 -4- 魔族と人間の彼我（前書き）

魔王と人間の、彼我。

## 第一節 -4- 魔族と人間の彼我

「……ふむ。まだこんなものか」

魔王は多くの人間がいる場所にいた。そこには幾つかのテントのようものが張つてあり、鎧を着た男たちが動きまわつている。

現在、魔王は衣服を着用していた。できるだけ不自然にならぬよう、偶然見かけた少女と同じような衣服を創造し、それを着用していた。それは黒いローブのようなものだつた。首から足まですっぽりと魔王はそれに収まつていた。

「さて、まずは此処の君主に会おうか」

眩き、魔王は魔法を発現させ、そこらに歩いている兵の頭の中を閲覧する。情報『君主』、『閣下』、最も大きいテントに存在、倒してはいない。魔王は首をひねつた。魔族を倒してはいないとはどういうことなのか、と。あれを倒したのは此処の君主ではないのか、と。

魔王はその他の兵の頭も覗いたが、それは変わらなかつた。だが、それにはあまり気をかけなかつた。どうせ、此処にいる人間は全て殺すのだ。何も変わりはない。

なら何故、魔王はわざわざ情報収集などをしたのか。それは、あれを倒した者がどんな者なのか、それを見たかつたのだ。どういう戦いをしたのか。それが見たかつたのだ。彼がどうやって死んだか否、最期をどうやって生きたのかを。

しかし、それも見ることは叶わぬらしい。魔王は残念ながらも、それを見るることは諦めることにした。元より、最期をどうやって生きたのかは見たかつたが、どうやって死んだのかは見たくはなかつたのだ。あれも、我にそのような姿を見られたくはないだろうからな。と魔王は思った。

そして、魔王は早速、することにした。

復讐とこう名の弔いを。

「くそつ！ どうなつていいんだ！」

その拠点の最も大きいテントで男は叫ぶように言った。金髪碧眼。二十五という若さにして将軍の地位に昇りつめた天才。『閣下』と呼ばれる男だつた。

「閣下！ 早く逃げてください！ 現在の装備では、とても勝つことはできません！」

「却下だ！ 此処にはもう、私たち以外の人民もいるのだぞ！ それなのに、私だけがのうのうと逃げるわけにはいかん！」

「ですが、閣下の命と平民の命では……」

それに『閣下』と呼ばれる男は部下を睨みつけ、

「同じだ！ 否！ 私よりも人民の命の方が重い！ 戦で死の覚悟をした私たちと、そんな覚悟もない人民。そのどちらかと問われれば、死を覚悟している者が死ぬのが道理だろう！」

「しかし、閣下……」

「くどい！ 確かに、一昔前までの私ならば、我先に逃げかえつていただろう。しかし、今やそんなことも言えまい。あんな少年でさえ、あれほどの魔族に打ち勝つたのだ。それなのに、貴様たちは報告を捻じ曲げ、私が討伐しただと……。私たちは、何もできなかつたではないか！ あの少年の戦いを見ているだけだつた！ そんな醜態を、もう晒すわけにはいかない！」

「それは……」

「まだ何か言いたいのか！ 良く思い出せ、あの少年の言葉を。思い出したか？ 『お前らが最強だなんて、この国も終わりだな。俺一人のが、この国の全軍よりも強いんじゃないのか？』。ただの少年に、そう言われたのだと。情けないという感情を込められて。憐れみという感情を込められて。諦めという感情を込められて。

そんな感情は、もうあの少年には抱かせない。国民には抱かせない。

そう誓つたはずだろ？ 少なくとも、私は誓つた。王と、我が心中に。故に、もう逃げるわけにはいかないのだ。私たちは、戦い、勝たなければならぬ。国民の英雄でなければいけないのだ」

『閣下』の言葉に、部下である男は口を塞ぐ。そして、重々しく、頷いた。

それに『閣下』は「よし」と言い、大きく声を張り上げた。  
「これより、急遽襲撃してきた魔族への対策を即急に練る！ まず第一に、近辺に住む人民を退去させる！ 強制でもかまわん。転移魔法を使ってでも退去させるのだ！ 次に、魔族を撃退する。それは人民を逃がした後だ！ では、編成を行う」

言つていると突然、彼の背後で爆炎が舞つた。テントが燃え、そこから一人の少女が悠然と歩み寄つて来た。魔族だ。すぐにそれは理解できた。存在が違つ過ぎた。

「貴様が此處の長か。魔力量は貧相なものだが、中々良い目をしている」

少女の姿をした魔族は顔に少しだけ笑みを浮かべ、『閣下』へと手を伸ばした。「貴様っ！」と部下がそれを防ごうと、魔族へ向かつて自らの剣を振つた。すると、剣に刻まれた模様が光り、その模様に付加された魔法が発動する。剣の軌跡から風の刃が飛び出し、魔族へと向かう。もちろん、それはただの風ではない。魔法により創りだした風。魔力付加によりその威力を極限にまで高められた刃だ。だがしかし やはり、それは魔族には全くと言っていいほどに効果がなかつた。魔族はそれに目も向けなかつた。確実に直撃した。だが、魔族は傷一つない。

そして魔族は『閣下』に伸ばした手を下ろし、妨害魔法か、と呟いた。

「貴様ではなさそうだが、それだけの使い手が、人間にはもういるのか」

魔族は自らの顎に手を当て、思案するように呟く。自分たちが眼中にないようだつた。それに苛立ちはしなかつた。ましてや安堵した。

てしまつていだ。その事実にこそ、苛立つた。

どうした。倒せ。目の前には魔族がいる。倒せ。立ち向かわなければいけない。今こそ剣を取れ。魔法を使え。その肩書きはなんだ。『閣下』と呼ばれた肩書きは。そう呼ばれているのは何故だ。それを考へる。先ほど自分で言つたばかりだろう。逃げてはいけない。立ち向かうのだ。勝つのだ。戦い、勝つのだ。英雄でいなければいけない。自分たちは英雄でいなければいけないのだ。国民の英雄でいなければ。希望でいなければいけない。国民に不安ではなく安堵を与えなければいけないのだ。そのためには、勝たなければ生き残らなければ。戦え。剣を取れ。戦え。魔法を使え。戦え、戦え、戦え

「おおおつ！」

叫びながら『閣下』が剣を鞘から抜き放ち、同時に魔法を発動する剣に込められた魔法ではない、自らの魔法。停止魔法。一定の範囲の空間を対象として停止させる魔法。空間」と対象を停止させる魔法。『閣下』がそう呼ばれる理由の一つ。これだけ高位の魔法を扱える人間は、魔法に研究が未だあまり発展していない現代では、一握りしかいない。

それを見てすぐに部下たちも自らの武器を取り出し、魔法を扱える者はその準備をする。魔法には少しの準備を要することが多い。それが高位の魔法であればあるほど、その時間は長いと言われている。魔法とは糸を編むようなものだ。ある人間の言葉が思い出される。魔力と言う糸を編み、魔法を形成する。その喻えは言い得て妙だと思えた。確かに、その通りだ。高位の魔法であれば、その難易度は上がり、焦つてしまえば失敗してしまう。それは確かに、糸を編むことに似ている。

彼らは魔力を編み、魔法を発動させる。雷、炎、水、氷、風。そんなものが一斉に魔族へと向かう。

「人間如きが空間停止魔法を扱えるとは少々驚いたぞ。だが、この

程度の鍛度では、まだまだだな

そんな声が聞こえた。

誰の声か。そう思った。しかし本当はわかつてた。ただ、それを信じたくないだけで。

魔王の声だ。

魔族は停止魔法がないかのよう口を動かし、軽く手を払つた。すると、それだけですべての魔法がかき消された。

驚きのあまり何も言えなかつた。そして、驚いている余裕などなかつた。

「最早、貴様らから得られる情報はなさそうだ。知つていたとしても、妨害魔法によつてその情報は得られん。だが、収穫はあつた。人間に、空間停止魔法はまだしも、妨害魔法を扱える者がいるとは思わなかつた。空間停止魔法は物理的な、物質的な魔法だが、妨害魔法は情報的な、概念的な魔法だ。

人間がその領域に至つたことを称え、貴様らは苦しまず殺してやろう。喜べ。魔王直々に殺してやるのだ。これほど光榮なことは、ないだらう?」

その言葉とともに、魔族の身体から途方もない魔力が溢れ出していることが感覚された。同時に、その言葉自体に驚いた。

「魔王、だと?」

思わずそう口に出していた。魔族はそれに笑みを浮かべながら、「然り」と言つた。

魔王。

人類の最大の敵。魔族の長。ただ一人だけで、魔族の総戦力の半分以上を占めるといわれる者。

その事実を確認した瞬間、そこにいたすべての人間が魔王へと襲いかかつた。

魔王に恐怖は抱かなかつた。ただ怒りを抱いた。殺意を抱いた。こいつさえ殺せば。殺してやる。殺してやる。殺してやる。そんな思いに塗りつぶされた。

直後、その視界が白に塗りつぶされた。  
虚無に塗りつぶされた。

第一節 - 5 - 少年時代（前編）

少年時代。

「久しいな」

少年とリストが転移すると、玉座に座る男が声を発した。

「ああ。久しぶり。で、用件はなんだ？」

男は緋色の髪に白色の肌。巨大とも言える身体を玉座に収め、悠然と構えている。

「北地区が消滅したらしい」

淡々と言つ男の言葉に、少年は少しだけ驚いた。そして、得意そうに言つた。

「だから、俺の言つ通りにして良かつただろ？」

それに男はかっかと笑い、

「ああ。貴公の言つ通りにして良かつた。おかげで人民を失わずに済んだ」

「だろ？だから、早くグローリーを出せ。直接訊いた方が早いからな」

「わかつてゐる。來い、グローリー」

男が言つと、一人の男が扉から現れた。金髪碧眼。グローリーという男だった。

「よお。久しぶりだな『闇下』様」

「からかうな、無礼者。私は貴様を尊敬してはいるが、同時に嫌悪している。特に、その無礼さを！」

グローリーは声を荒げ、少年に指を突きつける。それに少年はやれやれといった調子で、

「俺はお前の、その素直なところ好きだぜ？それに、俺は別に無礼じやないと思つが」

「どこがだ！たつた今、貴様は陛下にそんな口調で話しあつただろ？」「

「陛下につつても、俺からすればただのおっさんだからな。いや、

『ただの』つてのは間違つてゐるか。正確には、『有能な』おっさんだな』

「それが無礼だと言つていいのだ!」

「なんで王如きに俺が敬語で話さなきや いけないんだよ

「王、如きだと……」

それにグローリーは驚き、啞然とする。しかし、玉座に座る男は豪快に笑つた。

「貴公はやはり面白いな! そして、強く、頭も良い。どうだ、やはり余の下に就かぬか? 望む物があれば、出来る限り取り揃えよう

「却下だ。誰かの下に就くなんて、まっぴら」めんだ。ただ、望むものをくれるつて言うんなら、グローリーとリストを寄越せ。こいつら一人は、鍛えれば魔王討伐に役立つかもしないからな

「却下だ。こ奴らは余にとつても宝のような者だからな」

「なら、交渉決裂だな。最初から、交渉なんてないようなもんだったが

「いや待て。余の下に就くとこいつのなら、グローリーとリストをくれてやつてもいいぞ?」

「あんたの下に就くつて時点で却下だ。確かにこいつらは惜しいが、それほどじや ない。

……本音を言えば、あんたもけつこいつ欲しいんだがな、陛下殿? あんたのその魔法の才は、グローリーくらいなら軽く超える。実際、魔法を使えば、グローリーとリストが両方襲つてきても瞬殺できるだろ

「それは貴公も同じことだろ?。いや、貴公ならば更にその上を行くか。まず、襲うという感情を抱いた時点で死んでおるだろ?」

「それは過小評価し過ぎだ。俺なら、そんな感情は抱かせない。グローリーも口ではこんなこと言つてゐるが、実際は俺を襲う気なんて、これっぽっちもないだろ? 俺の戦いを、実際に見たんだから」

それにグローリーは「くつ」と悔しげに息を漏らした。図星だつ

たよつだ。

「やはり、貴公は惜しいな。いざれ、手に入れてみせよ!」「不可能だ。あなたの器は一国の王にはふさわしいが、俺を収めるには小さすぎる。どうしても欲しいのなら、この世界の王となつてから言え。そうすれば、考えてやらん」ともなし」

それに男 王はその顔に貪欲な笑みを浮かべ、

「元より、そのつもりよ」

と言い放つた。少年は苦笑しながら、「そつだらうな。あんたは、それを望むだらうと思つていたよ。誰よりも欲深いだらうからな、あんたは」

「貴公に言われるとはな。魔王を倒す者よ」

そうして少年と王は一人で笑つた。

すると、グローリーが憤慨しながらも陛下が笑つていらっしゃるから口を出すに出せないとでも言つよつた顔をしてるので、少年はグローリーに声をかけた。

「おい、グローリー」

グローリーは一瞬顔を輝かせ、すぐにしかめた。

「表情がころころ変わる奴だな。まあいい。見せてもらうわ」

そう言つて、少年はグローリーの方へ手を伸ばした 同時に、グローリーに強烈とも言える既視感が襲つた。同じで見た。最初にそう思つた。そしてすぐに答えは出た。魔王だ。魔王がした動作と同じだ。

グローリーがそんなことを思つてみると、少年は大きく舌打ちし、伸ばした手を下げた。

「妨害魔法とか、俺への近づけかよ。しかも、無駄に器用なことしゃがつて……」

少年が苛立つたようにするのを見て、しかしどうグローリーはそれどころではなかつた。どうしても訊きたいことがあつた。

「貴様、今のは、何だ?」

「相手の記憶を見る魔法だ。お前も魔王にやられただらうが。それ

ぐらい気付け

『魔王』。

その言葉に、リストは驚愕に目を見開かせ、王は少し目を細めた。

「どんな姿だったのですか！」

珍しく声を荒げ、リストが言つ。それにグローリーは答えようとした。しかし、応えることができなかつた。どうしてか魔王の姿が思い出せなかつた。魔王と出会い、自分が殺されかけたことは鮮明に覚えている。だが、魔王の姿だけがはつきりと思いだせなかつた。その瞬間、グローリーは恐怖を覚えた。魔王の姿が思い出せないことだけではない。その事実に、今まで全く気付かなかつたことに。聞かれなれば、おそらく自分は魔王のことすら口にはしなかつただろう。そんな自分に恐怖を覚えた。どうしてしまつたのか。強くそう思つた。

「リスト。こいつは魔王の姿を覚えてはいない」

「何故ですか！ 何故、そんな重要なことを……」

「妨害魔法。情報 つまり概念とか、そういう抽象的なものを改竄する魔法によって、だ。自分の存在を隠蔽するための魔法。自分のことを言えなくする魔法。簡単に言えば、自分に関する情報を誰かが得ることの一切を妨害する魔法だ」

その言葉にリスト、グローリーは驚愕し、すぐ納得した。王は最初から納得していた。

何故そんなことを知つてているのか。最初にそう思い、だがすぐに、少年なら知つてもおかしくはない、と思ったのだ。少年は全ての能力が他の人間を圧倒して余りあるほどに高く、それは知識の量も例外ではなかつた。特に、魔法に関しての知識は。

グローリーの停止魔法も、少年の知識がなければあれほどまでの高みには至らなかつただろう。もちろん、少年と出会う前からグローリーは『閣下』と呼ばれるほどの技術を持つており、空間停止魔法も扱えた。しかし、その発動まではかなりの時間が必要だつた。

『魔法とは、糸を編むよつなもの』。

これは少年に教えてもらつたことだつた。少年も人から教えてもらつたと言つていたが、初めて聞いた時は、成程確かにその通りだ、と思つたものだ。

そして、少年は色々なことを教えた。自らの知識、技術、それを惜しげもなく教えた。

結果、グローリーに魔法発動スピードが格段に上がつた。糸を編むという喻え。魔力を編み、魔法を発動する。そのようなイメージが、何のイメージも持たず、ただ理論的に組み立てていた魔法にはつきりとしたイメージを持つことによつて、その発動までの時間が短縮されたのだ。何のイメージもなく、ただ理論的に組み立てるよりは、イメージを持つて、感覚的に編んだ方が早い。いや、正確には、理論と感覚の二つを利用することによつて効率を上げているのだ。単純に二倍のスピードではなく、理論と感覚は相互に影響し、循環し、スピードは途方もないほどに上げられる。現に、グローリーの空間停止魔法はそのやり方をするまで つまり、ただ理論的に組み立てていた頃は十分などという時間がかかつたが、今では十秒もかからない。

ただ糸を編むという喻えだけでこれほどまでに変わるものかと最初は疑問に思つた。

しかし、少年曰く、

『魔法 자체、元々は感覚的なものなんだ。理論で組み立てるのは間違つてゐるとは言わないが、効率的じやない。そうだな……例えば、お前は身体を動かす時に理論的に動かすか？ 逐一どうやって身体を動かしているのかを考えて、その理論を組み立てて動かしているか？ そうじやないだろ？ 身体を動かすのは、感覚的なものだ。理論で考えていては、逆に難しい。まあ、魔法に関しては理論を理解するのも必要と言えば必要だがな。理論を理解していれば、「理論」という明確なイメージが自分の中に確立され、それを基に魔法を構築することが可能になる。それに「編む」というイメージを合わせることによつて、スピードが早められる。』

つまり、「理論」によって人間は魔法を構築することが可能になり、「感覚」によつてそのスピードが早まる。本来、魔法は人間の能力ではなく、魔族の能力だ。そのため、「理論」はやはり必要だ。しかし、理論だけでは構築速度が遅い。魔族は生まれつき魔法を扱えるんだから、感覚的に使えて、そのスピードは理論なんて目じゃないほどに早い。しかし、人間も理解さえすれば、感覚的にもすることができるなんだ。「理論」と「感覚」。その一つこそが人間の能力だ。どちらも使って、初めてその真の能力が發揮されるつてわけだ』といふことらしい。

その後に、理論で考える利点について、『新たな魔法を習得する時は人間の場合、理論的にした方が良い』などを挙げた。

その説明は、十四歳という若さを考えずとも、素晴らしい説明だつた。この年齢でここまで魔法に精通していることは異常とも言えだし、この国では魔法学の一人者でもあるグローリー・ヤリストにとつても目から鱗が落ちるような発想だつた。少年はおそらく、この国の誰よりも魔法に精通していた。誰よりも知識を持ち、さらには、誰よりも強かつた。

## 第一節 - 6 - グローリーの回想（記書き）

グローリーの回想。

## 第一節 -6- グローリーの回想

少年とグローリーが出会ったのは、少年がまだ十三歳の頃だ。

グローリーはその時、北地区の奪還作戦に出撃していた。魔族によって占領された北地区。その奪還作戦。

数百もの選び抜かれた猛者たちを連れ、グローリーは北地区に向かい、到着した。すると、そこには幾つもの魔族の死骸。そして道端にうずくまつて奮えている人々がいた。

グローリーがそれを不思議に思った瞬間、グローリーの眼前に巨大な紫色の肉塊が降つて來た。それは地に落ちるとともに弾け、同時に紫色の煙となつた。

それが何処から降つてきたのかを探るため、グローリーは首を回した。

すると、いた。頭上に。空に。

そこには巨大な体躯をさらに巨大な六対の翼で浮かばせる魔族がいた。紫色の体表。中心に球状の胴体があり、そこからそのサイズからすれば小さな数え切れないほどの数の脚と、巨大な六本の腕が生えており、六本の腕は途中で裂け、そうやって裂けた腕がさらに裂け、それがさらに裂け……といったように無限に分かれ裂けている腕。その翼には数百の深緑色の眼球。胴体の真ん中がぱっくりと割れており、それは口のようだった。牙のようなものが生えており、大きな舌が見えた。その奥にはぐつぐつと煮えるマグマのようなものがあり、それは度々口からはみ出し、落ちてきた。

そんな魔族の、一部分が抉り取られていた。胴体の一部分。そこからはどうつとした橙色の液体が滴つており、それはおそらくこの魔族の血だった。

そして、先ほどグローリーの眼前に落ちてきたもの。それこそが、あの魔族の抉り取られた部分。それは容易に予想できた。

しかし、どうしてもわからないことがあった。これは、誰がやつ

たのか。

そんな疑問はすぐに解消され、次に不信が湧いた。

一人の少年が浮遊していた。

黒髪の少年だということ、かなり幼いといふことだけは確認できた。そして、一振りの剣を持っていることを。

この少年に違いないと思い、同時にそんなはずはないと思った。その思いもすぐに消えた。

少年が剣を振るい、直後、魔族の六本の腕が少年に向かった。魔族の腕が少年に至る前に、魔族の胴体が上と下に分断された。しかし、魔族の腕は止まらず、少年に向かう。少年はそれは手を向け、かと思うと、魔族の腕は跡形もなく消滅していた。それに驚く暇すらなく、魔族はその口を大きく開き、そこから極度の高温により赤を超え、白くなつたマグマのようなものが噴出した。粘性が高く、触れたものを融かすようなそれは少年に降りかかつたが、少年はそれを軽く腕を擧げると同時に発動した魔法によって焼き消した。直後、少年は魔族の胴体の上に立つていた。少年は剣を振り、翼が全て切断された。魔族の身体が少年を包み込むように変形し、だが少年は思い切り魔族の胴体を蹴り、それを阻んだ。少年の蹴りだけで魔族の身体は木端微塵になり、霧散する。すると、少年が顔をしかめ、次の瞬間、魔族の切断された翼を追つていた。その翼にある眼は一斉にぎろりと少年に目を向け、そこから光線が射出された。少年はそれを無視するように剣を振るい、すると魔族の翼は跡形もなく消し飛んだ。

一瞬の勝負だった。

そのようにして、少年の強さを知り、だが、やはり信じ切れはしなかつた。信じることなど、できなかつた。

少年はゆっくりと地に降り立ち、グローリーの方に歩み寄つて来た。グローリーたちは皆武器を構えた。すると、少年は驚いたように目を開いた。

「へえ。あれを見て、まだ俺に剣を向ける、か。度胸あるな、お前

「ら

少年は笑みを浮かべた。そして見ると、少年はやはりかなり幼かった。外見は、十から十四くらいのように見えた。しかし、その目だけを見れば、とてもじゃないが十や十四には見えなかつた。おそらくはこの国でかなりの経験を積んでいる自分を圧倒するほどに修羅場をぐぐり抜けていることがわかつた。

「……貴様、名は？」

グローリーは思わず訊ねていた。それに部下たちがざわめいた。グローリーが名を訊ねるということはそれほどまでに珍しかつた。その能力を認めた者以外には、絶対に名を訊ねなかつたからだ。

少年は少し考えたそぶりをすると、薄く自嘲めいた笑みを浮かべ、言つた。

「魔王を倒す者だ」

これがグローリーと少年の出会いだ。

この後、少年はグローリーと共に城へ行き、王と謁見した。その時にも少年は自らの態度を正さず、グローリーはその度に「無礼な」と憤慨した。

そして、少年はグローリーたちに自らの知識を授けた。

それから、少年は城から離れ、旅に出た。グローリーは北地区へ赴き、街を建て直すことにした。

そんな時、魔王が現れ、北地区を滅ぼした。

第一節 - 7 - 少年の笑み（前書き）

少年の笑み。

## 第一節 -7- 少年の笑み

そこまで思い出して、グローリーは思った。魔王が現れたことは覚えている。それは何故だ、と。

「魔王の性格が悪かつただけだ」勇者がまるで心を読んでいるように口に出した。「あいつ、わざと魔王と言つ名だけは覚えておくように調整したんだよ。そうして、自分はそれほどの魔法の使い手なのだ、と見せつけるためにな」

「誰ですか?」

「俺にだ。というより、それ以外には考えられない。あそこにいた魔族を殲滅したのは俺だし、その時妨害魔法を使っていたのも俺だけだからな」

「……お前も、妨害魔法とやらが使えるのか」

「当然だろ。そうじゃなきゃ、どんな魔法かなんてわかるかよ」「さりとて言つ少年だが、おそらくこの国には少年以外にこの魔法を扱える人間はない。

「そう言えば、話は変わるがグローリー。まだお前から礼の言葉を貰つてないんだが?」

少年の言葉にグローリーは「うう」とうめき声を出す。

「……何故、貴様にこの私が礼など」

「この国の騎士様は自分の命だけでなく自分が守るべきだった民衆すら救つてくれた恩人に一つの礼すら言えないのか。やれやれ、国王陛下、この国はもう駄目かもしれないぜ?」

鷹揚に肩をすくめながら少年は王に手を向ける。

「ふむ。それは困るな。貴公の手は確かだ。そのよつな者に見限られては、本当にやつなるやもしれぬ。はてさて、どうすればよこものか」

王はわざとらしく嘆きの声を上げ、両腕で頭を抱えた。その顔は半笑いだった。

それにグローリーはふるふると震え、堪え切れなくなつたように言つ。

「わかつた！　言おう。だから、もう止めてくれ。陛下も、もうお止め下さい」

「何をだ？　俺にはよくわからんなあ」

「うむ。余にもわからん。どういうことだ、グローリー」「両者が笑いで肩を揺らして言つ。グローリーは少なくとも笑いではない感情で肩を震わせ、言つ。

「……私たちの命を救つてくださつて、ありがとうございます。貴方様の魔法がなければ、私たちは地区ごと消滅していただしよう。此度のことは、全て貴方様のおかげでござります」

それに堪え切れなつうに少年はぶつと吹きだした。

「グローリーがそんなこと、言つなんて……これは堪えることなんてできるはずねえだろ」

腹を抱えて苦しそうに少年は言つ。グローリーは顔を真つ赤に染め上げ、震えていた。

何故グローリーが少年にこんなことをしているかと言つと、グローリーが生存していることは少年のおかげだからである。

魔王により襲撃されたグローリーたちがいた北地区だが、そこにいた人々は全員生存している。

それが何故かというと、やはり少年のおかげなのである。

少年はグローリーたち北地区に残る者たち全てに魔法付加をした。その魔法とは転移魔法であり、付加された者が危険になれば即座に特定された場所に転移させる魔法である。

少年は王に頼み、それだけの人間が入るだけの部屋を確保してもらい、そこを特定された場所とした。

実のところ、グローリーたちは自分たちに魔法付加されているとは知らず、最初に転移してきた時は何故自分たちが生きているのかと疑問に思つた。しかし、そんなことをする人間は少年しかおらず、出来る人間も少年しかいなかつた。

少年は魔法のエキスパートとも言える人間たちに一切気付かれずに魔法付加を施していたのだ。それを知った時のグローリーは憤慨とともに深い感謝の念を抱いていた。だがやはり生意氣だという感情を消せず、そもそも少年に感謝は個人的にしたくはなかった。

「でも、良かった。お前が、生きてくれて」

少年が柄にもなく、真摯な表情で言った。

グローリーは恥ずかしそうに顔を赤らめ、「……ふん。それに関しては、本当に」

「死んだらもうからかえないもんな！」

「貴様ッ！ 少し感動してしまったではないかッ！」

グローリーは剣を抜き、少年に向かって空間停止魔法を使う。しかし、少年はやはりいとも簡単にそれを防いだ。

「おいおい。魔法をそんな無駄使いすんなよ。俺ら人間は、魔族を殺すことくらいでしか魔力を増やせないんだからよ」

その言葉は正論であり、頭に血が上っていたグローリーも逆らえず剣を鞘に収めた。

「……で、結局、用はなんだ？ ただその話をするために俺を呼んだってわけじゃあ、ないんだろう？」

「左様。貴公には、北地区へ行つてもらいたい」

「北地区？」王の言葉に少年は顔をしかめた。「あそこは魔王によつて消滅されたんだろ？ 今更、どうしようつて言つんだ？」

「現在、北地区に魔力波が検知されている」

少年は驚きに目を瞠つた。

「そうか。そういうことか。魔王の奴、やつてくれるな。全てを消滅させることで、逆に新しく拠点を造るには好都合つてわけか。そして、北地区は、この国に隣接した地区。とられたくは、ないな」

「ああ。貴公のことだから遠視魔法か何かでもう見ておるだろ？ が、魔王はきれいさっぱりと言えるほどに北地区の全てを消滅させた。そして、あの形は……」

「要塞、か。大きく半球状に抉り取られた大地は、おそらくその基

盤のための部分。掘り進めることの短縮と俺たち人間が作り出した  
いた全ての解体作業の短縮」

「そうだ。そしておそらくは、その要塞の形状は球。下半分は大地  
に隠れて見えぬ故、外からはドーム状に見えるだろうが、魔族ども  
のことだ。何か細工をしているだろ?」

「あいつらの魔法に関する技術は人間とは比べ物にならないからな。  
俺の予測では、おそらくその要塞は移動要塞だ。魔法によつて浮遊  
し、移動する要塞」

「それが完成すれば、少し不味いな」

「そうだ。そして、魔法を扱う魔族どもならば、そんな要塞ですら、

数日も経たずには建設できるだろ?」

「……行つてくれるか?」

「無論だ。その代わり、グローリーとリストを連れていく。それ以  
外は、必要ない」

「許そう。では、頼んだぞ」

王の言葉に、少年は口の端を吊り上げた。

「任せろ。ついでに、これが俺に頼む最後になるよ!」  
「よ」

第一節 - 8 - 魔王は玉座に。少年は戦場に。（前書き）

魔王は玉座に。少年は戦場に。

## 第一節 -8- 魔王は玉座に、少年は戦場に。

魔王が玉座に戻ると、そこにはシャムとペーピリープリーだけがいた。

「エレクトロ、チャイオニヤ、コラップスは？」

「チャイオニヤ」「ラップスはー、帰りましたよーー」

魔王が訊ねると、ペーピリープリーが可愛らしくも間延びした声を発した。

「では、エレクトロが行ったのか」

「そうでーす。私はぱぱつと要塞造つてる途中でえーっす」  
ペーピリープリーは空中に浮かんだ球状の映像に指を振る。その映像は先ほど魔王が消滅させた場所を映しており、そこには既に要塞のようなものの形が出来上がっていた。

「内部構造とか、機能についてはまだまだですけど、形だけならあと数分で終わりまーす」

その言葉に魔王は少々驚いた。そして、心配げに訊ねる。

「そうか。貴様にしては遅いではないか。どうした？」

「いやー、魔王様がそれを言いますか。魔王様の魔力の余波で私の魔力が届きにくくなっているんですよ。だから、遅くなるのも仕方ないっていうか」

「なら良い。シャム、エレクトロは何時、発つた？」

シャムが魔王に頭を下げ、答える。

「魔王様が戻つてこられた七分前ほどです」

「ということは、ペーピリープリーが要塞を完成させると同じくらいに到着するか」

「いえ。エレクトロは魔力を節約すると言つていたので、数日はかかるでしょう」

「魔力の節約か。良い心掛けだ。今回の敵は、少々手強そうだからな」

魔王の言葉に、シャム、ピーピリー・ブリーは驚愕に目を瞠った。

「魔王様が、言つほどなのですか？」

「ああ。妨害魔法を扱え、更にはあれ ディープリースを倒したのだ。それだけでも、充分だとは思わないか？」

「いやいや。魔王様だつたら、それくらいじゃあ、手強いなんて言わないでしょお。だつて、魔族統一の時でも、その言葉を口に出したのは、シャムさんとか、フェイくらいじゃないですかー」

「そうだつたか？ まあ、良いではないか。少なくとも、我には、此度の敵は手強いように感じられるのだ。それだけで、充分だ」

言つて、魔王は笑つた。

無邪氣でいて不敵な、まるで最高の玩具を目の前にした児のよくな表情で。

エレクトロは走つていた。

その四肢を使い、地を蹴り、とてつもないスピードで走つていた。その走りには黒き影のようなものが残像として残り、脚が地に着くごとにその地表が黒く染まつた。

そこにエレクトロ以外の魔族は存在しなかつた。エレクトロにも多くの部下はいるが、彼はその部下を使うことを安易に是としなかつた。

その理由は様々だ。一つに部下の命の重要性を良くわかっているから。一つに自分が部下たちよりも圧倒的に強いことがわかつてゐるから。

そして、現在においては、自分自身の目で見なければ納得できないからであり、そもそも魔力の消費を抑えながら走つてここまでスピードを出せるのは、エレクトロの部下には存在しないからであつた。

エレクトロが一人で走つてゐるのにはそのような理由があり、で

は彼の部下はどうするのかというと、それは簡単である。

エレクトロが先に行くことで、転移魔法の転移先を指定できるのである。転移魔法では転移先を指定しなければ転移できない。故に、エレクトロは転移先を指定するために、一人、走っているのである。魔王がそれより以前に現在エレクトロが目的地とする場所に転移したが、その指定先は最早使うことは叶わない。魔王の消滅魔法により、指定先は人間の拠点ごと消滅した。

一応、転移指定点は人間の拠点より数キロメートルは離れた場所にあつたはずなのだが、如何せん、魔王の消滅魔法であれば、それほど先の地点であつても消滅するのは当然のこと。それを考えれば、魔王以外の者が向かうべきなのが、此度のことは、理屈ではない。魔王直々に向かうことが、一種の弔いなのだ。

エレクトロ自身、人間に殺されたというディープリースとは面識があつた。そして、彼はとても良い魔族があつたと記憶していた。強い魔族だと語つことにも。

無論、ディープリースはエレクトロよりは弱い。それは当然のことだ。しかし、それでもエレクトロが認める程度には、ディープリースは強かった。

そのディープリースが、人間程度に殺された。それは容易には信じられないことであつたし、現在でも信じ切れてはいない。

ただ、エレクトロは決意していた。

ディープリースを殺した人間と出会つがあれば、自分が相手をし、殺すと。

そして、それをディープリースに捧げると。

× × ×

少年はリスト、グローリーを連れて、北地区近郊へと来ていた。

転移魔法を使っての移動だった。しかし、それはグローリーやリストによる転移魔法ではなかつた。彼らの転移指定点は既に消滅してしまつていたのだ。

ということは消去法で少年が転移魔法を使つたと言つことになるが、少年が転移魔法を使うことができたのは、当然のこととして、転移指定点が残つていたからである。

少年は保険として、北地区から遠く離れた地点にも転移指定点を刻んでいた。無論、グローリーも数キロメートル先ならば刻んでいたが、少年の場合、もつと先まで刻んでいた。

それをグローリーとリストは不思議に思つたが、少年曰く、「俺はこんなことが起こることを予想していたんだよ。だから、グローリーたちにも転移魔法を附加したんだしな。まあ、今回のことは、少し予想外だつたがな。念のため、ここにも転移指定点を刻んでおいたが、良かつたぜ」だそうだ。

少年は簡単に言つたが、無論、簡単なことではない。グローリーが刻んだ数キロメートル先が、その『念のため』なのだ。だが、少年は数キロメートル先に転移指定点を刻むことなど、念のためではなかつた。全ては予想の範囲内のことだつたのだ。もしも、魔王の襲撃がなかつたとしても、それはそれで予想の範囲内のことだつたのだろう。グローリーとリストはこの少年の底の深さに一種の恐怖さえ覚えていた。これほどまでの若さで、これほどまで最悪の事態を予想する少年。それは、一種の恐怖を覚えるに充分値するものであつた。その、今までの、生涯に對して。

「待て」

少年がグローリー、リストを制した。手をグローリーとリストの前に突き出したまま、少年は遠いものを見るように目を細めている。

「どうしたのだ？」

グローリーが訊ねると、少年は険しい顔をして答えた。

「……これ以上近づくと、気付かれる。結界魔法、それも遠隔の。

確かに、結界魔法ならば場所さえわかつていれば転移魔法のような

指定点がなくとも遠隔で発動する」とはできるが、これほどまでに

大な結界魔法とは、な

「どうするのですか?」

「様子見、と言いたいところだが、あの結界魔法は厄介だ。結界により異世界へと変幻した世界と術者が繋がっている。いや、正確には、結界により世界を切り取っているのか。確かに、それならば実際のスケールよりも小さくできる。あれほどまでに大きな要塞を造るため、まず空間のスケールを小さくしたのか。そうすれば、造るだけならその小さいスケールで作業することができる。作業時間の短縮と簡易化。おいおい、しかもこの術式、魔王のそれとは違うじやねえか。魔王以外にも、こんなもんができる奴が魔族にはいんのかよ。道のりは長そうだな、おい」

少年はどこか興奮した様子で声を上げる。

「よし。決定だ。グローリー、リスト。今すぐ突撃する。だが、お前らは絶対に戦闘に参加するな。隠蔽魔法をかけておくから、結界の術者にはばれないだろ?。しかし、俺の予想では、もう一匹、魔族が来るはずだ。要塞が出来た後に、その主となる者が、な

すると、グローリーとリストは慌てた調子で尋ねる。

「では、私たちはどうすれば?」

「見ておけ。俺の戦いを。そして、学べ。もつ俺とこつ生意気なガキに頼らなくても済むようにな」

第一節 - 9 - 少年感知（前書き）

少年感知。

## 第一節 -9- 少年感知

「ん？」

ピーピリー・ブリーがそんな声を上げた。

「どうしたのだ？」

「いやあ、なんか、侵入者が来たというかー」

それに魔王は眉をしかめ、しかしすぐにその表情を嬉々としたものに変えた。

「それは良い。……エレクトロ、聞こえておるか？」

『はい。なんでしょうか？』

エレクトロの声が聞こえた。魔王が通信魔法を使った結果だ。

「全力で向かえ。おそらく、ディープリースの仇はもうそこにいる

『……承知ツ！』

エレクトロの興奮した声を聞き、魔王はその表情を大きく歪ませた。

「さて。我也向かう準備をしておくか

だが、その望みは叶わない。

「ちよつ……！ 魔王様ツ！ 結界が、侵食されています！」

「なんだと？ それは真か？」

「はい。というか、これ、もしかしたら私より……」

信じられないことでも言つようにはピーピリー・ブリーは狼狽する。それを見て、魔王は大きく舌打ちをした。

「人間。どれほどまで、我らに逆らえば気が済むのだ」

少年は結界の中に入り、とある魔法を使っていた。

侵食魔法。相手の魔法を侵食し、自らの力とする魔法だった。

無論、何の条件もなくそんな力を使えるはずもなく、この魔

法にはある条件があつた。単純であり、それ故に、最悪とも言える条件が。

その条件とは、つまりは『相手の魔法を完全に理解し、それを覆すほどの技術があること』であった。

知識と技術。その両方が相手以上でなければ、この魔法は行使されないので。

そんな困難な条件を、少年は乗り越えた。  
実のところ、少年にとつて、侵食魔法の条件とは、好都合なものだつた。

それは、魔力量が魔族より少ない人間、回復することができない人間だからこそ、魔族から奪うことでしか魔力を増やすことができない人間だからこそ、の思いだつた。

もしも魔力量で条件が変わるのであれば、これほど少年にとつて不都合なことはなかつた。少年の魔力量は他の人間よりは大きいが、こんな結界魔法を扱えるような魔族より大きいかと問われれば、否と答えるより他はない。

それ故に、少年にとつては、このよつた魔法こそが真骨頂だつたのだ。

そもそも、人間は魔法を『理解』することによって初めて行使できるのだ。つまり、最初から一つの条件の内一つはクリアしているようなもの。

もう一つについては、賭けのようなものだつた。少年からしても、これほどまで綿密に編まれた結界を見るのは初めてだつた。おそらく、単純な技術では少年はこの結界を張つた魔族よりも劣つているだろう。

しかし、単純な技術でなくとも、良いのだ。

自らの知識を活用し、その魔法がどうやって編まれたかをその魔力を解析することによって知り、それにより、この結界にだけ通用する魔法を創りだす。

少年がやつたことは、簡単に言えばそんなことだつた。

単純な技術ではなく、それだけに集中することによって、その技術を覆すことのみに全力を尽くし、結果、侵食魔法は成功した。

「七百メートル先、要塞建設地点だ。そろそろ遠視魔法だけにしておけ。さすがに、視認されれば、ばれる。隠蔽魔法は結界に対してしか行使していられないからな」

#### 『了解』

少年の耳にそんな声が響いた。通信魔法を使っていた。既にグローリーとリストは少年の近くにはいない。遠くから見ているだけだ。少年は通信魔法を切斷した。

そして、脚に魔力を溜め、地を蹴る瞬間、魔法を発動させる。魔力が脚から回転するように噴出し、少年の移動を加速させる。数秒もかからず、少年は要塞が建設されている場所まで来た。魔王の消滅魔法により、クレーターが出来ている場所に。人間の痕跡が消えた場所に。

「誰か来た？　いや、見えない。妨害魔法か！　だけど、ここまで妨害魔法を人間如きが？　興味深いと同時に嫌悪感バリバリね！　私の結界を侵食しているってことは、もしかして、要塞も……！　ああ！　エレクトロ！　頼んだわよ！」

ピーピリーブリーが乱暴に頭を搔き、投げやりに叫んだ。

#### 『承知』

エレクトロはそれだけを通信し、通信魔法は切斷された。魔王は玉座で目を瞑り、何かを思案していた。

第一節 - 10 - 少年と犬の戦い（前書き）

少年と犬の戦い。

## 第一節 -10- 少年と犬の戦い

それは突然だつた。

少年はクレーターの中心部、すなわち要塞の中心部へと跳んだ。そして、要塞に触れ、その魔法を解析していた。

すると、少年はいきなり剣を抜き、構えた。

それを黒き衝撃が襲つた。

要塞の壁をなかつたかのように突破したその衝撃は、だが少年に防がれた。少年は顔をしかめ、衝撃が来た方向へ向かつて剣を振つた。剣から白い衝撃が放たれた。

少年が要塞の外を見ると、そこには犬のよつな魔族がいた。二対の紅き眼。四本の脚にも一対ずつ紅き眼があり、黒き体毛の中、尾の先だけが灰色だつた。

そして、その尾の先からざらつとした何かが絶えず空氣中に放出され、霧散して言つてゐる。

「ほう。今のを防ぐとはな」

魔族は言つた。感心したような声であり、その声はつまり、少年の攻撃も防いだことを意味してゐた。

「当然だ。殺氣を出しすぎなんだよ、知能あんのか?」

少年は挑発したように言つたが、魔族はそれに苛立ちを全く見せず、言つう。

「私はエレクトロ。魔王様が配下、第七將軍エレクトロなり。ディープリースが仇を討つために参上した。貴公をそれだと見受けするが、どうだ?」

「ディープリース、か。ああ、覚えているよ。お前のようにわざわざ自分の名を言つてから戦つた馬鹿な魔族だ。無論、俺が殺した」「そうか。ならば良い。……貴様を此處で殺し、ディープリースへの手向けとしよう!」

途端、魔族 ハレクトロの背から黒き魔力が放出された。それ

は抑えていたものを解放するようであり、事実、そうであった。

少年は直感した。これこそが、こいつの戦闘態勢だと。故に、警戒し、剣を構えた。

直後、少年の背後からエレクトロが迫った。

「なんつ……！」少年は驚愕し、振り返り、咄嗟に剣を振った。それはエレクトロの爪に当たり、両者共に弾かれた。

そしてエレクトロも驚愕していた。まさか反応されるとは思わなかつたし、まして自分の爪が防がれるとは思つてもみなかつた。人間如きの剣で、自分の爪が弾かれるなど、思つてもみなかつたのだ。

「流石は、ディープリースを倒した人間、とでも言つておこうか」

「お褒めにあずかり光榮だ。だが、犬つじろの攻撃を防いだくらいで、褒めるなよ」

少年は挑発じみた笑みを浮かべ、だがその目は笑つていなかつた。今、少年は必死だつた。必死に思考していた。必死に解析していた。

エレクトロがどうやつて一瞬で自分の背後に移動したのかを。転移魔法ではなかつた。転移指定点などを刻む時間などなかつた。だが、転移魔法でないとしたら、なんだ。なんなんだ。

必死に思考しながら、しかし、エレクトロにそんなことは関係ない。

エレクトロは口を開け　咆哮。文字に変換することなどできな  
い、轟音としか呼べないような咆哮と共に、その口からは黒い砲弾  
が発射されていた。

びりびりと少年の肌を轟音が震えさせ、黒い砲弾が少年へと向かう。少年は剣を構え、その砲弾を斬ろうとして、止める。少年は前傾姿勢で砲弾の方向へと飛び出し、魔力の噴出により、紙一重のところで砲弾を避ける。そのまま少年はエレクトロへ向かい、手に持つ剣を振つた。

エレクトロはそれを避けよつともせず、剣がエレクトロを通りすぎた。

「やつぱりかッ！」少年は舌打ちをして、真上に跳ぶ。直前まで少年がいた場所に青年の目の前にいるはずのエレクトロが青年の背後から黒い衝撃を放ち、地が大きく抉られる。

「その尾。そこから出るのは何か。ずっと氣になつてたんだ」

少年は話しながら、魔力を放出し、地に降り立つ。

「それが、やつとわかつた。良く良く考えれば、そうだな。簡単なことだつた」

「……人間如きが、私の魔法を見破つたと？」

「そう言つてるんだよ、犬畜生。そして、もうそれは征服した」

その言葉と共に、少年の身体を黒い影が覆つた。エレクトロはそれを見た瞬間に口を開け、咆哮。黒い砲弾が放たれ、少年を襲う。だが、少年は避けない。さすれば、当然少年に黒の砲弾は激突する。土煙が舞つた。

それを見たエレクトロは尾を思い切り振つた。「うおっ、と！」

尾の先からそんな声が聞こえた。

「よもや、本当に見破られているとは思わなかつたぞ、人間」「

「はつ！ 嘘こけ。思いつきりベストタイミングだつただろつが」「

「もしも貴様が私の魔法を見破つていた時のことを考えたまで」

「そうかよ。さて、お前の魔法はもう見破つたわけだが、どうする？」まだ続けるか？

「無論」

エレクトロが前足を振り上げ、地に叩きつける。それにより地が揺れるが、直前に跳んでいた少年には無効。少年は魔法を発動。黒い影が少年の身体を覆う。エレクトロの背から小さな黒い犬型の影が出現し、少年に向かう。少年は少し驚きながらも剣の一振りでそれを消滅。その隙にエレクトロは魔法で移動。先ほどまでいたエレクトロの姿が影のように消える。それを見た少年は魔力の放出により方向転換、右へ。すると、少年の肩にエレクトロの牙がかすり、だがそれだけで少年の肩は大きく抉れる。

「畜生の分際で、先読みなんかしやがつて」

「人間如きができることを、魔族ができるはずがないだろう」

「 そ う か。 な ら、 そ れ を 覆 し て や ろ う。 」

少年が言つと、肩が抉れた少年の姿が影のよつに消えた。

「何だと！」

エレクトロが驚き、だが狼狽せず、ただその身に黒き影を纏わせ  
る。

一 チェックメイトだよ

少年の姿がエレクトロの頭上に出現し、少年が剣を振ると、エレクトロの身体は真っ二つになる。だが、それもすぐに影となり、消える。

「諦める。もう、俺の勝ちだ。魔族如きにできることが、この俺に出来ないとでも思つたのか?」

間ににシ一。」そこからヒレクトーの声が聞こえた。すると、少年は呆れたように溜息を吐き、

だから、言つてんだる。この戦いは、最早、畜生如きには解り得ない領域へと到達した。お前の行動は全て見破つた。もうお前は俺に触れることすらできない。死ね、畜生。俺のために。俺の理想を実現するために」「

そして、数分後、少年の前には傷だらけのエレクトロが横たわっていた。

多くの傷。 様々な傷。 肉が露出し、その色も黒だつた。 血のようなものは流れず、ただ肉が焼けたような香ばしい臭いが鼻についた。  
「う前は強がつ」。 そして、口元もまあまあ高い。 だが、俺には呈

お前は強力だ  
そして 知能もまあまあ高い  
たが 僕には程遠い

「……人間、如きが。私を倒すとは、な」

「ああ、俺は人間だ。おそらく、最強の。だから、光栄に思え」「思うはずが、ないだろう。だが、貴様の力は、認めよう。喜べ。

「私に褒められるなど、我が部下ならば歓喜に震え、涙を流すぞ」

「誰が喜ぶか。バカが。まあ、俺もお前の力は認めてやつても良い。第七でこれなら、俺は魔王にはまだ敵わないな」

「当然だ。魔王様に、貴様如きが敵うはずはない。いや、それ以前に、私以外の將軍にも勝てるかどうか。お前は私だったからこそ勝てたということを忘れるな。全ての魔族が私のようだと思うと、痛い目を見ることになる」

「」忠告ありがとう。そんなことはわかつてゐから気に病むな。もし全ての魔族がお前のように誇り高いのならば、俺は魔族を滅ぼすことなど望まない。魔族の仲間になつて、人間を滅ぼしだらうよ

「」そうだつたら、と思つてしまつな。貴様ほどの力を持つ者が加われば、魔族に多大な益をもたらすことだらう。今でも遅くはない。魔王様の配下にはならぬか？」

「ならねえよ。俺は魔族を滅ぼすと決めた」

「何故だ？ 人間のためか。世界のためか。貴様は、どのような大義をもつて戦う？」

「違うな。俺の道に大義など無い。ただ自らのために」

「……貴様は、自分のために、魔族を滅ぼすと？」

「ああ。俺の理想は魔族のいない世界だ。人間が統治する世界だ。そんな世界で生きるために、俺は戦う。ただ俺のために、俺はこの世界を変える。魔族を滅ぼし、世界を治め、ただ俺が幸福を得るために。不幸を許さず、幸福に満ちた世界を創るために」

「叶わぬ夢だ。そんな途方もない夢を、何故想う？」

「それが俺の理想だからだ」

その言葉に、エレクトロは笑う。馬鹿にするよ。う。

「良いだろう。ならば、我が屍を踏んで行け。さすれば、私は貴様の脚を掴み、地の獄へ引きずつてやろう」

「それは結構……じゃあ、もう、終わりだ」  
言い、少年が剣を振り上げる。それにエレクトロはふつと笑い、「そうか。では、地の獄で貴様を待つ。魔王様に破れ、絶望するのを楽しみにしておく」

「言つてろ、犬畜生が」

少年は剣を振り下ろした。

第一節 - 11 - 魔王は……（前書き）

魔王は……

## 第一節 -11- 魔王は……

「……魔王様。出撃許可を」

ピーピリーフリーが抑えに抑えた声を発した。

「ならぬ」

「何故、ですか？」

「今向かうのは危険だ。エレクトロを倒したと言つことは、エレクトロの魔力を得たと言つことだ。エレクトロを倒したほどの者が、そのままエレクトロの魔力を得たのだぞ？ 貴様は、それに勝てると申すのか？」

「それはつ……！」

ピーピリーフリーが悲痛な声を発し、それに魔王は平坦な声で、「必勝ではないのならば不戦。故に、貴様の出撃を許可することは出来ぬ。解るな？」

「解り、ます。ですが、今だからこそ、とは考えられないでしきうか？」

「ああ。だが、エレクトロの死を無駄にすることは許さん。あれの死によつて、少しこれからの方針が決まった シャム」

魔王が呼ぶと、シャムが何処からか出現する。

「何でしきうか？」

「招集だ。將軍を呼べ」

「何人で」」やりますか」

「全員だ。エレクトロが死んだ今、だからこそ、解つたことがある。故に、全員招集しろ」

「御意」

シャムが消えた。

第一節 - 12 - 少年は……（前書き）

少年は……

## 第一節 - 12 - 少年は……

少年に呼ばれたグローリーとリストが見たものは、今までに見たことがないほどに強大な魔族だった。

無論、それにも驚いたが、それよりも驚いたのが少年の言葉だった。

「グローリー、リスト。お前ら、こいつの魔力を奪え」

その言葉に、グローリーとリストは啞然とした。何を言っているのだろうと本気で思つた。

その思いは当然だ。人間はその魔力を魔族から奪うことによって増やしており、その増える量はその魔族の最大魔力量である。そのため、魔族からすれば、人間は魔力を倒した魔族の最大魔力量をそのまま増やすことができる、なんてふざけているとしか言えないような存在であるが、それ故の欠点もある。

魔力が自然回復しないのである。

人間は魔力を使うと、その分魔力が消費され、それが自然に元に戻ることはない。魔族から奪うことでしか魔力を増やすことはできず、そのため、魔法を扱うには魔族を倒し、その魔力を奪わなければならぬ。

当然のことながら、奪う魔力量よりも多くの魔力を使って戦闘をしたとすれば、その総和はマイナスとなる。魔力を使ったのならば、その分を倒した魔族から奪わなければ損なのである。

しかし、故に、今、少年が言つていることはおかしい。

少年は此度の戦闘で多大な魔力を消費したはずである。遠視していたグローリーとリストから言わせると、見たこともないほどの魔力消費である。それほどの魔力消費をして、少年は彼らに魔族の魔力を奪え、と言つのである。なんともおかしい。

「何故だ？ 貴様は魔力を消費しているだろう。貴様が奪えば良いではないか。私たちは、何もしていないのでから」

「そうです。私たちは何もしていません。だから、この魔族の魔力を奪う権利は、貴方に存在するはずです」

そんな彼らの言葉に、少年は呆れるように溜息を吐き、

「お前ら、馬鹿だろ。それじゃあ、なんでお前らをわざわざ連れてきたのかわからねえだろ。半分以上が、このためだつての」

「ですが権利は貴方に……」

「うつぜえなあ。なら、権利が俺にあるのなら、それをどうしようと俺の勝手だろ。だから、お前らが奪え。それで良いだろ」

「屁理屈だ」

「屁でも理屈なら良いだろ。そもそも、魔法を使うのなら、理屈に囚われてんじゃねえよ。感覚と理屈を組み合わせて考えろ。理屈がどうでも良いわけじゃないが、それよりも重視するものも存在する。正しき天秤にかけよ。それにのみ正しき道は示される、ってな

少年の言葉には納得できなかつたが、間違つたことを言つているわけでもない。それに、魔力を貰えると言つのは本来であればありがたいことである。しかし、少年にはこれまでにも色々と世話になつている手前、この上少年が倒した魔族の魔力まで貰つと言つのは、気が引ける。

「……つたぐ。固い奴らだな。勘違いしているんだつたら、言つておぐ。これは別にお前らのためを思つてとか、そんなもんじゃねえ。俺は俺のためだけに行動している。お前らのためだとか、そういう善の心など俺には存在しない。これは、俺のためのことなんだ。お前らが魔力を得る。そうすることが、俺にとつての得なんだよ」

グローリーとリストがわけがわからぬと呟くような顔をする。

少年は再度溜息を吐く。

「お前らが魔力を得ることにより、この国の戦力を増強させる。お前らは魔法のセンスは良いし、それも俺が少しほとばしてやつた。お前らには、知識と技術の両方が充分に存在する。そこで、足りないのは魔力のみだ。故に、俺はお前らに魔力を貰える。されば、お前らは俺が認めるレベルに達する。つまり、俺が手を貰さずとも、

もう良くなる。お前らが持つ知識、技術をもつて、部下を鍛える。そして、強くなれ。お前らだけでも、魔族に侵攻することが可能になるほどに。……わかつたか？俺は、俺のためにお前らに魔力を与えるんだ。もう、お前らに手を貸すのは面倒くさいから、それが嫌だから、お前らに魔力を与えるんだ。わかつたら、さつさとその魔族から魔力を奪え

少年はそんなことを言った。

その言葉が嘘のようには思えなかつたし、事実、少年は本心からそんな言葉を放つていた。無論、ただ言葉だけ聞いたならば、自分の本心を隠すのがとてつもなく下手な言葉であると言う印象、噛み砕いて言うのであれば、本当は相手のためなのだけれどそれを正直に言うのは恥ずかしいから嘘を吐いたけど、その嘘が下手であると言つ印象を受けるであつ。しかし、少年の言葉は紛れもなく本心であり、つまりは本心からグローリー・ヤリストに魔力を与え、いわゆる自立をさせると言つことを自分のためにすると言つているのだ。グローリー・ヤリストでさえ、少年が本心で言つてているのかどうかを疑うくらいに紛らわしいが、少年がたつた今言つたことは紛れもなく本心なのである。

「……では、頂きます」

リストが遠慮がちに会釈をし、エレクトロの死骸へと歩み寄り、その手をかざした。

「未だに納得はしかねるが、貴様に従い、私も頂こう

グローリーは無理に尊厳な口調をしながら、リストと同じようにして、手をかざした。

すると、エレクトロの死骸から膨大とも言える魔力が彼らの体内に流れ込んだ。

「なあッ！」「むうッ！」思わずそんな声を上げてしまうほどの膨大な魔力。彼らの体表に血管が浮かび上がり、その中を魔力が這いすりまわる。彼らの体内で魔力が暴れ、肉体が拒絶反応を示す。膨大すぎる魔力が突然体内に流れ込んだことによる拒絶反応であった。

全ての動脈がはつきりそれとわかるほどに浮かび上がり、目が血走る。耳鳴りがする。呼吸ができず、肺が締め付けられるような感覺に襲われる。喉も胃も、全ての器官が締め付けられるような感覺。否、感覺だけではなく、実際に締め付けられているのかもしない。胃液で口内がいっぱいになり、とても苦い。眼球が今にも飛び出してしまいそう。痛み。苦しみ。不快感。様々な感覺が体中を巡り、暴れまわる。

どのくらい時間が経つたのか、やがて、それは終わった。  
「ぜえぜえ息を吐きながら、彼らは地に倒れ伏していた。その近くには吐瀉物がぶちまけられており、つんと鼻を刺す臭いがする。彼らの口の周りにはそれと同じものが付着しており、今はそれと土が混ざっている。汗で身体中がびしょびしょに濡れ、顔面は蒼白。ふるふると身体が痙攣している以外には、何の動きもない。」

その近くには、既にエレクトロの死骸はなかつた。魔力が奪われるにつれて、その肉体は影のように消えていき、ついには完全に消えてしまつたのだ。

「結構耐えたな。最低でも失禁するとは思つてたんだが、まだ意識があるじゃねえか。これは予想以上だ。お前ら、やつぱり見込みがあるよ。王の配下から離れ、俺と来ないか？」

笑いながら言う少年に対して、彼らは揃つて力なく首を横に振つた。

第一節 - 13 - 魔王の決意、少年の始まり。（前書き）

魔王の決意。少年の始まり。

## 第一節 -13- 魔王の決意、少年の始まり。

魔王が言った。

「エレクトロが死んだ」

それは集まつた魔族たちに大きな衝撃を与えた。

「これがどう言うことか、解るな？」

魔族たちは微動だにしなかつた。解らなかつたからではない。応える必要すらなかつたからだ。

「そうだ。故に、これより方針を変える。シャム」

「此処に」

魔王が言うと、シャムがその横に現れた。

「では、これより始めようか。人間どもを駆逐するための、本格的な会議を、な」

この日から、魔族たちの動きは大きく変わつた。

まず、人間の街への侵略行為がなくなつた。

これにより、人間たちは大いに喜んだ。

次に、人間が魔族に襲われる事例がなくなつた。

無論、これについても人間は大いに喜んだ。

しかし、それはこれより始まることの準備にすぎなかつた。

それに気付いている人間は、一握りしかいなかつた。

そして、それを好機だと見る人間は、ただの一人しかいなかつた。ある少年だけしか。

第一節 -13- 魔王の決意、少年の始まり。（後書き）

第一節 終了です。

第一節 -1- 青年となつた少年（前書き）

第一節 始まりです。

## 第一節 -1- 青年となつた少年

ルージュの腹が裂かれ、そこからハラワタが引きずりだされた。すると、魔族はルージュの身体をぽいとそこらに放つた。

レナリーはそれを恐怖に震えながら見ていた。

彼女たちの住む村を、突然、魔族が襲つた。

ここ数年はなかつた魔族の襲撃に、しかし村の人間たちは対応できた。村の人間たちは、数年なかつた魔族の襲撃に対しても油断していなかつたのだ。村の自警団は皆、訓練を少しも怠らずにこの数年を過ごしてきた。

それが無駄だつたことが今日わかつた。

「ひつ、ひいつ！ こ、来ないでえ……」

レナリーは腰を地に落とし、そばかすが特徴の顔を涙や鼻水でくしゃくしゃにしながら声を上げた。立とうとしても立つことができない。下半身に全く力が入らず、やつとのことで腕が動かせるくらいだ。腕が動かせても何の意味もないが。

魔族はルージュの身体を放つた後、レナリーの方を見た。レナリーは悲鳴を上げられなかつた。その喉を魔族の腕に掴まれたからだ。

その魔族は人間のような身体を持つていたが、首はなく、脚が四本、腕は十六本あつた。体長は五メートルもあり、その腕の一本一本がレナリーの身体より大きかつた。その肌の色は黒い。眼球は人間と同じようなものが、十六本の腕にびつしりと埋まつている。

その腕の一本に、レナリーの喉は掴まれたのだ。いや、つままれたと言つた方が適切かもしない。それほどまでに魔族の腕は大きく、逞しかつた。

私、ここで死ぬの……？

レナリーはそんなことを思つていた。まだまだしたいことはたくさんあつた。やり残したことはたくさんあつた。

だが、そこでレナリーは違うことに思い至った。

みんなが死んじゃつたら、もう、意味なんて、ない。

皆、死んだのだ。レナリーを除いた全ての人間が死んだのだ。ならば、もう生きる意味なんてないのではないか。そう、ないのだ。もう、生きる意味などは存在しない。だから、私はこれから、皆のいるところに行くのだ。きっと。きっとそうなんだ。死後の世界へ。楽園へ。私たちは行くのだ。なら、もう、死んだって、良い。死ぬ方が、良いのだ。

レナリーは笑つた。涙と鼻水でくしゃくしゃになつた顔を、無理矢理笑みの形に変えた。

それはぎこちない笑みだつた。あきらめたような笑みだつた。魔族の腕に力が込められ、レナリーの喉は圧迫され、呼吸ができないなくなる。

苦しみが脳を支配した。

どんどん腕の力は増し、どんどん痛みが増す。

呼吸ができない。首が痛い。

それだけのことと、レナリーは、無意識の内に、思つた。

先ほどまでに思つていたことなど、全て吹き飛んで。

ただ一つ、強く、強くこう思つた。

死にたくない。

そう思つたが故に、レナリーは精一杯抵抗した。からうじて動く腕で何度も魔族の腕を叩いた。脚をばたばたと動かし、魔族の腕を蹴つた。無論、それは魔族には何の傷も与えない。何のダメージも与えない。

魔族は無駄なことをするレナリーを見て、笑つた。口などは存在しないが、その腕にある眼球で、確かに笑つた。

するとその眼球が抉られた。

「クズが。人間様に手を出してんじゃねえよ」

次にレナリーの喉を掴む腕が斬られ、すとんとレナリーは地に落ちた。

レナリーは「ほほ」ほど大きく咳をした。流れていた涙が目に溜まり、少しの間、何も見えなくなつた。

そして、レナリーが目を拭い、顔を上げた時、そこににはぱりぱりになつた魔族と一人の青年がいた。

精悍の一言を身体で現したような容姿。髪は夜の闇に似た黒。長く重そうな剣を片手で持ち、しかし防具の類は何も身につけてはないようだつた。

「……え？」

レナリーは思わずそんな声を上げていた。今の状況を受け止めることができなかつたのだ。無論、受け止めることができたとしても、そんな声を上げていただろうが。

すると、青年はレナリーの方に目を向け、嬉しそうに「良かった」と笑つた。

だがすぐにその顔を曇らせた。その視線の先には、大勢の人間の死骸が転がついていた。

「すまんな」

それにレナリーはふっと顔を上げた。

「俺が、もう少し早く着いていれば、こんなことにはならなかつたのに」

そう言つた青年の顔は、とても悲しげで、申し訳なさそうであつた。

この時、青年は十七歳となつていた。

第一節 - 2 - 青年宣言（前書き）

青年宣言。

「飲め」

そう言つて青年はひょいと何かが入つた瓶を放り投げてきた。レナリーは両手でそれを掴み取り、「……これは?」と首を傾げる。「薬だ。味は保証しかねるが、魔法で作つた薬だから、効果は期待して良い」

レナリーは瓶の中に入つてゐる液体をじつと見つめた。緑色で、どうつとしている。瓶の口に鼻を近づけると、なんだか嫌な臭いがした。

「そんな警戒すんな。大丈夫だ。なんなら、俺が飲んでみせようか?」

そう言つと、青年はレナリーが答える前にレナリーの手から瓶を奪い取り、口を付け、瓶を傾けた。『ぐくつと喉が鳴り、青年は瓶から口を離し、変な顔をした。』「……いや、やっぱり不味いな」

そう言わると飲む気が失せてしまうのが人間である。そしてレナリーはれつきとした人間であり、無論、そんなことを言われると飲む気が失せてしまったのである。

故に、青年から差し出された瓶を嫌そとに、だがやんわりと拒絶しようとしたが、青年は顔をむつとしかめ、無理にレナリーの方へ瓶を押し付けた。最早こうなると、自分だけ不味いものを飲んだことが気に食わないからレナリーにも同じ気持ちを味あわせてやろうとでも思つてゐるようである。そして事実、青年は半分くらいそう思つていたのである。

ぐいぐい押しつけられても拒絶するレナリーに業を煮やしたのか、青年はレナリーの頭を掴み、思い切りその瓶の口とレナリーの口をくつつけた。レナリーは口を一文字に閉ざしてはいたが、青年の力に敵うはずもなく瓶の口がレナリーの口内へと入れられた。どうとした液体がレナリーの口内に入り込み、それは喉を通り、胃に落ち

る。

すると、青年は瓶をレナリーの口から抜き出し、満足そうに笑つた。レナリーはその液体の余りの不味さにむせながら、この人、嫌な人だ、と思つた。

「どうだ？ 治つただろ？」

青年に言われ、まず何のことだらうと思つたレナリーであつたが、その問いの答えにはすぐに思い至つた。喉の痛みが消えているのだ。さきほどまでの傷が癒えていたのだ。

レナリーはまず驚いた。まさかあんな薬にそれほどまでの効果があるとは思わなかつたのだ。青年の言つことが嘘ではないことはわかつていたつもりだが、ここまで効果とは思わなかつた。魔法によつて作られた薬でも、ここまで即効性を持つ薬など聞いたことがなかつた。レナリーの住む村は確かに都から離れてはいるが、それほどまでに情報の伝達が遅いとは考え難い。魔法学の発展により、様々なものが開発され、情報の伝達のスピードも以前とは段違いになつたのだ。

しかし、青年の持つていた薬ほど効果のあるものは聞いたことがなかつた。そんな薬があるのであれば大ニユースになるはずであるが、そんなことはたつたの一度も聞いたことがない。

「その薬は俺が以前いた国で開発された薬でな。俺もそれに協力したんだよ。感触と味はまだまだ改良中らしいが、それは俺の範囲外だ。だから、その時点でのサンプルをもらつたつてわけだ。一応は、現代魔法学の最先端技術の結晶だ。そんなもんを飲むことができたんだ。俺に感謝しろ！」

青年は傲岸不遜な調子で胸を張つた。いやはや謎は解けたが、こんな人がそんなにすごい人だとは微塵も思えない。しかしそれ以外にこの謎の答えはなく、つまりはこの青年の言葉を信じる他ないのである。

「なんで、そんな貴重なものを、私に？」

青年の言葉を聞いてレナリーがまず思つたのはそれだつた。そん

な貴重なものを何故自分に与えたのだろうか。自分はそんなに重傷でもなく、ただ喉が痛かつただけなのに。

その質問に青年が簡単に答えた。

「当然、俺がそうしたかったからだ」

無論、レナリーにとつては当然ではなかつた。

「したかつたから、つて。どういうこと、なの？」

レナリーには青年の言つたことが咄嗟に理解できなかつた。いや、咄嗟でなくとも理解はできないだろう。レナリーにとつて、そんな貴重なものを『したかつたから』などという理由で他人に、しかも今日初めて会つたような他人に与えるなど、考えられないことであつた。

しかし青年にとつてはそうではなかつた。

「そのまんまの意味だ」青年は何故わざわざそんなことを訊ねるのか心底不思議なように言つた。「俺がしたかつたから。お前が傷に痛むのが我慢ならなかつたから。俺が治してやりたかつたから。感謝してもらいたかつたから。あわよくば俺に好意を抱いてほしかつたから。礼として何かもらいたかつたから。偽善でも何でもいいから良いことをやつたという満足感を得たかつたから。あと、この不味さがどれほどのか他人にも味わつてやらせたかつたから、とか。まあ見返りが欲しかつたから、つてわけだな」

青年はさらつとそんなことを言つた。それは青年の本音なのかもしれないが、もしさうなのだとしたらどれほど馬鹿正直なのだと思う。恥ずかしい言葉も、自分の欲望に塗れた言葉も、何でも正直に言つた。成程それは確かに『したかつたから』という理由ではある。レナリーは困惑していた。これこそ当然である。感謝してもらいたい、礼として何かもらいたいとはつきりと言われるのは初めてであつたのだ。いや、それは良いとしても好意を抱いてほしかつた、など……。レナリーは顔を髪の色と同じように赤くした。そんなことを言われるのは初めてだつたのだ。

誰でも他人に優しくする時はそういう『見返り』を心の奥底で求め

るものであるかもしだれないが、それを面と向かってはつきりと言わ  
れれば、困惑してしまうのは当然である。

「何、顔を赤くしてんだよ。俺に惚れたか？ それはとてもとても

嬉しいが、やめといた方が良いぜ」

青年は肩をすくめながら笑つた。それを見て、レナリーは顔をむ  
つとしかめた。

「そんなわけないじゃない。誰が、あなたのことなんかつ

青年の言葉は「冗談のように聞こえたし、実際、「冗談なのだろう。そ  
んなことはわかりきつていたが、それでも自分の言葉を抑えるこ  
とはできなかつた。その理由はよくわからないが、感情に理屈など  
ないので気にしていても仕方がない。

「ん。そうか。なら、絶対にそうしておけ。俺はお前に好意を持つ  
てもらいたいが、同時に好意を持つてもらつては困るからな

「なつ……。わけわかんない。どういうこと？」

「俺の征く道は茨の道だからだ。俺は茨などで傷つくな」とはないが、  
俺以外の人間は簡単に傷ついてしまう。簡単に言えば、危険なんだ  
よ。俺と共に、征くことは

そう言つた青年の顔は精悍そのものであつた。その目に宿る意志  
は途方もなく強大であることが容易に感じ取れたし、事実、青年の  
意志は途方もなく強大だつた。

何故か。それは簡単だ。

「あなたの、道つて？」

「魔王を倒し、魔族を滅ぼし、人間の世界を治める。そんな道だ」  
一言で言つならば、霸道。

それこそが、青年の意志だつたからだ。

「はあ？ そんなこと、できるわけ……」

言いながら、レナリーは思い出していた。先ほどのことを。青年  
が一瞬でレナリーの村を襲つた魔族を殺したこと。

「できる、わけ……」

それに、この青年は、あんな薬を持っていたじゃないか。最先端

技術の結晶。それを手にするほどの実力。それが、この青年には、確かにある。

しかし、それでも魔王を倒すことなど、途方もない話であった。途方もない夢。叶はずのない夢。

「だけど」

「そう。だけど、信じたい。」

叶はずのない夢。そうだったとしても、信じたい。彼のこと。彼の言葉を。

何故、そんなにも信じたいと思うのだろう。レナリーは疑問を覚えたが、その答えは、すぐに導き出された。

魔族を滅ぼす。

それは、今のレナリーにとつても悲願そのものであったのだ。自分ではできるはずもなく、だが、どうしてもあきらめられない。そんな夢。

それを、もしかしたら実現できるかもしれない人が、実現しようとしてくれている人が、今ここに、いるのだ。はつきりとした意志を持って、それを実現しようとしている人が。

それを、否定など、できるだろうか。

私の願いを、叶えてくれるかもしれない人を、否定することなどできるだろうか。

否定してしまっては何もできない。全ては信ずることから始まる。私が信じなくて、誰が信じる。同じ願いを持つ者ならば、信じなければいけないだろう。それを叶えたいのならば、それを不可能と断じてはいけないのだ。自分の願いを不可能と断じてしまってはいけない。それでは、私は、何のために生きているのだ。自分の願いを否定して、生きる意味なんてあるのか。願いこそが生きる意味なのではないのか。

「……だけど、信じる。あなたが、魔族を滅ぼすって。滅ぼしてくれるって」

もちろん、自分にそれができるとは思ってはいない。

だから、託す。

「あなたの言う通り、私じゃ、あなたと共には行けない。だけど、だから、信じる。あなたが魔族を滅ぼしてくれるって。私の復讐をしてくれるって」

レナリーは真っ直ぐ青年に目を向けた。青年はその目を真摯に見つめ返し、鼻で笑う。

「お前の復讐？ そんなもん、俺には関係ないな」

青年はレナリーに背を向け、その腰に携えた剣を鞘から抜いた。「だが、背負つてやるつ。その代わり、感謝しろ。俺に感謝しろ。俺を讃えろ。俺を褒めろ。この世にある全ての贊辞を俺に捧げる。そうすれば、背負つてやる。お前の復讐を。魔族に殺された全ての人々の復讐を。憎悪を。怨念を。怒りを。恨みを。全ての負の感情を背負つてやる。そして、魔族を滅ぼしてやる。殲滅してやる」

青年は剣を掲げ、誓うように叫ぶ。

「俺の生は俺の為にある。故に、俺は俺の為に他の業を背負おう。他の悪意を背負おう。贊辞を捧げられることが、すなわち俺の願いの一つだ。故に、他の業や悪意を背負うことにより、他から贊辞を捧げられる為に、俺は他の願いを叶えよう。讃えよ！ されば、俺はその為に力を尽くそう！ 全ては我が欲望の為に！ 夢の為に！ 理想の為に！ 俺は、魔王を倒す者だ。己の為だけに生きる者だ。俺は俺の為に、全てを背負おう！」それを、ここに誓おう

言い終えると、青年は剣を下ろし、レナリーの方を振り向いた。青年は優しく笑っていた。

それにひられて、レナリーも笑つた。

第一節 - 3 - 一つの別れ（前書き）

別れ。

## 第一節 - 3 - 一つの別れ

「じゃ、ここに立て

地面に何かの紋様を描くと、青年はそつ吐した。

「ここに?」

レナリーは不思議そうに首を傾げた。

「ああ。今、ここを指定した。一度使えばもう一度と使えないような簡易的な指定点ではあるが、それでも一度は使える」

青年は何でもないようになに言つたが、こんなことが可能であるといふことは魔法学を学んだことがある者ならば充分驚愕に値する。簡易とは言つても、転移指定点は転移指定点である。転移指定点を刻むことは、魔法学を数年学んだ者でやつと可能かどうかといふところだ。そして、それは刻むことが可能であるにすぎず、それにかかる時間は途方もないものである。魔法学の権威であつても、数日はかかるはずだ。簡易的なものであつても、それにかかる時間は数時間以上である。つい。

それを青年はたつたの数分でやつてのけたのだ。その凄さは異常とも言える。

無論、レナリーは魔法学など学んだことがないのと、その凄さがわかるはずもなく「そうなんだ」としか応えることはできなかつた。「あつちに着いたら、ちゃんと俺について話せよ。そうすれば、待遇がかなり良くなるはずだ。俺はあいつに借りがあるし、あいつは借りを返す奴だ。どつかの王よりは無能だが、そこだけは信頼しても良い」

「魔王を倒す者、つて言えば良いんだよね?」

「ああ。そう言えば云われるだろ? 魔王を倒すなんて言つ奴は、俺くらうだらうからな」

レナリーは青年が描いた紋様の上に立つた。青年は満足そつこうなづく。

「じゃ、飛ばすが、準備は良いか？」

青年が地面に描いた紋様に手を添えた。

「うん。……あ、ちょっと、待つて」

「なんだ？」

「ありがとう、つて、言いたくて」

青年ははつと顔を上げた。すると、レナリーは笑っていた。

「そう言えば、言つてなかつたから。どうしても、言いたかつたのレナリーは恥ずかしそうに笑う。それを見て、青年は呆然としていた。

「あの魔族を殺してくれて、ありがとう。村のみんなの仇を討つてくれて、ありがとう。そして、私を助けてくれて、ありがとう。あなたがいなかつたら、私はきっと死んでいた。

最初は、なんで助けたのか、そう思つた。村のみんなが死んだんだから、私も一緒に死にたかつたんだ、つて。だけど、本当は、違うの。私、生きることができて、とっても嬉しかつた。私は、生きたかつた。どうしようもなく、生きたかつた。死にたくなかつた。だから、とっても嬉しかつたし、感謝もしてる。

「ありがとう。この恩は、一生忘れたりしない。私は、あなたを忘れない。あなたに、この世で一番の幸運がありますように」

レナリーはそう言つて、胸の前で手を組んだ。祈るよつて、手を組んだ。

「そう、か。そう、なのか。……は、ははつ」

青年は嬉しそうに笑い始めた。本当に、心の底から嬉しそうな笑いだつた。

「……ありがとう。俺からも、言つておくよ」

青年の言葉にレナリーは一瞬、不思議そうな顔をしたが、すぐにその顔を笑みに変えた。

「うん。どういたしまして」

「じゃあ、飛ばすぞ。もつ、何もないな？」

「ないよ」

レナリーが言うと、青年は描いた紋様に添えた手に魔力を流した。すると、魔力は手から紋様へと流れて行く。紋様が光り、レナリーの身体を包み込む。

「さよなら。またね」

その声と共に、レナリーの姿は光と共に消えた。

「……ああ。必ず、いつかまた」

青年は剣の一振りで紋様を消した。

第一節 - 4 - 侵攻開始（前書き）

魔族は侵攻を開始する。

## 第一節 -4- 侵攻開始

「さて。そろそろ征くか」

魔王の前には数十の魔族が跪いていた。

「待ちくたびれましたよ、魔王様」

「第七だけではなく、第十五、第十八、第一十四までもが今までに殺され、しかし、ずっと待機をしてきました。しかし、やつと、できるのですね」

歓喜が声に滲み出でていた。それほどまでに、彼らは喜んでいた。「左様。テストも予想通りであったからな。千分の七。それだけしか、此度の襲撃では殺されなかつた。それほどまでに、人間どもは、油断している。故に、今こそ、征く時だ」

魔王がその顔を不敵な笑みに歪めた。

「我が此処に命ずる。人間どもを、駆逐せよ」

魔族たちは雄叫びで応えた。

とある少年が第七エレクトロを殺してから、三年の年月が流れていた。

エレクトロが殺されてから、魔王は驚くべき命令を下した。

人間を殺すな。

それはエレクトロを殺され、激昂していた魔族にとつては尋常もなく難儀なことだった。

しかし、魔族たちはそれを達成した。

達成できた理由、それは魔王の命令は絶対であり、正しかつたからだ。

全ての魔族は魔王をこれ以上なく慕っていた。それは、魔王が強かつたから、という理由だけではない。

強さだけでこれほどまでの統治を成すことは不可能だ。しかし、魔王はやってのけた。

それは魔王がそう言つ魔族であった、と言つ他ない。

全ての魔族に、この御方に従おう、と思わせた魔族であった、と言つ他はないのだ。

魔王の強さに惚れ、魔王の意志に惚れ、魔王の思想に惚れた。

魔族たちは、魔王をこれ以上なく慕つていた。

故に、人間を殺すな、というような命令を受け入れたのだ。

そして、その命令は魔族たちが期待した通り、意味ある命令であった。

人間を完全に駆逐するための、意味が。

魔族は人間とは違い、その魔力を増やすことはできない。

しかし、その魔力は自然に回復していくのだ。魔族から奪うことではしか、魔力を回復することのない人間たちと違つて。

故に、魔王は魔族たちに『人間を殺すな』と命じた。

人間を殺すな　今の彼らに人間を殺す以外の業務は存在せず、故にその命令は、待機しておけという意味だ。全ての魔族がそれを実行すればどうなるか。

その結果が、現在の状況である。

人間側から攻め込まない限り、人間は魔族を殺すことはできず、つまり、人間は魔族から魔力を奪うことはできない。

しかし、人間たちにそんな戦力がある者は圧倒的に少ない。

無論、例外は存在する。エレクトロを殺した人間や、その人間が手を貸したと思われる軍の者。彼らは魔族に攻め込むだけの力を有していたし、実際に、攻め込んだ。その結果、殺された魔族も存在する。

当然のことながら、攻め込まれた魔族は戦つた。人間を殺すな、と命令されていたが、同時に攻め込まれた場合はその限りでないとの命令もされていたのだ。

しかし、その魔族たちは殺された。

まず第十五、第十八、第二十四といった將軍。彼らは第七エレクトロを殺した人間が殺したと考えられている。

その他に殺された魔族は、人間の大國に隣接した場所はその国の

軍によつてと考えられているが、人間の大國から離れた場所の魔族はすべてエレクトロを殺した人間と同一人物であるとも考えられている。

そのようにして、魔族は殺された。  
しかし、それは準備でしかなかつた。  
魔族が人間に侵攻する、準備でしか。

第一節 - 5 - 傲慢な青年（前書き）

青年は傲慢に。

## 第一節 -5- 傲慢な青年

青年はその脚から魔力を放出し、物凄いスピードで移動していた。青年の眼前には魔法によつて描かれた地図のようなものが浮かび上がつている。

青年の目的地は、人間の集落。それ以外には特に決めておらず、とりあえず人間がいる場所であれば何処でも良かつた。

何故青年がそんなことをしているのか、それは青年の目的成就の為であった。

青年の目的とは、全ての魔族を駆逐すること。

だが、そんなことを青年一人ができるはずもなく、故に、青年は自分と共に魔族を駆逐する仲間を探していたのだ。

国があれば、その軍に力を貸し、王に恩を売り、魔法の才がある者を探すと言つた風に、青年は仲間を探しながら、その国 자체を強化していた。

魔法を研究している場所があれば、それに力を貸し、研究結果を貰つたりした。

青年はそのようにして、世界を巡つていた。

ただ、魔族を滅ぼすために。

「お」青年の視界に、街らしきものが映つた。青年は方向転換し、その街らしきものまで行く。門に着き、青年はその脚から魔力の放出をやめた。

門には二人の衛兵が呆けた様子で立つていて、青年の姿を見るその手に持つ槍を青年へと向けた。

「何者だッ！」

「世界を巡つてゐるんだよ。わかつたら、それを收めろ」

青年は衛兵を睨んだ。いきなり槍を向けられて良い氣をする者はいないだろう。

衛兵はびくつと身体を震えさせた。だが、槍は收めない。

「収めない、か。まあ、収めたら収めたで駄目だが。それにしても、毎度毎度面倒臭いことだ。魔族の襲撃はここ数年ないつてのに人間がその戦力を維持しているのはありがたくもある。だが、魔族と言う敵がいるにも関わらず、未だに人間同士で戦争してるのは、やつぱり愚かとしか言えないよな」

青年は呆れたように溜息を吐き、その手を衛兵たちに向かた。衛兵たちはその手を見て驚き、ぺこぺこと頭を下げる。

第一節 - 6 - 青年訪問（前書き）

青年の訪問。

「権力に屈するのは当然であり、屈しなかつたらかなり面倒だが、やはり好かんな」

青年は自分の手の甲に刻まれた紋様を見て言った。魔力を流した時に浮きあがるようにされた紋様である。この紋様はこの国の王にしか刻めないものであるらしく、つまりその紋様を刻まれた者は国王に認められたという証を得たことと同義となるらしい。

「って言つても、これくらいの魔法なら、解析すれば簡単にできるんだがな。俺じゃなくても、今ならけつこうな数の人間ができるだろう。グローリーとかリストとかなら、これを見せただけで三時間も経たず完全に模倣できるようになるんじゃねえか？ 俺は実際に刻まれたから、一秒とかからなかつたが」

言つて、青年はくつくつと笑つた。あの時の王の顔は忘れられない。自分の力量を認めたからこそ、この紋様を自分に刻んだんだろうが、あそこまで早く解析されるとは思つてもみなかつたんだろう。確かに、数年前までの自分なら数分はかかつただろう。しかし、魔法学は常に発展し続けている。それは、自分も同じことだ。

軒並みいる魔族が襲撃を仕掛けたくなつたせいで、わざわざ自分から魔族の方に出向かなくては魔力を補給できなくなつてしまつた。元より魔族は駆逐していくつもりだつたから別に良いのだが、やはり自分から出向くのは面倒であった。

一つ魔族の拠点を見つけると、そこにはかなりの数の魔族がいるのだ。それを倒しただけ青年の魔力は増加するわけであるが、逐一倒していくのはやはり面倒くさかつた。

無論、自分から出向くことによるメリットも存在した。人間を襲撃するような魔族は低級なものが多く、それから学ぶようなことは一切存在しなかつた。しかし、魔族の拠点にいる魔族の中には強い魔族もいた。

青年が今までに戦つた中で単純な戦闘能力が最も高かつた魔族は第七将軍エレクトロとかいう犬つじろである。あれからは見たことも聞いたこともないような魔法を学ぶことができた。もしも自分と同じほどの頭を持っていたのなら、確実に自分は負けていただろう。少なくともそれほどには強かつた。

あれが始めて戦つた「将軍」という位の魔族であった。そしてそれ以降、青年は合計三匹の「将軍」を殺した。そのどれもが強大であり、中にはエレクトロよりも厄介なものもいた。しかし、青年が常に成長していた。エレクトロと戦つた頃ならば苦戦しただろう敵も、今ならば苦もなく、殺すことができる。

「そもそも、犬つじろとは相性が良かつただけなんだよなあ。あいつがあそこまで正々堂々と戦わなかつたら、俺は確実に負けていただろうし。先が読めすぎるんだよな、あいつは。もし人間だつたのなら、俺がしつかり教育してやつたんだけどな」

青年は溜息を吐いた。むりん、そんなことは叶わぬ夢であり、ただ「もしもそうであつたのなら」ということを言つてはいるだけである。

「つと。じー、かな」

青年は歩を止め、目の前に立つ門を見る。街の外門ほどではないが、結構な大きさだ。

「何者だ」

そう言つて門番に向かつて、青年は手を門番へと向けた。すると門番は顔を真つ青にして耳に手を当てた。通信魔法を行使してくるようだつた。

内容を軽く盗聴すると、

『王紋を持つ御方がいらっしゃいました。お通ししますか?』

『どんな奴だ?』

そこで門番はちらと青年の方を見た。

『とても若い男です』

『ほう。それは、私より、か?』

『はい。貴方様よりも、おそらくは

『それは面白いな。通せ。許す』

その声と同時に、通信魔法が途切れた。

「お許しが出来ました。どうぞ、お入り下さい」

「ああ。御苦労」

門が開き、青年はその建物の中へと入つていった。

第一節 - 7 - 会話（前書き）

青年と女性の会話。

「貴様が、王紋を持つ者か?」

その女は、まだ二十歳にも達していないような女だった。

雪のような髪と肌。エメラルドのような目。唇は薄く紅い。長身で、すらりとした身体付きをしてくる。妖艶といった言葉が似合つような女だった。

「その通りだ。ほら」

言つて、青年は自分の手を女に向けた。女は「ほう」と感嘆の息を漏らし、愉快そうに笑いを浮かべた。

「歳は?」

「十七」

「何故、それほどの若さで王紋を授けられた?」

「お前も持つてんだろうが。隠しても無駄だ」

その言葉に女は少しだけ驚いたような表情を見せた。しかし、すぐにはその表情を笑みに変えた。

「何故、わかつた?」

「俺ほど魔法に精通していると、無意識の内に魔法を解析しちまうんだよ。お前にかかる魔力くらい、全てお見通しだ。その用心は良いが、客人を少しばかじってくれないかね。どんだけ魔法障壁を張つてんだよ」

「恐ろしいではないか。私もこの年齢だからな、色々と危険なのだよ

「嘘吐け。俺が見る限り、お前はけつこうな魔法の使い手だろ。俺の足元にすら及ばないが、それでも、まあまあだ。魔族ならまだしも、人間には負けないだろ」

「まあな。そのために、私はこの街に魔法学校を設けていないのだから。もし設けてしまえば、私の反乱分子が魔法を学び、攻めてくるかもしれないからな」

「やつぱりそつか。この街には魔法が少なすぎると思つてたんだ。

「ことは、魔法を使える奴は、全員外部から来た人間つてことか」「左様。と言つても、全て私よりは劣つてゐる者だがな」

「それでも、念には念を入れて、か。慎重すぎるぜ、お前」

「慎重すぎるくらいで良いのだよ。自らの命に關しては、慎重になりすぎるところなどないのだから。現に、貴様は私よりも強いだろう。この障壁は、こんな時の保険だ」

そう言つて、女は不敵に笑つた。それに、青年は暴虐な笑いで応えた。

「どじが保険だ、馬鹿が」

その言葉と同時に、青年は女の方へ手を向けた。

すると、どじ、という轟音が響き、女の前に張られていた全ての魔法障壁に大きい穴が穿つた。

「俺くらいを相手にするなら、こんなもん、保険にもなりやしねえ女ははつと顔を上げた。目の前に青年がいた。移動したことに気付かなかつた。気付けなかつた。

青年がいつの間にか女の眼前に立つてゐるのを見て、周りの兵たちは自らの武器を構えた。「下げる」青年が言つと、兵たちは一斉にその武器を下げた。もちろん、兵たちは自分の意思で武器を下げたわけではない。青年がその言葉に魔法を込めたのだ。

「……で、貴様は私に何の用だ？ 王紋を授けられてゐる身で、私の命を狙うとは思えないが」

女は冷汗を垂らしながら、その気勢を弱めることはせず、不敵に笑いながら言つた。

それに青年は感心したように息を漏らし、笑つ。

「ま、そんなビビるな。お前の言つ通り、俺はお前の命なんぞ狙つちやいない。ただ癖になつてるだけだ。交渉をする時は、まず圧倒的優位を示した方が円滑に進むだろ？」

「それはただの脅迫ではないか」

「ああ、脅迫だ。俺は俺のことしか考えていない。お前が嫌でも、

そんなこと俺には関係がない。俺は俺の為に、交渉相手の意思は踏みにじることにしてるんだよ

「そんなことをして、貴様は何を望む?」

女はその表情を笑みに固めながら、怯えていた。自分の力を過信しているわけではないが、それでもこの青年の力くらいは解る。あれだけの魔法障壁を壊すことには、たとえ魔族であつても低級魔族であればできないだろう。上位の魔族でも、多少の時間は必要であるはずだ。

しかし、この青年はそれを一瞬でやつてのけた。それは恐るべきことである。故に、女は警戒していた。この青年が何を望むのか。これほどまでの力を持つ青年は、何を望むのか。それはおそらく、人間にとつて、いや、魔族にとつても、重大なことであるだろう。そんな女の警戒を知つてか知らずか、青年はその表情を女がしてみせた笑みよりもさらりと不敵な笑みに変え、言い放つた。

「世界平和だ」

「……は?」

果然。女の表情を一言で表すならば、それこそが最も適切であるう。

「世界平和、って、それは、本気で言つているのか?」

容易に信じられることがなかつた。諸国の王、ましてや教会の者たちでさえ、魔族との戦いのことよりも自分たちの利を優先するような時代である。そんな時代に、世界平和を望む。それはとても崇高な考え方であるが、とてもこの青年には似合わない言葉であった。だが、青年はまるで当然のことのように頷く。

「無論だ俺は俺の為に生きている。そして、平和な世界で暮らしたいと望むのは、人間ならば当然の考え方だろう? 故に、俺は世界平和を望んでいるんだ」

「それほどの、力があつて、何故、そんな夢を見る」

「これほどの力があるからだ。おそらく、俺は現在この世界にいる人間の中で最も強い人間だ。才能だけならば俺を超える逸材がいる

かもしだれないが、実際の能力であれば、俺は誰にも劣らない。それだけの力があるんだ。なら、夢なんかじゃない。世界平和は、とっても現実的な望みだ。俺は、世界平和を成就させる。俺の為に、な

「どれだけ、傲慢なんだ。自分の為に、世界平和を成就させる？」

まるで、自分が世界の主であるような言い草だな」

「いざれ、成るさ。世界の主足る人間は、俺以外にも今のところ一人くらいはいるが、俺も世界の主には成りたいからな。俺は世界に平和をもたらし、世界の主となり、世界中から讃えられる。どうだ？」

「最高だろ？」「

「もしも、叶えられるあれば、な

「叶えるわ。絶対に」

青年は自分に言い聞かせるようにして言った。

「……そうか」

女は含むような笑いをして、立ち上がった。

「名を言つていなかつたな。私はショーラだ。貴様は？」

「俺は魔王を倒す者だ。よろしくな

「ああ、よろしく」

そう言つて女 ショーラは青年へと手を差し出す。しかし、青年はその手を取らず、ただ驚きに目を瞠つていた。

「どうした？」

ショーラが首を傾げる。それを見て、青年はまずまず驚きに目を瞠る。

「……まさか、あの王以外に、この言葉を笑わない者がいるとは、な

そして青年は楽しそうに、ふつと笑う。

「本当に、この世界は愛おしいな。お前みたいな奴がいるから、他がどれだけ肩に溢れていようと構わなく思えてくる。感謝しよう。お前がいてくれて、良かつた」

そう言つて、青年はショーラの手を取る。ショーラは突然そんなことを言われてきよとんとしたが、すぐに「いらっしゃいそ」と笑つた。

実験。

## 第一二節 - 8 - 人間実験

魔族の勢力地に隣接した、とある人間の街。

そこは、昨日まで、魔族の動向に怯えながらも、数年間襲撃がないことから少し油断していた人々が楽しく暮らしていた街である。しかし、今、この街には生きた人間はほとんどいなかつた。

「ハツハアー！ 良いぜ！ 良いぜ！ その調子その調子イ！」ある魔族が嬉々として言つた。

筋骨隆々。人間のような姿をしている。金の髪に浅黒い肌。唯一、人間にありえないものとして、一本の尾が生えていた。

「貴様も性格が悪いな。そんな姿で油断をさせてから、攻撃させようと言うのだから」

またある魔族が呆れたようにして言つた。

金の体毛。狐のような身体。四本の尾は青く煌き、その目は紅い。「ハツ！ そつちの方が良いだろウが。あいつは、絶望を糧とする魔法を使うんだからヨ」

「それはそうだが、悪趣味だぞ。誇りを知れ、ゾオル」

「うつせエ。お前は俺の親かよ、ルイア」

「お前はそれで、第六なのか。嫌になるな」

「なんだ？ 不満かヨ？ それなら魔王様に言つんだな。『魔王様ア』。僕ちんゾオルなんかに負けたくないんでちゅ。でちゅから、僕ちんとゾオルの序列を入れ替えて、あいつを第八にしてくだしやうい』つてなア」

「……お前の部下が、不憫で仕方がないよ」

「ハツ！ それは同感だぜ！」

そう言つてハハハと笑うゾオルを見て、ルイアは溜息を吐いた。

「それにしても、あれは結構な出来だな。流石はチャイオニヤ。こんな事に関しては、やはり一流だな」

「戦闘に関しては力込みでエなもんだけどなア」

「しかし、頭が良い。貴様であつても、勝てるかどうかは解らんぞ？」

「ハツ！俺様にそんな策略は通用しねえよ。七と六に、どれだけの隔たりがあると思つてんだよ」

「七 エレクトロ殿、か」

「そうだ。あいつは魔法も一流。身体能力も一流。魔力の運用力も一流だつた。だが、動きが読めやすかつた。おそらく、それが敗因だろうな」

「読めやすかつた、とは言つても、それだけで勝てるほど、エレクトロ殿は弱くないと思うが？」

「ハツ！馬鹿かよルイア。人間は、頭だけは良い生物だ。『捕食』を除けば、それくらいしか長所がない。だが、だからこそ、その能力だけは俺らよりも上だと思つておいた方が良い」

「人間如きに？ それは流石に思えないな」

「いいから、聞け。それとも、お前は単純な能力で、お前より一つ上の序列であり、俺の一つ下である、第七、エレクトロが負けたとでも？」

「……それはない」

「その通りだ。エレクトロが単純な能力で負けるなんて、あの時の人間であれば考えられないことだ。同時に、ディープリースを倒した人間がいた。おそらく、それがその時の『人類最強』だ。故に、エレクトロを倒した人間は、そいつしか考えられねエ」

ゾオルは大きく肩をすくめた。

「だが、ディープリースとの戦闘でその地に残つた魔力を分析した結果、その時にはまだエレクトロには到底及ばない程度の魔力しか持つていなかつた」

「人間は魔力を奪うのだろう？ なら、他の場所で魔力を奪つて、それからエレクトロと戦つたのでは？」

「ありえないな。ディープリースが倒されてからエレクトロが倒されるまでの期間に、他の百位以内が倒されたという報告はないし、

実際、ほとんどが未だに存命だ。結果、エレクトロは単純な戦闘能力ではなく、行動を読まれて負けたんだが」

「しかし、どうやって……」

「簡単だ。あいつの魔法は、自分の存在を蔓延させる魔法。尾の先から常に自分の存在を放出し、自分の存在を限りなく薄い状態ではあるが、その場に蔓延させていた。それにより、本体に攻撃を受けたとしても、薄くなつた存在の一部へ本体を出現させる。言つてしまえば、転移魔法と創造魔法の応用だ。攻撃を受ける瞬間、自分の存在と言う転移点へと自分を移動させる。攻撃を受けた肉体とか、攻撃を受けると自動的に存在を移すことができたのかは今でも解らねエが、それはエレクトロの魔法だから、俺らに理解できるもんじゃねエ。俺らは人間とは違つて、一つの器官として魔法を使はしているようなものだ。理論を組み立てて魔法を使はしているような人間どもとは違う。まあ、感覚的に使つているからこそ、人間では不可能だろう速度で魔法を使はできるわけだがな」

「話がずれているぞ、ゾオル。魔法などどうでもいい。どうやってエレクトロ殿が倒されたのか。私はそれが知りたいのだ」

「ん？ すまんすまん。確かに少し話が脱線したが、完全に無関係というわけでもない。つまり、エレクトロの魔法は、簡単に言えば転移魔法だ。なら、その転移先に、罠を張れば良いとは思わないか？」

にやりとゾオルは暴虐の笑みを浮かべた。

一方、ルイアはその言葉に驚愕を隠し得なかつた。

「そんなこと、が？ いくら先が読めるとはいつても、そこまでのことを？」

「可能だ、人間には

ゾオルが何でもないことのように言つた。

「人間を擁護するわけではないが、それだけは認めても良いと思えるところだ。魔王様やシャム様といった魔族でやつと可能かどうかというその所業を、人間ならば、可能なんだよ。少なくとも、俺に

はそれ以外で、エレクトロが人間如きに負けることが信じられない「だが、可能なのか？ エレクトロ殿の転移するだろう場所を先読みし、そこに罠を張るなど」

「おそらくな。しかも、ただの一発でエレクトロが負けるはずがねエ。簡単に言えば転移魔法だが、あいつの魔法はもつと奥が深いものだ。もし一度先を読まれたとしても、その罠にかかった時点のエレクトロは既に次の魔法を準備していたはずだ。つまり、エレクトロは無傷でまた違う場所に転移する。だが、その先にも罠が仕掛けられていたら？ さらにその先にも、またさらにその先にも、そのまたさらにその先にも、罠が仕掛けられていたとすれば、どうなる？ まあ、それくらいの数じゃあ、エレクトロには屁みたいなもんだろう。しかし、それが無限に続いた場合、いすれエレクトロの魔力は尽き、その罠に、かかってしまう」

「そうか。エレクトロ殿の、あの魔法はかなり高度な魔法だ。そもそも、エレクトロ殿にとって、あの魔法などおまけみたいなものだ。もしもの時の保険。あの魔法が主力なわけじゃない。エレクトロ殿にダメージを負わせるほどの攻撃が、エレクトロ殿に直撃した場合にのみ、あの魔法は発動される。そして、ただの転移魔法ですら、けつこうな魔力を消費するのだ。エレクトロ殿のことだから、転移魔法よりは消費量を少なくしていただろうが、それでも、それが何度も続けばすぐに魔力が尽きるのは必至、か」

「それだけの数、あんな魔法を使うなんてのは完全に想定外だっただろうからな。それならそんな魔法、途中で止めればいい話だが、そうもいかねエ。最初の数回でエレクトロも気付いていたはずだが、止めることはできるはずもなかつた。エレクトロの魔法が発動すると言つことは、それなりの魔法だと言つことだ。そして、一度エレクトロの魔法が発動した時点で、次にエレクトロが出現する場所にはその罠が張つてあることが確定しているも同然。気付いてすぐには魔法を解除し、その罠に直撃したとしたら、魔力が尽きることはないだろうが、あんな魔法、一度解除して早々また出来るもんじゃね

エ。すぐに他の魔法で攻撃され、魔力を奪われていただろう

「故に、賭けたのか、エレクトロ殿は。相手が、先読みを誤ること

を、狙つて」

「結局、失敗に終わったがな。ま、だけどエレクトロは満足だったと思つぜ。最期に、そんな奴と、戦うことができたんだから」

「……ああ。エレクトロ殿は、そういう御方だったからな」

ゾオルとルイアが言い合い、空に思いを馳せた。

そこに、「ギィイイイイアアアアアアアアア！」と猛獸のような声が空気を揺るがした。

「つと、忘れてた。そうだそうだ、今はこいつの実験の最中だったな」

「そうだつたな。私も忘れていたよ。しかし、何故私たちがチャイオニヤの実験などに駆りだされねばならないのだろうな」

「まあ、良いじゃねエか。少なくとも俺は、面白いぜ？」

ゾオルとルイアの視線の先に、真っ赤に濡れた一体の魔族がいた。背には常に蠢き隆起する肉腫。腕が四本生えており、そのどれもが形状の違つものだつた。一本は枝の如く貧弱な緑色の腕。次に大きな黄色の腕。次にツギハギだらけで折れ曲がつた腕。最後に手首までが真っ白で、手首から先は真っ黒な、人間と同じような腕。体長は三メートルほど。身体は人間のよう。腕とは違い、脚は二本で、普通の人間と同じようである。頭は常に左右どちらかに傾いており、口と目は塞がれている。口は糸で縫われたようにして、目は包帯に巻かれるようにして。目から上は鉄が覆いかぶさるようにしてあり、それに付属してある突起物が時折黄色く点滅していた。

「魔族の魔力を奪つて糧とする人間に対抗して、人間の絶望を奪つて糧とする魔族を生み出す。最高に面白いじゃねエか」

第一節 - 9 - 夜這い？（前書き）

「正直に言つて、夜這いかと思つた」

## 第一節 - 9 - 夜這い？

ショーラの希望もあり、青年はショーラの血中に泊まることがなつた。

青年はその夜、こつそりとショーラの寝室へと侵入し、ショーラを起にした。そこでショーラは動搖したが、「ま、まあ、良いだろう。貴様ほどの者ならば、その子も、さぞ強いものになるだろうしな」と言つて、青年をむやみに追に出すようなことはしなかつた。

しかし 青年からしては当然のことながら、青年は何も夜這いに来たわけではなかつた。ただ、一人だけで、この街の現状を話してもらいたかったのだ。これだけの若さならば、内部に敵がいてもおかしくはない。故に、部下がいるところでは話しづらいだらうことも話してくれるだらうと踏んで、青年はわざわざ夜寝る時間にショーラの寝室に忍び込んだのだ。

その旨を話すとショーラはその雪のよみうな顔を少し溶かし、「紛らわしいことをするなつ」と怒つた。

それに青年は肩をすくめ、

「俺もそういうことをしたくないわけじやない。お前ほどの美貌を見て、興奮しないほど俺は聖人君子ではないや。お前に言つたかどうかは忘れたが、俺は自分の欲望に忠実でな。本音を言えば、今すぐにお前を押し倒したい。俺にはそんな経験がないから、もしうするとなるとお前にリードしてもらつことになるだらうがな。しかし、今はそんなことをしている場合じやないんだ。俺は、一刻も早く、俺の夢を叶えるために、動かなければいけない」と言つた。しかし、ショーラはその言葉に雪を蒸発せめるよみうな怒つた。

「リードなど、できん！ 私も、そんな経験はゼロだ！」

「あ、そうなのか？ お前の性格を考えると、政略として、その美貌を使うだらうことは容易に考えられるが、

「悲しいことに、この国の領主のほとんどは女性だ。そして、貴様も王紋を持っていると言つことは、陛下の性格を知っているはずだ。あの方は、私たちを娘のように思つていて。故に、私が隣国の権力を落とそうと思つても、何もさせてくれぬのだ」

「……あー。あいつ、人は良いが、馬鹿だからな」

「そうだ。あの人は人格者だが、王としては情が深すぎる。もっと非情であれば、この国ももっと発展しただろうに」

「はたして、本当にそうかな」

愚痴を言うシェーラに、青年は含むように笑つた。

「あの人柄があつたからこそ、あれだけ優秀な部下がついてきたんじゃないかな？ そして、あの人柄だからこそ、隣国とも良好な関係を築いているんじゃないのか？ 少なくとも、俺はそう思つがな」

「……考えすぎだ」

「いいや、そんなことはない。あの人柄のおかげで、お前はまだ純潔を守つているんだ。それについては、感謝しても良いんじゃないか？」

「……貴様は、純潔を守つている女性の方が、好みか？」

「いや、そんなことはない。好き嫌いなんて、そんなことで決まることじやない。人を好きになるなんてことは、理屈じやない。感覚だ。まあ、魔法と同じだな。強引に理論を並べることはできるが、その本質は感覚でやつているにすぎない」

「そ、そうか」

シェーラは顔を赤らめて言い、しかし、その直後、はっとして言つた。

「貴様、今、何と言つた？」

「ああそう言えど、理論と感覚の循環による魔法行使効率の上昇は、世界中に教えているわけじやないし、お前が知らなくて当然か？」

「……それは、なんだ？」

訊ねると、青年はシェーラの身体をくまなく見た。それにシェーラは少しだけ恥ずかしくなつて、「何を見ている」と身体を隠した。

「ま、お前になら、教えても良いか」

青年は言つて、シェーラの額に手を当てた。シェーラは身体をびくんと震えさせた。それはなにも青年の手が額に触れたことに対し、シェーラが何らかの感情を覚えたことによるものではなく、青年の手から魔力が流れ込んできたからだ。

「昔は口頭で教えてたんだが、今はそういうわけにもいかない。つうか、あんな漠然とした思考を与えるだけじゃあ、本質に至るには遠すぎる。故に、これを教えるときは、魔法で直接教えているつてわけだ」

青年の手が光り、シェーラの頭にイメージが浮かぶ、それはヴィジョンとなり、シェーラの視覚へ明瞭に映し出される。いや、視覚ではない。もつと根本的な「感覚」としか呼べないような、自分の「心」に直接刻みこまれているような、そんな気がした。

「無論、これを世界中、誰にでも教えていたら、今の魔法学ももうちょっと発展していただろうし、魔族に対しても少し優勢になつたかもしれない。だが、それより先に、人間は馬鹿だから、人間同士の戦争にこの技術を使つてしまつ。魔法の行使時間が短縮されれば、人間同士の戦争も大幅に短縮されるのは道理だろう?」

糸。編む。魔力。魔法。感覚。理論。循環。構築。漠然としたイメージ。確固たる理論。様々な言葉が理論として理解され、様々な理論が感覚として感じられて、様々な感覚が言語として表現できてその循環。魔力から魔法を構築するまでの動作のイメージが一つの円環となり、それは言語、理論、感覚を通過する際に加速する。全てが相互に影響し、単一では考えられないほどの大きな効果となる。

「そうか。そうだったのか。

シェーラは唐突に理解した。

魔法とは、どういうものだったのか。

それは、魔法の成り立ちを考えれば、簡単にわかるはずのことだつたのだ。

元々、魔法は魔族のものだ。

そして、人間の扱う魔法とは、魔族の使う魔法を解析し、理論として強引に成り立たせたにすぎない。

その本質は、感覚。

身体を動かすことと、同じようなものなのだ。

しかし、それだけを使うのはもつたいない。人間には理論もあるのだ。ならば、それを使わずして何を使う。理論と感覚。その一つを同時に使うのだ。そうすれば、人間は魔法を、もつと効率的に扱うことができるはずだ。だが、感覚をすぐに理論とすることは難しく、ならば言語にすればいい。感覚は言語として表現することができ、言語から理論は構築されていてるのだから。

すべて、わかつた。

到達した。いや、やつと、始めることができた。

魔法を行使すると言つこと。

「よし、終わつたな」

青年はシェーラから手を離した。

「……今の、は」

シェーラは呆然として、やつとのことで声を出した。

「とりあえず、魔法を使ってみる。今の状態ならば、先の障壁よりももつと出来のいい障壁が、十秒とかからず構築できるはずだ」

青年に言われて、シェーラはとりあえずやつてみるとした。魔力が完全な魔法に構築されるイメージが感覚され、それが言語として変換され、理論として確立される。そしてそれが感覚となり、後はもう魔法を発動するだけだ。

感覚、言語、理論を駆け巡り、循環し、加速する。

魔法はもう、完成した。

「……えつ」

シェーラは思わず、そんな声を出していた。信じられなかつたのだ。今、自分がしたことが。

あれだけ構築するのに時間がかかつたはずの障壁をゆうに超える

ほどの障壁が、ほんの数秒でショーラの周囲に張られていたのだ。

「上出来だ」

青年が言い、それにショーラは驚いた。障壁が張られたにもかかわらず、青年は障壁内部にいたのだ。

「ん？ ああ、何故、俺がまだここにいるのか、か。先の障壁で拒絶する対象を感知する方法は解析していったからな。ならば、それと同じように錯覚させてやればいいだけの話だ」

簡単に言う青年に、ショーラは驚きを超えた呆れを隠せずにほいられなかつた。

「貴様、魔法に関しては、本当に人類一かもしけないな」

すると、青年はふつと鼻で笑う。

「当然だ。魔王を倒すんだからな」

「そうか。そうだな。貴様は、魔王を倒す者、なのだから」  
ショーラは羨むように、青年を見た。

青年はそれには何も言わなかつた。

ただ、魔王を倒すという思いが強くなつただけだつた。

第一節 - 10 - 青年の目的（前書き）

青年の目的。

翌日、青年は街に出ていた。

ショーラに話を聞いた限り、この街に魔族が襲撃したことはないらしい。しかし、人間に襲撃されたことはあるらしく、余所者に対する視線が少々きついものであるのもそのためであろう。

「魔族と戦争してるつついのに、なんで人間は人間同士で戦うのか。全員、もっと利己的に考えろよ。理性的に利己的に考えれば、全体の利益が個人、つまりは自分の利益につながると言つことが解らぬいのか。個人の利益のみを追求した場合のデメリットを考えないのかよ。全体を蔑ろにした場合、その個人は全体にとって不利益な存在と思われる。それが既にデメリットだし、それによつて様々な不利益が生じることになる。争うのではなく、協力することが人間にとつては最善なんだ。自分が得をして、誰かが損をするのではなく、どちらもが得をするような関係が理想なんだ。誰かが損をするといふことは、自分が損をするという可能性もあるということだ。自分が誰にも損を与えるとも誰かが自分に損を与えるかもしれない。だが、自分が損を与えたから、誰かが自分に損を与えないようになることは来ない。自分から始めなければ、何も変わりはしないのだから」

青年は独り言を口にしていた。長年一人旅をしていると、独り言が癖になってしまふのだ。少なくとも青年はそうであった。

「つうか、魔法のおかげでせつかくバベルの塔をぶち壊される以前の状態と同じ状態になつたつてんだから、戦争はなくなつて然るべきなんだがな。言語が統一されたとしても戦争が起くるんじやあ、神が言語をバラバラにした意味つてなんなんだよ、つてなるしな」

青年の独り言は周りの者にも聞こえているだろう。しかし、青年はそんなことは気にしない。そんなことを気にしている余裕などないのだ。

青年はほんと無意識の内に独り言を口に出し、そして意識的に魔法を使って選別をしていた。魔法の才能の選別。自分の仲間となるべき存在の選別を。

青年の眼球には現在とある模様が刻まれており、しかしそれは普通の人間に見えるものではなかった。魔法の熟練者であつて、ようやく見えるような模様であり、それは驚くほど緻密な魔法であつた。魔力の消費を最小限にし、かつ精度を最大限に引き出すためには緻密な魔法を編まずにはできなかつたのだ。この魔法を青年は一週間以上の時間を費やして完成させた。そして、完成させた今でも毎日のメンテナンスは欠かしていない。

それほどまでに、青年にとつて仲間を探すというのは重要なことだつたのだ。青年のような、魔族すらも超える魔法の才を持つ者はこの世界には圧倒的に少ない。グローリーやリスト。あの王や、シエーラでやつと中級の魔族の才を超えるほどなのだ。青年の教えもあつて、今では上級魔族と戦えるレベルまでは到達しているかもしないが、それでも尚、弱過ぎる。

青年が今までに会つた中で、最も強い人間は青年の師匠だつた。しかし、あの人でさえ、青年の才には遠く及ばなかつた。彼は青年の目の前で殺され、そして、彼を殺した魔族ですら、青年は殺すことができた。十一歳の時点でその域に達するほどの才を、青年は持つていたのだ。

そして今、青年が探しているのは、そんな自分に匹敵するほどの才能を持つ人間である。

実のところ、魔王が相手じゃなければ、そんな人間は必要ないと青年は踏んでいた。そもそも、倒した魔族の魔力がそのまま自分の魔力として奪うことができるこの世界において、仲間などは必要がないに等しいのだ。逆に仲間がいればその分、自分が奪うことのできる魔力が少なくなるので、仲間がいない方が良いとも言える。

しかし、青年は魔王の存在の為に仲間を探していた。青年は魔王を倒す者と自称しているが、自分が魔王を倒せるとは思つていなか

つた。魔王の魔力量は、それこそ桁外れのものであったのだ。これから自分の成長から考えて、それでも、遠く及ばない。更には、あの時、北地区に残つた魔王の魔法の残滓を見て、青年は確信していた。魔法の技術すら、魔王は驚くほどのものを持っていた。少なくとも、今の青年は超えるほどの技術を。魔王と戦う時には青年も魔王と同じだけの技術を得られると予想してはいる。だが、それ故に、仲間が必要なのだ。

同じ技術の高さで、圧倒的なまでに違う魔力量。勝てる道理などない。

しかし、仲間がいれば、その戦術は倍以上に膨らむ。そうすれば、勝つことができる。青年はそう思っていた。

「……本当に、人間は戦争なんかしている場合じやない。魔族を殺すために、一致団結させなきや、な」

青年は独り、呟いた。

立ち向かうことすらできない、圧倒的な、暴力。

「フツ！ ハツ！ ハツ！ ハ！ ツハ！ アアアアアツハアア！」

特徴的な笑い声と共に魔力が放出され、その魔力はいとも簡単に人間の住む街がある山を一つ消し飛ばした。

「爽快だ！ 久しぶりだぞ、こんなにも自由に魔法を行使できるのは！」

巨漢と形容するにふさわしい男。人間であれば東洋人のような短い黒髪と黄色い肌。

人間の男性のような体躯でありながら、一つだけ人間と違うところがあった。角である。その額から、一本の巨大な角が生えていた。

「さて、このオレ、第五テドビシュの眼に適う人間は、この地にいるかな」

テドビシュはにんまりと笑った。

「えー。なんでそんなのしなきやなんないのー？」

ベッドの上でごろごろと寝転がっている魔族が言った。

人間の少女のような体躯。淡い水色の長髪に、シルクのような肌。しかし人間とは違うところがあり、それは尾であった。人間がイメージする魔族が持つような尾を持っていた。

「魔王様の命令です。あと、その身体はお止め下さい」

ベッドから少し離れた場所である魔族が跪つき、言った。

命令で子犬の姿にしたその魔族だが、やはりこの姿にして良かつた。可愛いもん、と少女の姿をした魔族は思つた。

「でもでもー、これ、楽だしー。ピー・ピリーピリーの気持ちもわかるつて感じだしー。このベッドで寝転がるには、これが最適だしー。

というか、魔王も人間の姿してるじゃーん」

「……それを言わると、何も言えないのですが」

子犬の姿をした魔族がしょぼんとして言つ。やつぱりこの姿にして良かった。少女の姿をした魔族はにっこりと笑う。

「まあ、でも、魔王の命令なら、その仕事くらいはやつてあげる。確か、人間を殺せば良いんだよねー？」

「は、はい」

「りょーかーい。じゃあ、ばーん」

少女の姿をした魔族が窓に指を向けて、言つた。すると直後、その指から一つの光弾が射出され、目にもとまらぬスピードでどこかへ向かつて飛んで行つた。

そして、数秒後、少女の姿をした魔族が居座る城すらも揺るがすほどの轟音とともに、空を覆い尽くすほどに眩い光が閃いた。

「はいっ。これで三千は死んだんじゃないかな。まあ、私、第一レプログラムからすれば、こんなの簡単つてわけよ。さて、もうする」とないよね？ おやすみー」

レプログラムはベッドに身体をつづめた。

魔族たちは少しづつ、人間たちに侵攻し始めた。

様々な方法で、着実に人間を殺していくつていた。

だが、魔王は動かない。

ただ、その時に備え、力を温存するために。

第一節 - 12 - 邂逅。そして、始まり

邂逅。そして、始まり

光のよつな白に近い金髪と、その髪と同じよつな色をした肌。顔は幼げで、おそらく十五歳くらいだらう。その表情はひどく弱氣で、今にも泣き出しそうである。

「「、「ごめんなさい。」「めんなさい」」

サヤは涙ぐみながらも、必死に謝った。何度もペコペコと頭を下げる様は、初めて見る者には少しの罪悪感を覚えさせるかもしれないほどのものであった。

「「めんですむわけねえだら。お前、本当に役立たずだな」」  
しかし、幾度となく見た者からすれば、それはただ苛立ちを助長させるものであった。

男は不機嫌そうな顔でサヤを睨む。すると、サヤは悲鳴を漏らして身体を震えさせる。

チツ、と男は舌打ちした。サヤの行動の一つ一つに苛立ちを覚えてこるようだった。

「お前、謝ることだけは一流だな。それ以外は役立たずのクズなのに。そんなんで、よく生きていられるな」

サヤはその言葉の一つ一つに過剰に反応した。それがさらに男の苛立ちを助長させる。

「……あー。駄目だ。もう、駄目だ。ですがに、もう、我慢ならねえわ」

すうっと男の手から光が消えた。

サヤはそれに気付くことはなく、ただ「「ごめんなさい。」「めんなさい……」」と繰り返していた。

「もう謝らなくていい。お前をこれから、役立たずじゃなくしてやる」

男は不自然なほど優しく言った。しかし、サヤはその不自然さに気付くことはなかった。

「ほ、本当に、そんなことが、できるんですか、……？」

サヤは眼を涙で滲ませて、そこに希望の光が灯った。

「ああ。その通りだ」

また、男は不自然なほどに優しい声で言った。しかし、やはりサヤは気が付かない。

「や、やつた。やつと、やつと、誰かの、役に立てる。やつと、やつと……！」

サヤの目から涙が流れた。それは嬉し涙だった。その瞬間だけは。がしつとサヤの肩を男の手が掴んだ。

「えつ？」

サヤは思わずそんな声を出して、男を見上げた。

涙で滲んだ視界に映ったその顔は、ひどく歪んでいた。

「ああ。これからは性欲処理の道具として役に立つてもらひ」

どんづという音が響き、その音が鼓膜を揺らしたことで初めて、サヤは自分が押し倒されていることを認識した。

サヤは混乱していた。男が何を言つたのか、咄嗟には理解できなかつた。

性欲処理の道具。

どう言つ意味ですか。それって、どう言つ意味なんですか。

サヤは純粋にそう思つた。もしかすると、口に出していたかもしない。もちろん、知識としては知つている。しかし、その知識と今実際に起こっていることは決して繋がらなかつた。繋げることをなにかが拒絶しているようだつた。

男の手が優しくサヤの服を脱がしにかかつた。懐からナイフを取り出し、丁寧にサヤの服を裂いていった。

サヤの服がはだけ、その肌が露わになる時、やつとサヤは自分が置かれた状況を理解し、悲鳴を出そうとした。

しかし、男の手がそれを制した。

見ると、男の顔は驚くほど冷静だった。その顔に罪悪感なんてものは微塵もなく、自分が何をしているかなんて、全く解つていな

ようだつた。男は、まるで何かの作業をするみたいに、サヤの服を脱がし、サヤの口を塞いだのだ。

サヤはそれがひどく恐かつた。あまりの恐怖に、涙が流れた。一度流れだすと、それは川の堤防が決壊したかのようにどごめなく溢れだした。しかし、涙がサヤの口を塞ぐ男の手をいくら濡らしても、男はその手を止めることはなかつた。

サヤの肌がほとんど露わになつた時、突然、男は服を脱がす手を止めた。乳房から上と、股の辺りがからうじて布として隠される以外に、サヤの肌を隠すものは何もなかつた。

それをじろじろと舐めまわすように見ると、男はにたあと笑顔を作つた。それはサヤが今までに一度も見たことがないような笑顔だつた。ここまで悪寒を覚えるような笑顔は、初めて見た。

何をしようと言つのか、男は自らの衣服を脱ぎ始めた。上半身には隆々とした筋肉が見え、下半身には棒のようなものが生えていた。見たことはあつたし、それが何であるかも知つていた。しかし、こんなものは見たことがなかつた。なんだかとつても気持ち悪く、グロテスクなものだつた。大きくそそり立つそれの先端は亀の頭に似ていて、その部分は少しきらきらと光つていた。

男はサヤの口から手を外して、サヤの股にある布を取つ払おうと、手をかけた。

「……やめて、ください」

サヤの口からそんな声が漏れ出た。その声は涙で濡れ、聞いている者の心を締めつけるような悲惨な声であつた。

男もその声には心に響くところがあつたようで、その息を興奮したように荒げ、自らのものを大きくした。

「やめて、ください。それだけは、やめてください。お願ひだから。やめて。やめて……」

サヤは悲痛とも言える声を漏らし、男も悲痛とも言える息を吐きだした。その息と共に、男のものからはねばねばした透明な液体が滴り、それは男の太腿にまで達していた。

「もつと、言へ。やめてくださいと。なんでもするから、やめてくださいって」

その声には興奮したものが混ざっていた。男の表情は嫌らしく歪み、サヤはその表情を見て、あまりの恐怖に失禁した。

「やめて、ください。なんでも、しますから、やめて、ください

……」「……

サヤは失禁しながら、泣いてそう懇願した。サヤの股の辺りの布が濡れ、床に水たまりのようなものができた。その臭いはすぐに部屋に充満した。

「わかった。なんでもするんだな」

男はにこりと爽やかに笑つた。その笑みは、どこか吹っ切れたような笑みだった。罪悪感から、完全に吹っ切れたようだ。

サヤはひつと悲鳴を漏らし、はすみでさらに失禁した。男の手すらもが少し濡れ、男のものから滴る液体はもう床にまで届いていた。「じゃあ、これで、遠慮なく、やらせてもらいつ」

そう言って、男はサヤの股からその行為をするのに邪魔な布を取り払おうと、腕を振つた。男の腕はサヤの股から離れ、つまり、男のものを邪魔するものはなくなつた。

男は自分のものをサヤの股に突き入れようとした。しかし、おかしい。見ると、まだ、サヤの股には自分の手がかけられている。先ほど、自分の腕はサヤの股から離れてばかりだと言うのに。

そう思い、男はサヤの股から離れた自分の腕を見た。

手首から先がなかつた。

は？ と男は思わず呟いた。自分の身に何が起つたのか、全く認識することができなかつた。

「クズが。この俺の仲間となるべき存在に手をかけるなど、お前如きに許されたことじやない。それは、今から俺のものになるんだから」「……

若い男の声が聞こえた。

男はその声の方を見た。するとそこには、一人の青年がいた。そ

の手に、血を滴らせた剣を持つ青年が。

それを見た男の最初の反応は、自分の手を斬つたことにに対する怒りを青年にぶつけるなどのことではなかつた。

「ま、待つてくれ！ これは、俺が無理矢理やつたことじやあない！ あいつが、なんでもするからつて、言つたんだ！ だから、俺は悪くない！」

男が最初にしたことは、言つてしまえば保身であつた。自らの保身。慌ててサヤの上から飛び退き、手首から先がない腕をぶんぶんと振り回して、自分の罪を否定する。それこそが、男が真つ先にしたことであつた。

「……人間つて奴は、これだから」

青年は呆れたように溜息を吐いた。そして、その目は男には向けられず、サヤへと向けられた。

「で、どうする？」

「……え？」

どう言つ意味かわからなかつた。おそらく自分が問われているのだろうとは思つうが、何を問われているのかわからなかつた。

「こいつだよ。この、お前を襲つた馬鹿を、殺すか、殺さないか。お前が選べ」

青年は男の首に剣を添えた。その動作は一瞬であり、男が剣を首に添えられているのに気づくことには少々の時間を要した。気付くと男は眼を潤わせ、「や、やめてくれ。こいつ、殺さないでくれ。頼むから、なあ。なあ……」と懇願していた。

しかし青年は男に目を向けることはなく、ただサヤを見ていた。

「なん、で……」

サヤの口が独りでに動いた。思つたことが、そのまま口から外に出た。

「なんで、そんなことを、私に……」

「お前が決めなければ、誰が決めるんだよ。もし、お前がどちらでも良いと言つのなら、俺はこいつを殺すぞ」

青年の言葉に、男は悲鳴を上げ、サヤに懇願するような視線を向ける。どうか、殺さないことを、選んでくれ。そんな感情と涙が滲んだ目を、サヤに向ける。

「それはっ！……待って、ください」

その言葉に、男は顔を輝かせる。しかし、青年の顔は未だ険しく、サヤだけを見ていた。

「何故だ。理由を聞こうか。もし、こいつの視線を受けて考えたとか言う理由なら止める。こいつは死んだら何の影響力もない。お前がこいつの死に対し、何も恐れる必要はない。こいつが可哀想だとか、そう言つた感情を抱く必要はない。思い出せ。こいつがお前に何をしたのか。何をしようとしたのか。今までのこと、たつた今起こつたこと。そして、こいつを生かした場合、これからこいつがお前にすることを、良く考えろ」

青年は男の首筋に剣を添えたまま、サヤに顔を近づける。

「これは一時の感情で決めることじゃ、ない。全てを想定した上で結論を出せ。お前がこいつを生かしておきたいのかどうか。それだけを考えろ。論理と感情を組み合わせ、互いを同一として考える。ただ自分がしたい方を、選びたい方を選べ。お前の望むままに選べ。そして、これを忘れるな。お前の意思で、こいつの生死は決定する」

青年はサヤを見つめる。サヤはその目に飲み込まれそうになつた。そして同時にその言葉の全てが不思議と心に沁みわたつた。青年の言葉に、サヤは様々な感情を抱いた。

男の視線を受けたから「待つて」と言つたのか。それは、おそらく、そうだ。自分は、あの視線を受けたから「待つて」と言つたのだ。

しかし、それだけではない。それだけではないと、信じたい。

それ以外にも、色々な感情があつて、だから、自分は「待つて」と言つたのだ。

可哀想という感情もあつた。自分が今までに何をされたのかも思ひ出した。自分がたつた今何をされたのか、何をされそうになつた

のかも思い出した。この人を生かしておいたら、自分がこれから何をされるのかということも容易に想像がついた。

だが、自分も、悪いのだ。

自分があまりにも役立たずだったから、彼は、自分にあんなことをしたのだ。

それを、忘れてはいけない。決して、忘れてはいけないのだ。自分は、彼の生死を握っているのだから。握ってしまって、いるのだから。

一時の感情で、ただ今あんなことをされたから、されそうになつたからと言つだけで、決めてはいけない。

論理的に考えれば、もしかすると、私はこの人を殺した方が良いのかも知れない。

感情的に考えれば、一時の感情で考えれば、私は、この人を、殺したいとまでは思つていなければ、確かに殺したいほどの気持ちは抱いているのかも知れない。

だけど、論理と感情を組み合わせることなんてできない。だつて、私には、論理なんて難しいこと、わかんないから。

「私は、この人を、殺さない」

サヤは、はつきりとした声で言つた。

「理由は？」

青年は感情が無いような顔で言つ。それに、サヤは意思のこもつた目で返し、

「私は、この人を、殺したくないから」

意思のこもつた声で、言つた。

「……そうか」

青年は咳くと、いつの間にかその剣はどこかに消えていた。そして青年は男を見下し、

「田障りだ。どこかへ行け」

と言つた。それに男は「は、はい！」と情けない声を上げて、裸のまま部屋から出て行った。その両腕には、しっかりと手首がつ

いていた。

「……え？」

サヤは呆然と声を出した。しかし、その直後、青年に身体を抱えあげられた。

「え？」

またもやサヤは呆然と声を出した。そして、自分の今の姿を思い出し、ぱっと自分の胸と股に手をやり、顔を羞恥に染めた。

少女、困惑す。

そして、次の瞬間、サヤはなんだか凄い部屋にいた。

サヤからすれば、ただ凄いとしか言えないような部屋である。ふかふかそうなベッド。壁もぴかぴかで、床には絨毯まである。

「え？」

サヤは戸惑うように首を振った。突然のことにより、頭が付いて行つていなかつた。

「やっぱり、俺の見込み通りだ。ここまで付いて来れるとは」

青年は満足気に言つたが、何が付いて来れるのか全くわからなかつた。いや、全然付いて行つていません。と言つのがサヤの心境であつた。

そんなサヤの心情に気付いたのかどうかは解らないが、青年は言う。

「今のは転移魔法だ。かなり簡略化した部分もあるし、転移指定点とかの説明もいはずれせねばならないが、今はまだ良いだろう。ただ一つ、お前ほどの才能がなければ、こんなことは不可能だったと言うことだけは、言つておこう。お前、自信なさそだからな」

青年の言葉を聞きながら、サヤはそれに全く納得できずにいた。

「私に才能がある、つて。それ、何の間違いですか」

その感情は、口から言葉になつて出た。

「間違い？ そんなことはありえないな。俺の魔法は、絶対だ」

理解できないほどの自信がこもつた言葉だった。しかしそれでも、納得できないものは納得できない。

「お前、本当に自信ないんだな」

青年はやれやれと言つた調子で肩をすくめ、サヤを納得させたための説明を始めた。

「さつきの転移魔法は、お前ほどの才能がなければ不可能だつたわけだが、お前がそれに納得していないのはその才能が何なのかを理

解していないからだらう。故に、今のお前では到底理解できないだらうが、特別に説明してやる。

そもそも転移魔法とは転移指定点という点を指定しなければ発動することはできず、それは到達点と出発点の二つの点が必要なわけだ。そこで、先の転移魔法についての説明だが、あれは出発場所に転移指定点を必要としないような転移魔法であり、それは特別な転移魔法なんだ。おそらく、世界でもこんなことが可能なのは俺とお前くらいのものだらう。

何故か。それはこの魔法が出発点を必要としない理由と密接な関係にある。

到達点は、転移先を指定するためのものであり、出発点は、到達点への発射台みたいなものだ。まあそんな簡単なものではないんだが、それはいざれ学ぶだらうから省略する。これらのことから、俺は出発点は転移魔法に必要ではないんじやないか、そう思ったわけだ。そして、先の転移魔法が完成した。

しかし、問題点があつた。それは、その転移魔法の特性にある。その転移魔法は出発点がするはずである肉体の魔力化、情報化を自身の身体のみでしなければいけない。出発点はその転移魔法をする人間の肉体を魔力化、情報化する機能があるわけだが、それは出発点だからこそ可能なんだ。道具を使わなければ、火を起こすことができないよう、自身の身体だけでは肉体を魔力化、情報化することは不可能だ。まあ、魔法によって火を起こすことは可能なわけだが、肉体を魔力化、情報化することは出発点がなければ、魔法であつても難しいわけだ。無論、難しいであつて、不可能ではない。そうじやないと、先の転移魔法はなんだつたんだ、つて話だからな。ここからが本題だ。どうやって、それを可能にしたか。それを今から説明する。

理論としては、俺以外に理解出来る奴などこの世界に数人いるかどうかってところだから省略するとして、簡単に言えば、魔力変換率の問題だ。魔力変換率つてのは、自らの魔力を魔法に変換する効

率つてことだが、無論、それだけじゃ ない。言い方を変えれば、魔力親和性つて感じだな。魔力変換率＝魔力親和性と覚えておいたらしい。魔力親和性とは読んで字のごとくだが、簡単に言えば、魔力とどんだけ相性が良いかつてことだ。そして、俺やお前はそれがすば抜けて優れているつてわけだ。

それが何故、転移出発点が不要な原因となるかだが、それは簡単な話だ。魔力親和性が高いつてことは、それだけ肉体を魔力化しやすいつてことなんだから。……あー、これについては理解できなくとも仕方がないか。まあ、魔力親和性が高いから肉体が魔力化しやすいつてことだけを覚えておいたらしい。何故、魔力親和性が高かつたら肉体が魔力化しやすいのか、つて疑問は、今はどつかに置いておいてくれ。

つまり、先の転移魔法は魔力親和性が高い者ではないと不可能な魔法であり、イコール、お前は魔力親和性が高い、つてわけだ。そして、魔力親和性が高いつてのは才能だ。故に、お前は才能があるってことだ。理解できたか？

「……あの、その、えつと……」

サヤは口を濁した。全く理解できなかつた。まず、何を話していふのかわからなかつた。自分に才能があるかどうかという話なのはわかつたが、肝心の内容についてはほんの少しも理解することができなかつた。だから、結局、自分に才能があるとは納得できなかつた。

「……そうだ。この街は、魔法学の勉強を全くしていないんだつたな。それじゃあ、理解できなくとも仕方がないか。つうか、お前の才能は、魔法学について勉強してゐんだつたら、大陸中にその名が轟いてもおかしくはないほどだから、当然と言えば当然か。クソッ、シェーラめ。いらん政策をとりやがつて。おかげで、俺がここまで苦労するハメになつたじやねえか」

青年は顔をしかめて、ぼやく。その言葉の一つに、サヤは大変驚いて、

「シーラ……って、領主さま?」

「それ以外に誰がいる。って言つても、簡単には信じられんか。この世界は未だ格差の激しい社会だ。まあ格差が激しいことについては反対ではないが、上の者と下の者の世界は全くの別だから、お前のようなやつからすれば、『上』であるシーラに愚痴を、それも領主なんて位じやなくてシーラっていつ名前で言つなんてのは、信じられんことなんだろ? いや、シーラって呼び捨てにする」と自分が、か

その言葉にサヤは何も答へず、青年はそれこそが答えだと受け取つた。

「なら、実際に見せてやる? そうすれば信じるだろ?」

青年はひょいと腕を振つた。

大言壯語か、否か。

## 第一節 -14- 大言壯語？

すると、青年が腕を振った方向の壁が跡形もなく消滅し、その先には一人の女性がいた。

その女性は数秒それに気付かず呆然としていたが、なんとなくこちらを向き、ぎょっとした。その顔は見覚えがある顔で、そんな顔は今までたつた一度も見たことがなかつた。

全身が真っ白な、雪のような女性。

この街の領主、シェーラその人であった。

「なつ、ななな……！」

シェーラは口をぱくぱくと開閉し、こちらをじっと見ていた。

しかし、青年はそれを気にすることもなく、サヤに向かって、「ほら、シェーラだ。これで信じたか」と言つたが、サヤとしては領主さまであるシェーラがこちらを見ているだけで緊張なのに、その御方が驚愕の渦中にいるとなればもうどうしていいのかわからなくなつてきてるのである。故に、青年の言葉など、ほんの少しも耳には入つていなかつた。

「おま、えつ。なにを、しているんだつ」

ぴりぴりとした空気が肌を刺した。シェーラの身体から何かが出ていることが認識できた。いや、進つてていると言つた方が正しいかもしれない。

そして、シェーラがこちらに腕を向けた瞬間、その腕から先ほどまでのた漏れていただけなのだと確信できるほどの何かの奔流が迸つてきた。

「さすがシェーラ。やはり、お前は中々の才能がある。しかし、それ以上に、こいつの才能には目を瞠る。魔法についての知識がほとんどなく、魔力量も初期状態のまま、魔力を感知できるとは。俺の目に、狂いはなかつた」

しかし、青年はそれをいつも簡単に消し去つた。どうやって消し

去ったのかはわからなかつたが、この青年が消し去つたと言つ実感はあつた。

「ショーラ。こいつはお前の街の人間だぞ。そんな奴にこんなもんぶつ放すな」

「貴様なら消せるとわかつてのことだ！ 今のは、ただのハツ当たりのようなものだ！」

「何をハツ当たりすることがある」

「壁を壊しただろ？、が……？ なん、だ。これは。どうなつている。そこは、お前に与えた部屋のはずだ。それが、何故、この部屋の隣になつてゐるのだ！」

ショーラは驚愕に満ちた表情で言つた。

「ああ、すまんすまん。まあちょっと待て」

そう言つて青年はひょいとサヤを持ち上げ、ショーラのいる部屋に入った。そして青年が「閉じろ」と言つと、驚くことに青年の背後には壁しかなかつた。

「どうなつて……もしや、次元の連結？」

「正解だ。お前、やつぱり才能あるな。俺が今までに見た中では、一、二を争うほどだつた。今はこいつがいるから、一、二、三を争つほどだがな」

「いや、だがしかし、次元の連結など、そういうことができるものではないはずだ」

「それでもないさ。よつは転移魔法の応用だ。と言つても、次元の連結部は魔力だけを通すから、強い魔力親和性がなければ通ることはできないのだがな。しかし、これを応用すれば、かなりの規模の転移点。『門』と言つていいほどのものができあがる。すなわち転移門。そこを通るだけで、転移先に行くことができるような門が。無論、その作成には転移点を刻むよりも多い時間が必要だがな。魔力変化術式を必要とせずに転移を可能とするほどの魔力親和性を有するのはこの世界に俺とこいつだけだからな」

「魔力親和性？」

「魔力変換率のこととでも考える」

「ああ、魔力との相性の良さか。ふむ、それは確かに魔力親和性と言えるな。つまり、転移魔法の理論に則っているのか。どれだけ魔力と近づいているのか。どれだけ魔力に近いのか。そういうことか「正解だ。やはりお前の才能は喉から手が出るほどに欲しいな。俺と共に来るか」

「貴様、答えがわかつて訊いておるだろ?」

「また正解。お前は優秀な生徒だよ」

青年は手を叩いて笑った。サヤは話についていけずにあらあらと

していたが、突然、その頭を青年に軽く叩かれた。

「なら、代わりにこいつをもらつていく」

「私の街の娘か。それを許すと思つていいのか?」

「思わないが、こいつの意思を尊重するのも領主の役目ではないのか。こいつがどうしたいのかは知らないが、な」

「それも一理あるな。……娘。そなたは、どうしたい?」

問われ、サヤは困惑する。サヤのような者からすれば、ショーラなど天の上の存在。そんな御方と自分が同じ場所に存在していることがもうすでに信じられないのに、そんな御方が自分に話しかけてくださつていることなど、もつと信じられることではない。

しかし、これが夢であろうと、領主さまの言葉に答えないなどと無礼なことはできるはずもない。サヤは困惑した頭で必死に考えた。街に留まるのか、街から出るのか。

その一択。

「……この人に、付いて行きます」

「そうか。なら、止める必要もない」

ショーラは青年の方を向いた。

「だが、その前に、訊ねておきたいことがある」

「なんだ?」

そして、ショーラは満面の笑みで首を傾げた。

「何故、彼女は裸なのだ?」

その言葉に、サヤは今の自分の姿を思い出し、赤面した。

「それを説明するのは少し、つて、なんで魔力を循環させる。だが、その魔法はかなりのものだな。俺も認めてやっても良い。……おい待て。何をしようとしている。そこまで循環させた魔法は、俺でも対応するのが……」

「黙れ変態」

ショーラの身体を魔力が進り、次の瞬間、その魔力はまだ魔力を放出する何倍もの力を発現させる魔法へと変換され、青年に襲いかかつた。

空気が凍り、床が凍つた。

そこには巨大な氷ができた。

凍結魔法。

全てを凍結させる魔法。

だが、

「……危ねえなあ。永久凍結なんて、俺でもまだ難しいのに。やっぱりお前は才能があるな。特に、凍結系の魔法の才能が。俺は凍結とか燃焼とか、そんな風に魔法を別の力に変換させるのは好きじゃないから、凍結魔法だけを磨けば、凍結魔法だけならば俺を超えるかもしれないな」

青年は平然として、ショーラの真後ろに立っていた。驚き、見ると、青年の身体には黒い影のようなものが帯びていた。

「あの氷を溶かすのは、俺でも骨が折れる。あいつを避けるようにしたのは流石だが、もうちょっと範囲を限定できるようになった方が良いな」

ショーラは、当然のこととして、サヤには凍結魔法を向けなかつた。ショーラから見て先ほどまで青年がいた方向で、サヤだけはその氷の外にいた。

「これ……私が？」

ショーラは自分で驚いていた。自分がこんな魔法を発動したことが咄嗟に信じられなかつたのだ。確かに凍結系の魔法は得意分野だ

が、ここまで凍結魔法など、今までにしたことがなかつた。

「なんで驚いてんだよ。昨日、お前は変わつた。そして永久凍結の理論の構築はそこまで難しいものじゃない。……良く見るとこれは完全な永久凍結じゃないから半永久凍結と言つた方が適切かもしれないが、ここまで凍結魔法ならば凍結魔法の基礎理論さえしっかり把握していれば、後はできるかできないかだけだ。完全な永久凍結の場合は、時空間理論や座標指定の計算とか、次元との関係性、影響を考えでの魔法構築が必要だから、今思えば、お前にはまだ早い。そこまでの知識も経験も持つていらないだろうしな」

「だが、これは今までのものとは、全くの別だ」

ショーラは驚きを抑えに抑えた声を出す。青年は溜息を吐き、「当然だろう。魔法の構築方法からして全くの別になつたんだ。構築された魔法が変わらないわけがない。……と言つても、半永久凍結ならば」

青年は氷に触れた。

「ちょっとずらすだけで終わりだ」

直後、氷は跡形もなく消えた。

本当に、突然、消えた。

「な……ッ！」

ショーラは驚愕したように声を漏らした。信じられなかつたのだ。今の魔法は発動した自分ですら驚くほどの出来であつたのだ。それを、簡単に消し去る。これを驚かずして、何に驚く。

「……いや、そうか。貴様は、そうだつたな」

否、実際は、驚くほどのことでは、ないのだ。この程度で驚いていてはいけないのだ。この青年は、魔王を倒す青年。これくらいのことを難なくやってのけなければ、そんなことを達成できるはずもない。

「魔王を倒すのなら、この程度のことは、できて当然か」

ショーラはふつと笑つた。青年も微笑んだ。しかし驚愕に目を瞠る者がいた。

「魔王を、倒す……？」

サヤには彼らが何を話しているのか全く理解できなかつた。しかし、魔王くらいは知つてゐる。人間の敵。魔族の王。たつた一人で他全ての魔族の戦力の総和を超える戦力を有すると言われる者。それを、倒す。

それがどれだけ馬鹿げたことであるのかなんて知つてゐたし、酒に酔つた男たちがふざけて言つてゐるのを聞いたこともあつた。それは実現不可能なことであり、そんなことを言つたとしても、それは確実に冗談である。

だが、彼らの目は真剣だつた。本氣でそれを達成しようとしていた。気が狂つてでもいるのか。最初にそう思い、だがすぐにありえないと確信した。青年の方がどうかはわからないが、シェーラがそうであるはずがない。しかし、そうであるのなら矛盾が生じる。魔王を倒すなどと言つるのは妄言以外の何物でもないが、彼らはそれを本氣で言つてゐる。そして彼らの気が狂つていないとすると、彼らは冗談を言つてゐることになる。しかし彼らは冗談でそれを言つてはいられない。矛盾。それ以外の何でもない。

「そのはず、なのに……」

それが不思議と、本当に、冗談なんかじゃない、本氣の言葉のようと思えて

それが不思議と、この人ならばできてもおかしくないよう思えて できるはずもない、不可能なことなのに。神を殺すと言つて いる ようなものなのに。

それでも、何故か、不思議と

「魔王を、倒す」

サヤは呟いた。呼吸をするように、自然にと、いう意味ではなく、我慢しても、どうしても、吐き出してしまう息のように、呟いて、はつとした。

その言葉に、恐怖を覚えたのだ。

今まで何の現実味もない冗談であり妄言でしかなかつたその言葉に、言えば笑いさえ起きたこともあるようなその言葉に、サヤは、はつきりとした恐怖を覚えた。

何故か 現実味を、持つてしまつたのだ。

本当に、魔王を倒すことを、つまり、魔王と戦うといふことが、現実味を持った、歴然とすらした未来の一つのヴィジョンとなつてしまつたのだ。

魔族を統べる王。それと、戦う。

そんなことは、想像したこともなく、それどころか、サヤは魔族を見たことさえなかつた。ただ、それがどういうことなのかは理解できた。そして、何故かその恐怖を明確に覚えた。ぼんやりとした、言わば、健康状態の時になんとなく考える「死」に対する恐怖のような曖昧模糊とした恐怖ではなく、死の際にまで迫つたサヤからすれば、先ほどの体験のような、すぐ近くにある恐怖、もうすぐ自分に降りかかるだろう災厄に對しての恐怖を、はつきりと感じていた。それも、その恐怖の大きさは、先ほどの体験で受けた恐怖よりも、大きかつた。まだ体験していないし、想像すらできないはずで、そもそもありえないようなことなのに サヤには、これまでの人生にないほどの恐怖が感じられた。

「あ 」

がくがくと身体が震え始めた。背筋が凍り、涙が滲んだ。心臓の動悸が激しくなり、すつと顔から血の気が引いた。腰が抜け、思わずその場に座り込んだ。

その音で青年とショーラはサヤの方を見た。すると、二人は驚いた。……と言つても、二人の驚きは全く質の違うものだつたが。

「どう、どうした？ そんなに身体を震えさせて……まさか、私の魔法でこの部屋の気温が下がつたからか？ そう言えばまだ服も着ていないし」

「それに関しては大丈夫だ。しかし、これは俺の想像以上のようだな……」

シェーラは純粹な驚愕であり、青年は感心したような驚きであった。青年はにやりと口の端を上げた。

「シェーラ。服を用意してくれ。寒さが原因ではないが、そろそろ発つ。俺は自分の準備をしておくから、こいつを頼む」

「え？ あ、いや、おい待て！」

青年はシェーラの制止も聞かずに、シェーラの部屋を出ていった。シェーラはそれを見て憤慨しかけたが、どうにか抑え、そして一度だけ、深い溜息を吐いた。

「……とにかく、彼女をなんとかしないとな」  
サヤは未だに恐怖に震えていた。

第一節 - 15 - 昂揚興奮歡喜（前書き）

昂揚、興奮、歡喜。

青年は歩きながら、興奮した頭を巡らせていた。

これは予想以上だ！ まさか、あれほどまでに魔法の才があるとは思わなかつた！ それも、人間的ではなく、魔族的、つまり、論理的ではなく感覚的な魔法の才。俺もけつこうな才能があると思つてはいるが、天才と呼べるほどではない。だが、あいつは天才だ！ 俺ですら見たことがない天才。おそらく、この世界で一番の天才だ！ 総合的な能力が俺を超えることはないだろうが、魔法だけならば、いざれこの俺を超えるだらつ。魔力変換率、つまり魔力親和性が異常なほどに高いことはわかつていたが、あれほどだとは思わなかつた！ 俺も「きつかけ」は与えてやつたが、それでも、それだけで魔王と戦うことをあれほどまでに現実的に体験するとは思わなかつた。俺の魔王との戦闘シミュレーションのほんの一部を意識の中に放り込んだだけなのに、それだけで、あいつは俺のシミュレーションを超える出来の、さらに現実的なシミュレーションにまで発展させた。これはつまり、魔法の使い方が上手いということ、魔力変換率が高いということだ。それも、俺をはるかに超えるほどにまで。

青年は余りの興奮に顔がにやけてしまつていた。爽やかとはとても言えないような笑顔。しかし、嬉々とした感情だけは嫌でも伝わつてくるような笑顔。

「我が選択に、間違いはなし！」

青年は思わず叫んだ。

魔王と眼球。

「魔王様、御調子は如何ですか?」

チャイオニヤが恭しく言つた。

「なかなか良い。さすがだな、チャイオニヤ」

「勿体ない御言葉」

「しかし、趣味は悪い。私は好かんな」

「勿体ない御言葉」

先と全く同じことを恭しく言つチャイオニヤに、魔王はふつと微笑んだ。

「チャイオニヤ。我には貴様が未だに我が下にいることが不思議に思える。それほどに貴様は有能であり、それをしてもおかしくないような性格をしている」

「私が魔王様を裏切るなど、ありえませんよ」

「どの口が言つ」

「生憎、私には口がございませんので しかし、言わせてもらつましよう。私が魔王様を裏切るなど、ありえない。統一戦争でのことは、良く覚えておりますから」

「あれか」

魔王は楽しそうに笑つた。

「あれは面白かった。確か、あの頃は魔族も様々な場所に分かれていたんだつたな」

「左様でござります。しかし、魔王様がこの世に生誕してからは、全てが変わりました」

「ああ。まず近くにあつた あそこは誰が治めていたか、確か、ゾオルだつたか。それとゾオルと手を組んでいたルイアが治めていた場所を征服した。どちらもやはり、強かつた。さすがは現第六と第八と言つたところか」

「そう言えば、現将軍は全てあの頃にそれぞれ魔族を治めていた者

たちでありますか」

「そうだ。人間のような、ほとんど同種ではなく、多種多様に分かれる魔族を治めていたのだ。そこには一定以上のカリスマ性と、それだけを治めることができる力を持つていると私は考えたのだ」「はて。確か、シャム殿が提案したのではありませんでしたかな」「……シャムは助言しただけだ。別に、提案したわけじゃない」「魔王はいじけたように口を尖らせた。チャイオニヤは慌てたような素振りを見せ、わざとらしく見せ、言つた。

「これはこれは申し訳ありませんでした魔王様。失言でした。どうかお許しを」

それを見て魔王は溜息を吐いた。

「だから、私は貴様が何時裏切るのやらと思つているのだよ」「いやいや。私のような者こそ、忠臣であつたりするのですよ」「嘘を吐け。本当に、もし我がそのようなことを認めぬ王であつたのなら、貴様は殺されていてもおかしくないぞ」「だからこそ、私は貴方様に仕えているのですよ。おそらく、他の者たちも」

魔王は突然の言葉に少し驚いた。その間もなく、チャイオニヤは続ける。

「確かに貴方様は強い。最強の名がふさわしいでありますよ。しかし、私たちはそれだけで貴方様に忠誠を誓つわけがございません。魔族は誇り高い者が多く、もちろん、私を含めて、そのような者たちが自分の意に沿わぬ主に仕えましょか。いや、仕えるはずがございません。それくらいならば自ら命を絶つ者ばかりでありますよ。そして、私たちは生きて、貴方様に仕えている。それは貴方様の強さにではなく、貴方様自身に惚れたからでござります。その雄姿に魅せられて、私たちは貴方様に仕えることを心に決めたのです。私が皮肉を言つたくらいで殺すような者に私の主が務まるはずがありません。私は、貴方様のような、器が広く、いえ、これは建前でしょう。私は、貴方様の、全てに惚れた。その強さも、心

も、御姿も その全てに。ですから、私が貴方様を裏切るはずがないのですよ」

チャイオニヤは真摯に言った。

「……わかった」

魔王は感心したように言った。

「貴様。我に嘘が通じるはずがないことなど、知つておるう？」

魔王の右目になにやら紋様が浮かんでいた。チャイオニヤは笑つた。

「はははは。私如きの頭を覗いても、何も面白くはござりませんよ」

「良かるう。我が魔法の一端、受けるが良い」

魔王はぱつと手を振るい、同時に魔王の手から魔法が発動され、衝撃の波が生まれた。

地を揺るがすほどの轟音と共に、魔王の眼前には巨大な穴ができていた。しかし、そこにはチャイオニヤの姿は跡形もなかつた。逃げられたのであるう。それは魔王も知つていたし、だが先ほどの魔法は必要だったのだ。おそらく」の後シャムに怒られるが、それよりも我慢ならないことがあつたのだ。

「……あやつ。恥ずかしいことを、言いおつて」

魔王は顔を自分の腕にうずめて、言った。

魔法の結果、チャイオニヤの言葉に嘘があることはわかつた。

しかし、それはほんの一部分だけであり、それ以外は全て本心からの言葉であつた。

魔王はそれを思い出すと、さらに顔を深くうずめた。

第一節 - 17 - 眼球思案（前書き）

眼  
球  
思  
案。

「魔王様も、やはり可愛らしい御方ですね」

チャイオニーヤは呟いた。

「しかし、折角私が作り上げた傑作のことも少しは考えてほしいものです。私が転移魔法機能を付けていなかつたら、これも壊れていただじゃありませんか」

チャイオニーヤはちらと自らが作り上げた傑作を見た。そこには一人の人間がいた。いや、それは、人間ではなかつた。以前は人間だつたかもしれないが、今は少なくとも、そうではなかつた。

腹の辺りが裂かれてぱっくりと割れている。そしてそこには内臓ではなく、光る玉があつた。その玉は身体に根を張り、どくんどくんと鼓動を続けていた。

その時、ゾオルとルイアから通信魔法が来た。

『実験は成功だ。お前に言われた通りの行動をしたぜ、あれ』

「そうですか。では、それは解放してください」

『解放？ 何故そのようなことをするのだ』

『馬鹿かお前？ 僕にはわかつてゐぜ。こいつに、人間を殺させるんだろオ？』

「まあ、それもありますね。と言つても、ただ単にもういらなくなつただけですが」

『いらなくなつた？ どういうことだ？』

「実験が成功したのなら、この結果を活かしてさらなるものを作るだけだから、その個体はもういらないというわけです」

『ああ、そういうことか。わかつた。じゃあ、もう僕は好き勝手にさせてもらつ』

「はい。結構です」

通信魔法が切れた。チャイオニーヤは実験の成功について何の喜びも見せなかつた。自分の理論に絶対の自信を持つていたのだ。

チャイオニヤは魔族であつたが、魔法に理論を持ちこむようなことが多々あつた。無論、魔法は感覚で使つてゐるにすぎないが、それを理論として解析することによつて、新たな魔法の可能性を摸索してゐるのであつた。そして、それを魔族のために使うことを目的としていた。

先ほどの人間だつたものもその成果だ。人間の特異性、魔力の強奪とも言えるその能力を解析し、どうにかそれを活かせないかと研究した結果がこれだ。

魔族の魔法は感覚的なもの。つまりは、元々持つてゐる能力を使つてゐるだけに過ぎない。人間でいう、腕を動かしたり、喋つたりといった普通の行動。それがすなわち、魔族の魔法だ。故に、魔族たちは人間よりも圧倒的に早いスピードで魔法を構築することが可能であり、それは魔族が人間よりも有利であることを示してゐる。

しかし、魔族の中には人間に敗れるような者もいる。それはその魔族が弱いというわけではなく、人間の特異性、つまりは倒した魔族の魔力を奪うことができるというものが原因だらう。無論、魔族の魔力は自然回復である。魔族にとって、魔力とは人間の体力のようなものだ。とはいっても、人間の体力とは違い、その回復にはかなりの時間を要することもある。数百年、いや数千年以上の時を生きることができる魔族からすれば人間で言う体力が自然回復するまでの時間と同程度かもしれないが、人間からすればその時間はとても長い時間である。

そして、故に、魔族は人間を恐れていいるのだ。

魔力の自然回復が間に合うよりも先に、人間がその魔力をどんどん高めていったのなら、それは、とても危険だ。元々の魔力量が無に等しい人間を、魔族はひどく恐れるようになつた。正確には、敵と認め始めた。

しかし、それでも最初はそこまで大きな敵だとは認識していなかつた。いつでも滅ぼせる敵。魔族を殺すことはあるが、魔族も人間を殺すことがあるのだから、少しならば自然の摂理に適つたことで

あろう。魔王はそう思つて、人間を危険視し、敵視していながらも、そこまで本氣で人間を滅ぼそうという気はなかつたのだ。

だが、その思考は、ある時、覆された。

たつた一人の人間によつて。

その人間は、魔族を殺した。將軍すらも殺した。人間にはできるはずもないことをやつてのけた。

それから、魔王は本格的に人間を危険視し始め、人間をこの世界から駆逐することに決めた。

そのような経緯もあつて、チャイオニーヤはそれを作り上げた。

人間の特異性。魔族が恐れた特異性。それを活かすために、作り上げた。

人間を核とした、とある魔法兵器を。

青年と少女の出発。

「世話になつたな」

「ああ。貴様は本当に、一日しか滞在していないのに、今までここを訪れた誰よりも印象深いよ」

「当然だ。俺は、魔王を倒す者だぞ？ そんな俺よりも印象深い人間なんて、いるわけないだろ」

「まあ、そうだな。そのようなことを大真面目に話すような そして、それが実現できるかもしれないような人間は、貴様以外にはいないものな」

「かもしれない、なんて言つなよ。絶対に実現してやるよ。賭けてもいい」

「なにを賭ける？」

「この世界を」

「それは……この世界が、貴様のもののような言葉だな」

「そう言つている。いずれ、そうなるのだから」

「……貴様なら、可能かもしれないな。この、戦乱に満ちた世界を統治することが」

「できるぞ。俺は、そのために生きているんだ。馬鹿で愚かな人間の世界を俺が住みやすい世界にするためには、そうする他に方法がない。俺以外でも見込みがあるやつはいるが、俺がやつた方が確実だし、何より、世界征服というのは、少し心がときめく」

「そうか。では、またいづれ、会おう」

「おう、じゃあな。次に会う時は、魔王を殺してからであることを望んじけ」

青年とサヤは門を出た。ショーラのような身分の者がわざわざここまで見送りに来るのは珍しいことであり、部下にも止められたらしい。しかし、ショーラはそれを許さず、自ら青年を見送った。これには青年も少し良い気持ちになる。

「……あなたは、何なんですか？」

サヤが訊ねる。サヤはもう全裸ではなく、服を着ていた。白を基調とした服で、あまり大仰な装飾などはないが、それでもかなり高級なものであることが見受けられる。シェーラが昔着用していた服だろうか、と青年は推測した。

「魔王を倒す者、つて何度も言つていたと思つが」

青年とサヤは歩いてはおらず、車の中にいた。車と言つても、魔力によつて動く車だが。

これは青年が開発した魔法の一つである。材料さえあれば簡単に作ることができ、時間もあまりかかりない。魔力を充填することによつて、普通に歩くよりかなり速く移動することができる。青年はその操縦を魔法で作り上げた疑似思念体に任せていた。疑似思念体と言つても、それは青年の普段使わない部分の意識の一部を隔離し、自律化させただけのものであり、無から作り上げたわけではない。

「そういう意味じゃ、ありません。……そもそも、なんで、あなたは私を助けたんですか？」

サヤが青年を睨んだ。恨みを込めたような睨みだつた。

「私は、助けてほしくなんか、なかつた。あなたが私を助けなんかしたから、私は、あの街から出なきやいけなくなつたんだ。あなたの、せいで」

その車 魔法車とでも言うべきその車はかなりのスピードで走り、それはサヤが外の景色を見たのであれば驚愕するほどであつたが、それでも青年が魔力を用いて走るよりは遅かつた。

それならば、何故、このような魔法を開発したのか。その答えは簡単である。こんな場合のことを考えて、青年は魔法車を開発したのだ。青年は魔力の才がある者を探していったわけであつて、魔力の才が開花している、即戦力の人材を求めていたわけではないのだ。魔力を使えないということは、移動手段が魔力に頼らないものであるということ。それは青年には遅すぎたのだ。移動時間はできるだけ少なくしたいというのが青年の考えであつた。故に、自分が見つけ

た人間が、その才ある人間が魔力を一切使えないような人間であることを予測して、青年は魔力を使えない人間も運ぶことができる魔法車を開発したのである。

「……やっぱり、普通はその反応だよな」

青年は数日前に自分が助けた少女、レナリーのことを思い出していた。彼女は自分に素直に感謝したが、青年の今までの経験からすると、サヤのような反応の方が圧倒的に多かったのだ。

青年はこれまでにかなりの数の人間を助けてきた。魔族の襲撃のなかつたこの数年間も同じである。人間同士の戦争に巻き込まれた村や街から人を救出したり、治安の悪い街では今にも殺されそうにしている無実の人間を助けたりした。

しかし、彼らの反応のほとんどが、感謝ではなく、怒りであった。「何故、助けた」そんな言葉がほとんどだつたのだ。

私はあの街で生きていたかつた。あの街とともに死ぬつもりだつた。あの人に刃向かつたら、この街では生きていけない、どうすればいいんだ それ以外にも、様々なことを言われた。

無論、青年は良い気分ではない。青年は感謝されるのが好きで、怒りを抱かれるのは嫌いなのだ。

しかし、青年は、普通の人間とは少し違つた。彼は、自分の為だけに生きていた。

「俺が、お前を助けたかつたからだ」

青年は親が子を守ることを当然だと言つたのと同じように言つた。

「つうか、お前も理解しているじゃねえか。『なんで助けた』。その言葉が既に、お前の心情を表している。助けたという単語が出てくると言つことは、お前は、そのような状態にあつたのだろう? 助けてほしいと思つてしまふような状態に」

サヤは矢に胸を打ち抜かれたような気分になつた。青年は魔法を使つたわけではないが、サヤの心情の大体を把握していたのだ。青年は魔法についての才も桁外れであるが、その他の才についてもそれは同じであつた。彼にとつてかかれれば、一人の少女の心情を予測

することなど容易であつたのだ。

「それ、は……」

実際、サヤもそれはわかつていたのだ。自分が助けてほしいと思っていたことは、わかつていた。しかし、それを信じたくはなかつた。この状況を信じたくはなかつた。この状況を、誰かのせいにしたかったのだ。ハッ当たりでも何でも良かつた。ただ、自分の責任を、誰かに押し付けたかったのだ。

「……」

故に、サヤは沈黙した。それに青年は何も言わず、サヤが口を開くのを待つた。

そして、十分ほど経ち、

「……あなたの、言う通りです。私、助けてほしかつた。助けて、ほしかつたんだ」

堰を切つたように、サヤは話し始めた。

「私、こわかつた。何をされるんだろう、って。そんなことを思いながら、何をされるかは、なんとなく、予想がついて。でも、それを信じたくない。そんなことはなかつたんだって、思いたくて。だけど、それは、やつぱり実際にあつたことで。それが、わかつていながらも、わからなくなくて。あのことが実際にあつたということを、拒絕するために、すべてを、あなたのせいにして……」

すると、サヤの目から涙が流れた。それこそ、堰を切つたように。「ごめん、なさい。ごめんなさい。ごめんなさい。私、あなたは何にも悪くないのに、それなのに、あなたのせいにしてました。私、やつぱり、駄目な子だ。こんな私なんか、もう、死んでしまった方が

「……」

その言葉を口にしようとしたその時、サヤの口を青年が手で抑えつけた。

「死んでしまつた方が良い、なんて言つくなよ？　お前は、この俺が助けたんだ。感謝し、生きる。お前はこれから、俺のものなんだから、死ぬことなんて、許さない」

青年はサヤの目を見て、言った。それは決して優しげな調子ではなかつたが、非情でもなかつた。親が子を怒る時のような、そんな、厳しくも愛のある調子の言葉だった。

それに、サヤはただ、泣いていた。

第一節 - 19 - 青年と祖國の戦い（前書き）

青年と祖國の戦い。

「そろそろ、初めの目的地だ」

サヤが泣きやんだと見るや、青年は話し始めた。

「今回は、見てるだけで良い。俺が全部やる。だが、見ては、いろ。見なければ、意味がないからな」

「……どういう」

「ことですか、ってか？ 百聞は一見に如かず、だ。まずは見る」  
サヤは言われた通り、魔法車から身を乗り出し、向かっている方向を見た。そこには、巨大な山があつた。赤黒く、活動中の火山のよに見えた。

「……山？」

「いいや、違う。あれは魔族だ。俺の予想よりも遥かに大きいが、魔族には違いない。あのでかい団体だから、中に部下の魔族がいると考えてもいいかもな。とりあえず、今回はこいつを倒す」

サヤは驚愕で口が開かなかつた。あれが魔族だというのにもちらん驚いたが、あれを倒すということにもつと驚いた。

「さて、まずは宣戦布告といこつか」

青年はサヤと同じように魔法車から身を乗り出し、山のような魔族に腕を向けた。サヤは背中に密着した青年に少しどきりとしたが、それはすぐに消えた。

青年の腕に何かの力が流れ、その周りの空間の何かが変わり、目に見えない何かが青年の腕から射出されたように感じた。

直後、山のような魔族の身体が大きく抉れた。まるで、砂糖で作った山をスプーンですくつたように、大きく抉れた。

「お前は魔法車に乗つてろ。障壁を張つてるから危険の心配はするな」

その言葉と共に青年は消えた。かと思つと、山の魔族がまたもや大きく削れた。すると、魔族の身体の内からぞろぞろと黒い点のよ

うなものが飛び出してきた。それは巣をつついたら出てくる虫の大群のようだつた。その点の一つ一つから光や炎が生み出され、それはある一点を狙つていた。

そのある一点である青年は剣を大きく振り、自らを向かつて放たれた魔法を全て消した。同時に魔力を放出し、黒い点の一つである魔族に近づいた。鳥のような翼を持ち、獅子のような爪を持つていた。青年はその形容し難い あえてするならばオウムとウサギを一対二に分けて合わせたような 頭を掴み、毒性の魔力を流し、その魔族を殺すと、即座にその魔力を奪つた。

「畜生が！ やつぱり馬鹿だな、お前らは！」

青年はそう叫んだが、サヤには聞こえていなかつた。  
しかし、魔族には聞こえていた。それは、山のよつな魔族も同じことだつた。

「……お前ら、下がれ」

聞き取りにくいほど鈍く重い声が大気を揺るがした。青年はその声だけで身体が震え、その声はサヤにまで届いていた。

「こいつは、儂がやる。お前らは、手を出すな」  
ずずずつ、と山のような魔族は動き始めた。岩で何本もの腕が形成され、それは人間の腕に似ていた。スケールは全く違うが、その形だけは人間のものようだつた。

山の魔族の声を聞いて、空を飛びまわつていた魔族は戸惑いながらもその命令に従おうと、青年に背を向けた。

「畜生ども。この俺が、逃がすと思つてんのか？」「逃がすことになる」

山の魔族の腕が一斉に青年を襲う。青年は「邪魔だ」と腕を振り、同時に魔法を発動させ、その腕を消滅しようとした。

「……予想はしていたが、お前、将軍とかいう階級じゃあ、ねえよな」

青年は冷汗をかき、言った。

腕は、消滅しなかつた。それどころか、青年の方に向かつていてい

た。

「その通り。儂は『ラップス』。第十六將軍、ラップスだ。見る限り、お前はエレクトロたちを殺した人間らしいな。仇を、とらせてもうおつ」

「は！ 不可能だ。この俺は、畜生如きに負けはしない」  
向かってくる腕に青年は再度魔法を発動させる。しかし、腕は消滅しない。

「人間如きが、儂に勝てるはずもなかろう」

腕が青年を掴もうとする。青年はそれを避けたが、その風圧によって吹き飛ばされる。そこを他の腕が襲う。掴もうとせず、はたき落とすように、平手が青年の方へ猛スピードで向かい、それは直撃した。

青年の身体は呆氣なく吹っ飛び、地に思いきり叩きつけられ、落下地点のあたりが赤く染まる。

「まだだ」

「ラップスの腕が青年が落下した地点を何度も殴る。クレーターができる、青年の身体はペしやんこになる。なつた、はずだつた。

「もう無駄だ。お前の魔法は征服した」  
そのはずなのに、青年の声が聞こえた。

「ラップスは思わず攻撃の手を止める。そして、青年が落下した地点を見る。そこには、確かに青年がいた。身体に黒い影のようなものまとめた青年が。

瞬間、ラップスに強烈な既視感が襲つた。これは、どこかで、見たことがある。

その答えはすぐに出た。エレクトロの魔法。それが、青年の使つてゐる魔法だつた。

「あの犬つころの魔法は、やつぱり便利だな。魔力消費量は大きいが、応用すれば、こんなことだつてできるんだから」

その声が聞こえた瞬間、ラップスの身体に亀裂が走り、そこから

黒い影が滲みだした。

「畜生でしかない魔族には理解できないだろ？。この魔法は、人間だからこそ可能なんだ」

「何を言つてはいる？ 魔族が人間より、知能が劣つてはいるとも？ そんなことはない。確かに儂はそうかもしけんが、人間より知能が高い魔族もいる。そして、そもそも、この魔法が、どうしたといふのだ。儂には、効かん」

「はつ。そういう意味じゃないんだよ。そもそも、お前は知能というのを理解していない。知能は種族によつて決まるものじゃない。もっと根源的なもので決まる。そんな、後になつてからできたようなものでは決まらない。俺より知能が高い魔族なんていねえよ。それは知らん。しかし、魔法は知能などで決まるものでは」

「だから、知能は関係ないんだよ」

コラプスの言葉を遮り、青年は言つ。

「知能とか、そんなものじゃない。俺が言つてはいるのは、人間という種族のことだ。その特性。その本質についてだ。魔族は人間の特性を『魔力を奪うこと』だけだと思っているかもしれないが、実際は、違う。魔族と人間の最大の違い、それは、『敵がいなければ生きることができない』ということだ」

コラプスはその間にも青年に對して攻撃を続ける。しかし、その全ては青年の身体をすり抜ける。

「人間は敵がいなければ生きることができない。捕食する敵がいなければ、存命することはできない。人間は勝者でなければ生きることができない。敗者になれば、死ぬ。しかし、戦わなければ生きていけない。魔族のように、やろうと思えば誰とも敵対することなく生きることなんてできない。人間は、捕食をしなければ生きていけないのでから。何かを殺すことによつてしか、生きることができない。根つからの戦闘民族なんだ、人間という生物は。そして、常に勝者であり続けた者だけが、生きることができる」

青年が向かつてくるコラプスの腕に触れる。すり抜けなかつたこ

とに驚愕したゴラップスだが、その瞬間、青年の触れた辺りのゴラップスの腕に亀裂が走り、そこから影が噴出した。

「ゴラップス。お前ら魔族とは、違うんだ。人間は、戦うことしか生きていけない。そんな生物なんだ。平和的に生きていいくことなんて、できるはずがない。戦うことによつてしか、生きることができないんだ。それが当然過ぎて、人間は、他の種類を淘汰することができない。魔族とは共存することはできない。自分たち以外は、全て敵で、それを相手も思つてはいると考える。それが人間だ。魔族に対して『魔の族』なんて言つてはいるが、本当は、人間こそが『魔の族』なんだよ。人間の価値観で言つと、その人間こそが『魔の族』なんだ。だが、誰もそれに気付こうとしない。気付いたとしても、その生き方しかできないのだから、変えようとはしない。変えたとしたら、その人間は敗者であり、つまり、死に至る」

青年が両腕を広げる。それは、人類全ての罪を背負つた者を磔にしたものに似ていた。

「そんな『魔』が人間だ。罪が人間だ。俺はそれを理解し、魔法に組み込んだ。魔法は知能じやない。論理じやない。もつと感覚的なものだ。感情的なものだ。心と言つてもいい。しかし、ここではこう言おう。『魂』こそが魔法の源だと」

そして、青年は、笑い、言う。

「俺は、魔王を倒す者。『魔』である人間全ての頂点。偽物の『魔』の王である、魔王を倒し、世界を制し、この手に治め、自らのための世界を創造する者。両性具有の尊き御方は、人類全ての罪を背負いなさつたらしいが、なら俺は、人類全ての『魔』を統治する。人類の全ての罪は天に存します御方によつてなくなつたらしいが、『魔』はそのままだ。故に、俺が、それを統治する。統治し、『魔』である今まで、俺の理想郷を実現させる。三つの『ゴク』とはまた別の、天の国とはまた別の『キヨウ』をこの世界に実現させる」

青年は不遜に言う。しかし、青年の言葉にはどこか納得させるも

のがあつた。『この人間ならばやつてしまふかもしれない』。魔族であるコラップスにすらそう思わせるものが。

「わかるか？ これが、人間だ。絶対の勝者であることを望み、自分たちだけが繁栄すればそれで良いと思う。そして、俺は人間だ。この世の誰よりも人間らしく、つまり、誰よりも勝者なんだ。魔族とは、『魂』の在り方そのものが違う」

コラップスが魔法を発動した。その巨体が立ち上がり、それは山そのものが隆起していくようだつた。青年の周りの地、全てが隆起し、青年の身体を取り囲む。じゅうじゅうと黒い湯気が立ち昇り、それは青年の身体を飲み込んでいく。

「人間の価値観で言つと、お前ら魔族は『善』だ。しかし、それが駄目だつた。コラップス、確かに、お前らの肉体は魔法に最も適している。だが、『魂』は魔法に適していない。お前らは所詮、畜生だ。バカだ。その肉体は『魔』そのものだが、その『魂』に『魔』を持たない」

コラップスの肉体が青年を取り囲む地そのものが、少しづつ色を変えていく。赤黒いその色は、黒が消え、赤く光り、その輝きはどんどん激しくなる。やがて、赤すらそこからは消え、それらは白に変わる。青年を飲み込んでいる黒の湯気もその色が消え、空間そのものが歪んでいく。いつの間にか、青年の周りには強烈とも言える風が吹き荒れていた。

「人間の『魂』は『魔』そのものだ。魔法を構築する上で最も重要なものは『魂』だ。今まで、人間は基本の魔法すらろくに扱えやしなかつた。しかし、今や人間は、自分で新たな魔法を作りだすことができるようになつた。それは、魔法を知る以前は形にできなかつたその『魂』を、そのままにして顕現する術を得たということ。その『魔』たる『魂』を、『魔』そのもののまま、顕現する術を得たということだ」

極度の高温により、コラップスの身体の周囲の地面は融解し、空間そのものが歪んでいるように見えた。それは人間が思い描く地獄に

似ていた。敬虔な宗教信者がもしこの光景を見れば、世界の終末が始まつたと思つたかもしれない。

「知れ。人間を。その『魔』の深さを」

「戯言を。この状況がわからないのか?」

「わかつてゐるさ。言つただろう? お前の魔法は、征服したと」

「そうして、青年は魔法を発動させた。

瞬間、世界は一変した。

高温により白くなつてゐたコラップスの肉体が、一気に黒く染まつたのだ。

「あの犬の魔法は他者から攻撃を受けた場合にのみ発動するものだつたが、実際のところ、それ以外にも使い道はある。あの魔法は自らの存在そのものを周囲に拡散させることによつて、本体が攻撃された瞬間に、その肉体から周囲に満ちた自らの存在に精神を移し、そこにまた肉体を構築するという手法だつた。それを応用して、俺は魔力だけを周囲に拡散し、それを自らの制御下に置いた。魔族の肉体は、魔力でできているようなもんだ。つまり、俺は、魔力をお前の中にも拡散させ、それを俺の制御下に置いたんだよ」

「コラップスは動かなかつたし、動けなかつた。その全ては、既に青年の制御下に置かれていた。

「聞こえていても返事なんてできないだろ? が、教えてやろ? これが、人間だ。根からの戦闘民族であり、勝者であり、征服者。だから、この魔法が扱える。魔族に対しては、最高の侵食魔法とも言える、この魔法が」

青年は手を開き、腕を天へ突き出した。すると、コラップスの身体が一気に青年の頭上へと集まつた。ただの黒い影に成り果てたその肉体は、だが山ほどの大きさであり、青年の周囲の地形は、一瞬にして、岩盤が露出するほどになつてゐた。

「じゃあな」

そう言つて青年が宙を掴むようにして手を閉じた瞬間、それに同調して、青年の頭上の黒い影は一気に小さくなり、呆氣なく、ぷつ

んと消えた。

魔王と錦下。

魔王は城のバルコニーから、外の景色を見ていた。この地域は人間からすれば極寒の地であり、魔王の見る景色には銀世界が広がっている。

魔王城のある領土、すなわち本領とも言える魔族の領土は、人間たちの住む大陸からは少し離れた大陸にある。二つの海に挟まれたその大陸の中でも北に位置する場所に、魔王城はある。そこを第一の拠点として、魔族は自分たちの領土を広げて行っているのだ。

魔王城から西に行くと、人間たちが住む大陸はすぐそこであり、その辺りにも人間はあまり住んでおらず、魔族はその大陸の北三分の一ほどを難なく自分たちの領土とした。

しかし、そこから先には人間たちが住む国があつた。南には大国。西には多くの国があり、文明としては西の方が栄えているように思えた。

それから糸余曲折があり、現在、魔族は二つの海に挟まれた大陸と、人間たちが住む大陸の中でも、最も大きな大陸の北の三分の一ほど。そして、南の大国の一部、西の多くの国の幾つかを領地とした。

「……シャムか」

魔王はシャムの方を向きもせずに言った。

「魔王様、此処にいらしたのですね」

シャムはそれに驚きもせず、言った。

「何か、用か?」

「いえ、特には」

「そうか」

この極寒の地で、魔王は身に何も付けていなかつた。もしも人間がそれを見れば、魔王のことを大いに心配するだろう。しかし、魔

王は人間のような外見をしているが正真正銘の魔族であり、故にシャムは魔王の体調を心配することはなかつた。

だが、

「魔王様。何か、御悩みで？」

シャムは気遣うような声で魔王に訊ねた。魔王の体調は心配する必要などないが、わざわざ外に出るなど、魔王にはあまり見られないことだつたのだ。その精神状態を心配することは、なにもおかしいことではない。

「いや。ただ、久しぶりに、外を見るのも良いと思つてな」「そうですか」

シャムはただ魔王に同意した。その言葉が嘘だということはわかつていたが、それをわざわざ指摘するなど愚の骨頂である。主の意向に従つてこそその従者である。主が何も言わないのであれば、従者たる自分は、何もすることはない。

『 なあんて、思つてるんでしょう。シャム？』

突然、レプグラムの声が響いた。

魔王はそれに驚くことはなかつたが、シャムは驚いたように身体を震わせた。

『ハロー。げんきいー？ 私は元気じゃないけどねー。それと、シャム。魔王なら驚いて身体を震わせるのも可愛いけど、あんたがやつても氣味が悪いだけだから、やめてよね。というか、こわい』

『 .....魔王様、レプグラムとの戦闘許可を頂けないでどうか』

シャムは恭しく魔王に頭を差し出した。しかし魔王は「無駄なことはするな。魔力は温存しておけ」とそれを一蹴。シャムは口には出さなかつたが、やるせない顔をした。

『だからそれが氣味悪いって.....。ま、いいや。今回は、シャムをからかいに通信魔法してゐるわけじゃないしー』

今回は、ということは、いつもはそのために通信魔法をしているということである。それ以外にも、魔王が魔族を統一するまでの軋轢なども組み合わさつて、シャムはレプグラムのことを少しながら

嫌っていた。

それはらいせと言つてはなんだが、魔王に一任された將軍の領地分配において、レプログラムを魔王城からかなり離れた場所に向かわせた。シャムは密かにレプログラムが恨み事を発するのを期待していたのだが、シャムはしかと聞いてしまつた。『やつた。これで、シャムの目から離れてさぼれる……！』という、レプログラムの嬉々とした声を。

「じゃあ、何故、通信魔法などをしたのだ？ そのような案件があるのか」

故に、シャムの言葉が少々荒っぽくなつてしまつのも仕方のないことと言えよう。

『一応ね。でも、それはまた後で』

「後で言つ必要などないだろ。今言え

『わかつた。コラップスが死んだ』

「……は？」

一瞬、レプログラムが何を言つているのか理解できなかつた。

『正確には殺された、かな。私の構築した『世界縮図』を見る限り、魔力反応が消失しているしね』

レプログラムは何でもないよつに言い、それにシャムは激昂しかけた。しかし、しなかつた。

何故か。

理由は単純である。魔王が冷静だつたからだ。

「やはり、な。あの人の予想進路からして、コラップスと戦闘することになるだろ。ことは予想できた」

『まあね。私もコラップスに何度も忠告したんだけど、聞く耳持たずだつたんだよね。全く、なにが『エレクトロの仇を討つ』よ。

自分が殺されてちゃあ、意味がないじゃない』

もー、といじけたようにレプログラムは言つ。

「それは、魔族としての誇りだらうな。誇りを持つが故に、戦つた。仲間を殺した者を目の前にして、何もせずにいられる魔族はない

『なにそれ。私に対する嫌味?』

「いや、称賛だ。お前のような者がいなければ、もしもの時に危険だからな」

『あ。そうなの? えへへ、ありがと。褒められるのって、やっぱり気分が良いわ』

シャムには嫌味にしか聞こえなかつたが、魔王は正直者なので本心からあの言葉を言つていいかもしれない。しかし、やはりあれは嫌味だとシャムは思つた。

「しかし、『ラプスまでもか……。エレクトロを倒したのは、偶然ではないようだな』

『らしいねー。『ラプスがあの位に甘んじていたのは機動力に欠けるからだし、その魔法はエレクトロとは正反対とはいかないまでも、別物。しかも、おそらく、成長している。……嫌だなあ。もし私のところに来たら、逃げよつかなあ』

「勝手にしろ。私が許す」

『そう?』レプグラムが弾んだ声を上げる。『じゃあ、本当に逃げるよ?』

「ああ。むしろ、そちらの方が好都合だ。お前があの人間に負けたとすれば、その膨大な魔力が人間の手に渡り、不都合。勝つたとしても、不都合だ」

『なんで? 勝つたら良いんじゃないの?』

「決まつていいだろう。この私が、戦いたいからだよ

『それは、魔王として?』

「それもある……が、ただ一個の魔族として、だ。あやつらも、我にそのようなことを望んではあるまい。我も知つていて。我が王たる者は、我が我であるからだ。それを曲げれば、我に仕え、散つていつた者たちに示しがつかん。我は、ただ一個の魔族として、その人間と戦つてみたい。もしやすると、我と同等に戦えるかもしれないしな」

『あはは。それはちょっと非現実的だけど、もしそうまでなつたら、

やばいね』

「その点は心配するな。我が、負けるはずがないだろ？』

『それは確かに。魔王が負けるなんて、想像もつかないし』

その言葉にはシャムも同感だった。この世界に、魔王に勝てる者など存在しない。もしも、一人の人間が、魔王以外の全ての魔族を殺し、その魔力を得たとしても、魔王に勝てるとは思えない。それほどまでに、魔王は、強いのだ。

『じゃ、本題だけど、魔王。あんた、何を悩んでいるの？』

突然　　いや、レプグラムにとつてはそうでないのかもしれないが、少なくともシャムにとつては、その言葉は突然だった。

それは魔王も同様のようだったが、その動搖を全く声に滲ませず

に応える。

「何も悩んでなどいない

『嘘』レプグラムは即座に言つた。『シャムですら、気付くのよ？この私が気付かないわけないじゃない。魔族の長なら、隠し事なんてしないでよね』

「……悩んでなどいない

魔王は口を尖らせていじけたように言つた。すると、

『シャム！』

とレプグラムが声を上げた。

「……なんだ？」

シャムはレプグラムの次の言葉が予想できたが故に、苛立ちを声に滲ませる。

『これよ！　今の魔王！　あんな感じが、理想なのよ！　もしもあんたが今をやっても、気持ち悪いだけと言つたか吐き気を催すだけと言つたか、そんな感じだけど、魔王がやつたらこうなの！　シャムも見習いなさい！』

「どう見習えと言つたのだ……」シャムの呆れた声。

『魔族なんだから、姿なんて自由自在でしょ。ピーピリープリーとかもそうだけど、やっぱり人間の姿って良いわ。その魂はクズだ

けど、外見だけは認めてあげても良い。シャムも人間の姿になれば良いのに』

「却下だ。魔王様と同じ姿になることなど無礼にもほどがあるし、人間と同じ姿になるなど嫌悪しか湧かん」

『えー。……じゃあ、せめてその腕とか、穴とかをなくしてくれない? 気持ち悪い』

「却下だ。在りのままの姿でないと、無駄な魔力を使つてしまつだろ?』

『そんなもの、ないと同じくらゐの魔力じやない。 ま、良いわ。とりあえず、魔王。元氣出しなさいよ。悩みは遠慮せずにシャ

ムに言いなさい。じゃね』

レブグラムの言葉と同時に、通信魔法が切れた。すると、魔王は憤慨したように言つた。

「レブグラムめ。あやつは、いつまで経つても我に敬意を表そとしないな。あげくに、悩みがあるなどと、根も葉もないことを……いや、確かに、そうなのだが」

「悩みがおありで?』

シャムは今言わなければ言つ時はないと想い、言つた。レブグラムのことは好かないが、魔王に対等な立場から意見できる唯一の者である。『ごく稀にだが、魔王はこのように悩むことがあり、その時、シャムには何もできない。しかし、レブグラムは不遜にも魔王に意見する。それにより、魔王は自らの心中を吐露してくれることが多い。そのため、シャムはレブグラムを嫌つてはいるが、同時に感謝している。

「…………一応は、な』

魔王はとても言つにくわづこしながらも、言つた。

「本当に、この方法が正しいのか、と思つてな』

なんだ、そんなことか。シャムは思い、苦笑する。

「何を今更。もう決めたことではないですか。魔王様は待機し、来るかもしれない時に備える。魔族は人間と違い、魔力を回復するた

めの手段は自然回復を待つしかないのです。それなら、魔王様は万全の状態となるべきではないですか」

しかし、そんなシャムの言葉に魔王は眉をひそめる。

「人間は魔族を殺せば殺すほど強くなるだろう。ならば、我が今すぐにも、直々に倒しに行く方がいいのではないか。我が万全の状態であろうとなかろうと、今なら、例の人間も我にとつては赤子も同然だ」

「それはそうですが、今でさえ、人間は自分たちで争っているのですよ？ そんな者たちの片づけを、魔王様がわざわざする必要はありません」

「数年前までは、我が直々に行くことも多かつただろう。それなのに、何故、今は」

「もう戦争が始まったからです」シャムは言った。「魔族と人間の戦争が始まったのです。魔族と人間の戦争です。魔王様と人間の戦争ではないのです。それなのに、魔王様が御一人で全てを片付けてしまつたら、魔族の中に不満を訴える声が生ずるやもしれません」

「そんな声は知らん」

「そう言わないでください。私たちは、魔王様に頼つてもらいたいのですよ」

「……そうか」

魔王は未だに納得のいかない顔をしていたが、やがて、溜息を吐きながら、

「ならば、良いだろう。人間の掃除は、任せた。我は、もしも人間が魔族を滅ぼし得る力を得た場合に備え、力を蓄えておくよ」

そう言って、魔王はその場から姿を消した。

それを確認すると、シャムは魔王が先ほどまでいた場所に畏敬の念を込めた礼をし、魔王と同じように姿を消した。

第一節 - 21 - 勇者誕生（前書き）

『勇者』、誕生。

青年が魔法車に帰ると、サヤがなんとも形容し難い顔をしていた。

「なんて顔してんだ」

青年は怪訝に思い、そう訊ねた。すると、サヤははつと意識を戻し、「驚きました」と言つた。

「そりやあ、驚いただらうな。でも、その感想が『驚きました』つてのは、なんとも」

「なんですか？　お、おかしいですか？」

サヤがおろおろと不安げな顔を見せた。

「おかしい」

しかし青年はサヤの不安を取り除くことなどしなかつた。すると、サヤはショックを受けたように目を瞠り、すぐその顔をしょんぼりと俯かせた。

「あれが、魔族との戦闘だ」青年が言つた。「あんな派手な戦いは滅多にないが、あれくらいの強さの奴が、まだまだ残つている」

「……あんなのが、まだ？」

「ああ。まだまだ。と言つても、魔族の中では百位に入る猛者ではあるんだろうな」

その言葉にサヤは戦慄を覚えることはなく、ただ驚いただけであつた。あまりにも現実味がなさすぎて、未だに先ほどの戦闘を事実として受け入れてないのだ。

「魔王は、あれよりもっと強いんですね」

「昔見た魔力の余波から予想した、その時の魔力消費量だけでも、今の奴の十倍はあるな。そんな大規模魔法を何の考えもなく使えるほどには強いだらう。現時点では、俺の万倍は強いんじゃねえか」

「……そんなの、あなたは勝とうとしているんですか？」

「無論だ。俺は、魔王を倒す者だからな」

その言葉にサヤはびくりと反応する。そして、サヤは自らの疑問

をそのまま伝える。

「あなたの名前って、なんですか？」

それに青年は少し迷うようなそぶりを見せ、

「魔王を倒す者、で充分だ」

と答えた。

しかし、サヤはそれで納得せず、「本当の名前は、なんですか？」と訊ねた。

青年は、予想よりも深くまで踏み込んでくる奴だな、と感心した。

「言つ必要なんてない」

「納得できません。と言つたか、いつもいつも魔王を倒す者、って呼び方じやあ、長いじやないです。だから、もつと短い名前はないんですか」

その不遜とも言える言葉に青年は驚きを隠せず、額に汗を滲ませた。自分も自分でかなり自分勝手な人間だと思っていたが、サヤもかなり自分勝手な人間であるようだ。名前が長いから変えろ、などと言われるとは青年も思つてもみなかつた。

「……じやあ、お前が考えてくれ」

青年は面倒くさくなり、投げやりに言つた。すると、サヤは真剣に考え始めた。半ば冗談で言つたのだが、サヤはうんうん唸りながら考えていた。

そして数分。

「……『勇者』」

サヤの口から、そんな言葉が発せられた。

「勇者、といつのは、どうでしょ、う？」

サヤは顔をぱあつと明るく輝かせ、言つた。

「勇者？」

「はい、勇者です」

「なんで勇者なんだ？」

青年が訊ねると、サヤは得意げに胸を張つて答えた。

「魔王を倒すなんて、勇気のある人じやないとできるはずがありま

せん。そんな勇気を持つ者。だから、勇者です。どうですか？ け

つこう良いと思つんですけど」

サヤは青年を見て、首を傾げた。どうやら青年の評価を待つているらしい。

その青年はと詰つと、サヤの言葉に驚いていた。

今まで、魔王を倒すなんてことを言つて、無謀だとか蛮勇だとか言われたことはあったが、勇気とは言われたことがなかつた。

「そりが。勇氣、か。勇氣ある者。勇者、か。……確かに、気にいつた」

青年は氣の良さそうに微笑み、言つた。

すると、サヤはまたもや 先ほどよりも明るい、嬉々とした光をその瞳に輝かせた。

「本当ですか！」

「ああ。勇者、ね。確かに、魔王を倒す者、なんて長つたるい名前を今まで名乗つてきたが、これからは、勇者と名乗ろう。魔王を倒す者、とかよりは名乗つぽいしな」

その言葉にサヤはさらに目を輝かせた。 そこまで喜ぶには理由があり、彼女は今まで、誰にも認められることができなかつた。故に、自らのしたことを褒められ、認められることは、彼女にとつては体験したことのないような喜びであるのだ。

そんなサヤの顔を見ていると、青年もなんだか嬉しくなつた。彼は（自称）利己主義であるが、他の人間の幸福も喜べる人間である。（不幸もある程度は喜べる人間であるが、その場合、喜びよりも悲しみの方が強い）。彼は、他人の不幸と幸福であれば、幸福の方が好きである。

「じゃあ、あなたは、これから勇者ですつ。よろしくお願ひしますね、勇者様つ」

弾んだ声でサヤは言つ。

「ああ。よろしくな、サヤ」

青年は優しげな微笑みを浮かべて言つた。

かくして、青年は『勇者』となつた。

第一節 - 21 - 勇者誕生（後書き）

第一節 終了です。

第二節 -1- 鳴者と少女（前書き）

第三節 始まりです。

「むむむむむ」

サヤは眉間にしわを寄せ、うんうん唸っていた。そして、数秒経ち、

「たあーっ！」

そんな声を上げ、サヤは魔法を発動した。その魔法は勇者の使う魔法と似ており、他の事象を引き起こさない代わり、その威力だけを最大限にまで磨き上げた魔法だった。

それにより、田に見えることはなく、その魔法はただ『攻撃』という概念のみを持つて、対象に向かう。ちなみに、威力のみを追求したことによって、『不可視』という影響までもが出たのは、この魔法を考案した勇者自身も予想していなかつたことである。

「遅い。もつと早くしろ。お前は俺くらいに親和性が高いんだから、瞬間に魔力を魔法に変換できるはずだ」

青年の叱責に、サヤはうつうつと涙ぐんだ。「でも、いじしないと、精密性が……。勇者様だって、たまに失敗することくらいはあるでしょう？」

「んなわけないだろ、俺だぞ」

「じゃあっ」見せてください。そうサヤが言おうとした瞬間、サヤの『周りの空間だけ』が消滅した。サヤの髪の毛一本にすらその消滅は行くことはなく、しかし、ほとんど接触しているようなほどの大空間は全て消滅していた。

その現象にサヤは一の句を発すこともできず、それを見た勇者は冷静に言った。

「どうだ？ これで、わかったか？」

サヤは力なく頷いた。

勇者とサヤが出会いから、一年の月日が流れていった。

その間、勇者はサヤに魔法を教え、サヤはある程度ならば魔法を

使えるようになっていた。勇者はサヤに厳しいが、サヤの魔法上達速度は普通ならば考えられないほどのものであった。勇者は完全な独学で、しかも十歳のときには現在のサヤほどの力量にまで至つていたが、それでも魔法の修行をした時間は少なくとも三年はあるのだ。年齢ではなく、修業時間だけで考えるならば、サヤの方が上達速度は圧倒的に早い。

しかしながら、勇者はサヤを褒めることなど滅多になかった。ごく稀に褒めることもあるが、勇者はできるだけそれをしないよう努めていた。サヤの性格を考えるに、あまり褒めるのは得策ではないと思ったのだ。褒めたら褒めたで極上の喜びを見せてくれるだろうが、それでは駄目なのだ。

サヤは勇者と会つまで、誰にも評価されたことがなかつた。それ故に、誰かに評価されることはあるが、勇者はできるだけそれをしないよう努めていた。だが、勇者はサヤを評価した。それによつて、サヤの『評価されたい』という欲求は極限にまで高められたのだ。空腹になつた時、少量だけ食べた場合、逆に、更に食欲が湧いてくるのと同じ理屈である。

だから、青年は『よく稀に』サヤを褒めるのだ。全く褒めなれば、また、あきらめてしまふかもしれない。そうなつてはいけない。そうなつては、評価されたいと願わなくなつては、修業に対する感情が変わってしまうかもしれないからだ。

サヤは評価される為に修行をしていた。つまり、どれだけ努力しても評価されないと思つてしまつては、努力しなくなる可能性が無くなるのだ。

そうなると、困る。勇者は一刻も早くサヤに魔法を習得してほしかつたのだ。その理由は言つまでもないだらう。魔王を、倒すために。

「勇者様つて、本当にすごいですよね。でも修行してるとこは見たことないです。いつ、どこで修行してるんですか？」

魔法車に乗り込み、サヤが勇者に訊ねた。勇者はきょとんとしてサヤを見た。

「何を言つてゐるんだ？ 今もしてゐるだらうが」

「は？」 サヤは意味のわからないとでも言つよつて声を上げた。 「

どつこつことですか？」

「お前、魔法についてまだ良くわかつてねえな

青年は呆れたように溜息を吐いた。それにサヤは結構なショックを受け、サヤがショックを受けたことに勇者は気付いたが、そんなことは無視して言つ。

「人間は魔力が自然回復しない。つまり、無駄な魔力を使うのは極力控えなきやいけない。なら、魔力を使わない修行方法はないのか。その答えはもちろん、ないわけがない、だ。頭の中でシミュレーションをすると、魔法の新たな構築を思考するとか、色々と選択肢がある。俺が今してはいたのは魔法式の新構造の思考だ。もつと効率の良いものはないか、もつと強力な魔法を発現できないか。そんなことを思考している。最近は、人間の特異性を利用することを中心と考えているな」

一年前までならば全く意味のわからない言葉だったが、今のサヤならば勇者の言葉の三割くらいは理解することができた。あとはわけがわからない。

「と、ということは、勇者様は、いつもずっと、修業をしていたってことですか？」

誤魔化すようにサヤは訊ねる。無論、勇者はサヤが自分の言つたことを理解していなきことに気付いていたが、まだこんなことは理解しなくともいいだろ？ と考え、特に何も言わなかつた。その代わり、勇者はサヤの質問に答える。

「まあ、そういうことになるな。ある意味、俺は常に修行しているとも言える」

「疲れないんですか？」

「魔王を倒そうとしているんだぞ？ 時間なんて、いくらあつても足りないさ。寝る時間だつて惜しいから、俺はほとんど寝ていらないだろ？」

確かに、勇者が寝ているところをサヤは見たことがない。以前、心配して『いつ寝ているんですか?』と訊ねたことがあつたが、勇者は『寝ていない』と答えた。曰く、『魔力を利用してるんだよ。睡眠なんてのは結局、身体の休息だ。ならば、身体は休息させ、魔力だけで肉体を動かせばいい。魔族は魔力だけで行動しているようなものだ。あれがどうやつているのかを理解すれば、ほとんど魔力を消費せずに行動することができる。これには魔力の循環利用とかそんな理論が関係してくるんだが、今のお前には理解できないどうから別にいいだろ』『』ということだ。サヤは、つまり寝なくても大丈夫つてことですね、と多少強引ながらも納得した。

「お。次の街が見えてきたな」

勇者は魔法車の外を見て、言った。それにサヤは勢いよく魔法車の外に身を乗り出し、その街を見た。

「わっ」サヤは思わずそんな声を出していた。「すごい街ですね」「当然だ。あの街は、この世界でも最高の魔法研究機関のある街、魔法都市だ。あの街の人間は、魔法学を習う人間と教える人間、そして、研究する人間しかいない。故に、魔法を会得していない者は見ることすらできない。魔法を研究するために、他の人間を完全に排除しようつて魂胆なわけだ。排他的にもほどがあるが、結果、魔法技術だけならば、世界最高峰であることは間違いないだろう。ついでに、確かにここには、『現代魔法の親』がいるはずだ。今は、魔法研究院院長だつたけか」

「へえ。そんなすごい人がいるんですか」

「俺の方がすごいけどな。とりあえず、入るか」

「でも、排他的なんでしょう? どうやつて?」

「当然、強行突破だ」

勇者は魔法車のスピードを上げた。

第二節 -2- 勇者尋問（前書き）

勇者、尋問される。

「貴様ら、何が目的だ？」

目の前の男が高圧的に訊ねた。

「とりあえず、この都市の長に会わせる。話はそれからだ」  
勇者は全く物怖じせずに答えた。

「そんなことが許可されると？『冗談を言うなら、丁度いい、僕の研究課題は、『人間に對して有効な魔法』だ。どうやら、貴様は結構な使い手のようだし、良い研究結果が得られそうだ』

男は、勇者の手首に魔法封じの魔法が付加された枷をしたから、勇者には何もできないと思つていいのだろう。自分が圧倒的に優位な立場であると確信したように、脅迫するように言つた。

しかし無論ながら、そんなことはないのだ。

『……あの、勇者様』

サヤからの通信魔法。魔法封じの枷がされているのはサヤも同じなのだが、彼女は通信魔法を使った。

『これつて、全然、魔法を封じられないですよね？』

『いいや。まあまあ封じられているよ。ただ、俺が教えた魔法は少々特殊だから、対応していいんだよ』

『対応していいって……。そんなのでいいんですか？』

『駄目だ。決まっているだろう。だが、サイズ的に見て、これは人間用の枷だからな。ここを見ることができて、さらには魔法障壁を乗り越え、拒絶の魔法が付加された門を突き破るほどの魔法を扱うということは、それだけ危険性が高いということ。だから、条件付けをすることによって、魔法封じの効力を高めたんだろう』

『でも、通信魔法に対応していいって、かなり駄目じゃないですか？』

『だから言つているだろ？俺の魔法は特殊だ。それは、通信魔法も同じことなんだよ。教える必要がなかつたから教えていなかつた

が、俺は他人間に盗聴される危険性を考慮し、新たな通信魔法を生み出した。一応、普通の通信魔法よりは高性能になつていて

『へえ。そうなんですか』

『だから、決してお前が魔法封じを無視できるほど の実力になつて いるわけではないぞ』

『……わ、わかつてましたよ』

『それならいいが』

サヤは通信ではそう言つていたが、見ると、その表情を暗くして、落胆しているように見えた。

「……貴様ら、状況が把握できていないようだな」

何も言わない勇者たちが頭にきたのか、男は苛立ちに顔を歪め、勇者の頭に手を当て、言つた。

「私は、今すぐにでも、貴様の頭を破裂させることができのだぞ？ それが、わかつて いるのか？」

高圧的に、威圧的に、絶対的優位の立場に立つて いる者でしか言えないようなことを、男は言つた。

しかし、無論、勇者はそのようなことで怯えはしない。それどころか逆に、勇者は高圧的に威圧的に、絶対的優位の立場に立つて いることを確信して いるように言つた。

「お前こそ、全くわかつてい ないな。早く、この都市の長に会わせ る。そもそも」

「そもそも？ 今の貴様に何ができると 言つのだ。その、魔法を 封じられている貴様に」「た」

「そもそもば、じつする」

勇者は、これ以上交渉を続ける意味はないと判断し、魔法を行使し、枷を破壊した。

力任せに壊したわけではない。当然、力任せに破壊することは可能だが、それは魔力を無駄にする。勇者は超微量の魔力を枷に流し、その反応から魔法の構造を理解し、その構造から、どのようにして魔法が構成されたのかを逆算し、その結果から、『その魔法を逆に

行使した』。

逆に行使された魔法は、そのまま逆に発動される。勇者はしばしば、魔力を糸、魔法を糸で編んだものに喻えるが、今勇者がしたことは、糸で編んだものをほぐして、元の糸の状態に戻す、といえばわかりやすいだろうか。

とにかく、枷は破壊された　いや、破壊されたと言つよりも、元の状態に戻ったと言つた方が正確かもしない。それほど自然に、魔法で作られたその枷は、跡形もなく消滅した。

「こうする？　何を、どうすると言つのだ？」

男はまだ氣付いていないようだ、勇者を蔑むように笑つた。それに、勇者も笑い返した。

「……何故、笑つている？」

男はその表情を変え、眉間にしわを寄せ、言つた。

「いやなに、お前が、馬鹿すぎてな」

「……ふざけるのも、大概にしろ」

「お前がな」

勇者は目にもとまらぬ速さで腕を動かし、右腕で自分の頭を掴んでいる男の腕を押し出すように払い、左腕で男の頭を掴み返した。男はそれに全く反応できず、「ほら、な？」と勇者が声をかけてはじめて、自分が頭を掴まれていること、勇者の手から枷が無くなっていること、立場が完全に逆転したことに気付いた。

「うつ、あ、うああ！」

男は驚き、うろたえ、ほとんど反射的に魔法を使した。男の腕に紫電が走り、次の瞬間、それは雷光となつて勇者に向かつた。

魔法は勇者に直撃し、『破壊』の魔法が付加されていたその雷光は、猛るようすに輝き、その部屋を光で包んだ。

「……はつ、ははつ」

男はやつとのことで声を出し、笑つた。

「そうだ、そうだ。魔法を使えば、こんなやつ、簡単に殺せるんだ。枷なんて、必要なかつた。私は、この都市の人間なのだから」

そうやって、自分に言い聞かせ、男は、大きく笑い始めた。

それがつるさかつたのか、勇者は男の喉をしめ上げ、声を出せないようになつた。男は「ぐええ」という、情けない声にもならないような声を出した。

男は何が起こったのかわからないとでも言つように、勇者の方を見た。勇者は呆れたようにして言つ。

「こんな魔法、征服するまでもない。ほんの少し、構造を刺激したら、それだけで消える魔法だ。結合力が弱すぎる。それに、無駄が多いすぎる」

男は一瞬、勇者の言つてることの意味を理解することができなかつたが、そこは魔法都市の人間ということで、一応は理解に至つた。

簡単に言えば、勇者は、全く何の魔法も使わずに、男の魔法を消したのだ。

先ほど、勇者は枷を『魔法を逆に行使する』ことで魔法として構成される前の状態にまで戻した。つまり消滅させた。が、今度は魔法すら行使していなかつた。微量の魔力を放出しただけで、魔法を消した。

魔法を構成しているのは、無論、魔力だ。ならば、構成している魔力構造を変えれば、魔法も変わることは当然の帰結と言えよう。勇者は微量の魔力を放出することによって、男の発動させた魔法の魔力構造を刺激し、その魔法を瓦解させたのだ。

どこの国では、家を建築する際、レンガを使うが、そのレンガのある一部分を、まだ固まつていない時に抜き取つた時、その家は崩れ落ちる。それを同じようにして、勇者は自らの魔力で男の魔法を構成している魔力の一部分を刺激し、押し出し、魔法を瓦解させ、消滅させたのだ。

勇者はいとも簡単にやつてみせたが、こんなことは普通の人間にできる芸当ではない。魔法についての深い理解と、途方もないセンスが必要だ。

それをわかつていた男は、自分が今相対している相手が、どれほど実力を持つのかも、同じようにわかつてしまつた。男は先ほどまでの、優越感に浸つているよつた顔から一変し、絶望の淵に立たされている者の顔になつた。

しかし、男は命乞いをすることはなかつた。それどころか、通信魔法を発動した。

勇者は通信魔法の発動を難なく見破り、それを盗聴した。内容は救援要請。魔族よりも危険性が高い者がここにいる、という連絡。自分が殺されることを達觀し、もう諦め、だがこの街は救つてみせる。そんな思いがひしひしと伝わってくるよつた内容だつた。

勇者は男の精神に感心しながら、このままじやあ面倒なことになると思つた。

故に、勇者は強引に通信魔法に入りこんだ。

『ちょっと待て。俺は、この都市をどうにかしようなんて、思つていない』

それに、男はひどく驚いた。通信魔法の割り込みなど、彼は今までに見たことがなかつたのだ。

『……誰だ？ いや、訊ねる必要はないか。報告の、侵入者だな？』

通信魔法の相手の言葉。勇者はそれに、嬉しそうに笑つた。

『察しが早くて助かる。とりあえず、俺の目的は、この都市の長に会うことだ』

『それは……』と相手は言い淀む。すると、男が言つた。『こいつは危険だ！ 絶対に、許すな！』

それに勇者は男の方を見る。睨んだわけではないのだが、男は大きく震えた。しかし、その目だけは威勢がよかつた。勇者は男に対して好感を覚えた。こんな状況になつて、反感を覚えるのは良い傾向だ。この街は、予想通り、教育を受けている人間が多いようだ。そんなことを思った。

しかし、この都市の長に会えなくなるのは困るし、強行突破するのも、魔力を無駄に使いたくないので、できれば回避したい。

故に、勇者は言った。

『もう面倒だ。お前もわかつてゐるんだが、この都市の長ならば、それくらいわかつて、当然なのだから』

その言葉に、男と通信先の相手は、何を言つてゐるんだ、氣でも狂つたか、といつような言葉を言つた。しかし、それは、彼らに向けての言葉ではなかつた。

『そうだな。ワシくらいになれば、この程度は造作もない』突然、声が聞こえた。男でも、通信先の相手でも、勇者のものでもない、老人の、声。

それに男と通信先の相手はひどく驚いた様子を見せた（通信先の相手に關しては見えなかつたが、おそらくは驚きと未熟といつ要因により、驚きに息を呑むことを通信した）が、勇者は全く動じず、笑みさえ見せた。

『ようやく、か。お前がどんな人間なのかは知らないが、通信する限り、俺の存在くらいは、この都市に突入した時からわかつていただろう。趣味が悪いな、お前』

『そう言つな。ワシも忙しかつたのだ』

『よく言つ。しかし、俺以外にも、通信魔法を盜聴できるほどの、割りこめるほどの使い手がいるとはな。若干ながら、驚いた』

『それは慢心だな。この都市は魔法都市だ。その程度、百人以上はできる』

その言葉に、勇者は感嘆の息を漏らした。

『ほう。それは予想以上だ。期待はしていたが、まさかそれほどとはな』

『確かに用件は、ワシと会いたいのだつたか？』

『ああ。会わせろ。通信魔法くらいの繫がりじやあ、お前の力量くらいしか解らん。お前の知識全てを覗いてやるから、早く会わせろ』

『よし、許そう』

その即答に、男と通信先の相手はまたもや驚いた様子を見せた。

『そなたも、聞いたな？ では、その男を解放し、ワシのところ

まで連れてこい』

老人の言葉に、男ははつとして言った。『本気ですか！』  
『ああ、本気だとも』老人は言った。男はそれに納得できない様子  
だつたが、『わかりました』と答えた。

そして、男は「ついてこい」と言って、勇者を睨んだ。

次に、勇者はサヤの枷に一瞬だけ手を触れさせ、枷を消滅させる  
と、「ああ、つれていけ」と言った。

最後に、サヤはわけがわからず、首を傾げていた。  
何があつたの？

第三節 -3- 老人との会話（前書き）

老人との会話。

## 第二節 -3- 老人との会話

その部屋は本で埋まっていた。

だから、サヤはこの部屋に入った時、驚いた。見ると、勇者でさえ、驚いている様子だった。その勇者の視線の先には、本を読んでいる老人の姿があった。

「お前が、ここの中か」

勇者が訊ねると、老人は「いかにも」と答えた。

老人は長く伸ばされた白髪にこれもまた長く伸ばされた白髪。身體は大きく、服に隠されて見えないが、勇者はその下に筋骨隆々とした肉体があることを見抜いていた。目は碧く、きらきらとした生命感と人間らしさを光として放出しているような錯覚を覚えた。

「とりあえず、聞いておこう。そなたは、何者だ？」

それに勇者は「魔王を……」と言いかけ、「いや、違うな」と言いながら、言い間違えかけた勇者を責めるように睨むサヤに向かって微笑み、言った。

「俺は、勇者だ」

それに老人は「勇者?」と怪訝な表情を見せた。

「そう、勇者。自分で言うのも何だが、勇気ある者だ。」こう言ったから理解出来るか? 俺は、魔王を倒すことを一応の目的として考えている

勇者が言うと、老人は一度、「は?」ととぼけた顔をして、一変、

「ふはははははは!」と笑い始めた。

「魔王を、倒す。ふはははは! それは確かに、勇者だ! ふはははははは!」

その老人の様子に、サヤはむつと口先を尖らせた。この人、勇者様のことを、バカにしている。そう思ったのだ。「あの」とサヤは文句を言おうとしたが、勇者はサヤの目の前に手を出し、それを制した。

「俺は自分のことを言つたぞ。次は、お前だ」

勇者が言うと、「ああ、そうだな。次は、ワシだな」と老人は目もとに溜まつた涙を拭つた。無論ながら、この涙は悲しみからきたものではない。

「ワシは、この都市の長。ヘクセル・アルトだ。おそらくは、この世界で最も魔法に詳しい人間だろう」

老人 ヘクセルの言葉に、サヤはまたもやむつとした。そんなこと言つても、勇者様の方がすごいんだから。こんな人は今までにもいっぱいいたけど、皆、勇者様の方がすごかつた。そんなことを思いながら、サヤは同時に、老人が今までの人間のようになる様を想像して、嬉しそうに笑つた。勇者様の本当の力を知つた時。今までの人間は、皆、ひどく驚いた。その時の爽快感は、これ以上ないほどのものなのだ。

その笑みに気付いたヘクセルは、「どうした？」と訊ねたが、サヤは得意げにふふんと笑い、「すぐにわかります」と答えた。それに、勇者は密かに溜息を吐いたことが、サヤはそのことに気付いていない。

「まあよい。しかし、勇者よ。そなたは、確かに、このワシよりも強い。ワシほどの知識は持つていないが、今見るだけでも、ワシすら知らん魔法を幾つも使つている。特に、その目は、ワシのものよりも高性能のようだな。ワシが研究者だとすれば、そなたは、開発者とでも言おうか」

その言葉に、サヤは「え？」と息を漏らした。その言葉はまるで、勇者の実力をわかつた上で言つているようではないか。それに、こんな言葉を言う人間は、今までにいなかつた。この人は、今までとは、違うの？

そんな期待を持ったサヤだったが、ヘクセルの次の言葉は、その考え方を変えた。

「だが、そなたでは、魔王を倒せぬな。その歳でそれだけの知識、それだけの技術。全てにおいて、驚きに値する。ワシも天才と言わ

れてきたが、そなたは、ワシなど遙かに超える才能を持つてある。間違いない、人類最強の人間であろう。だが、だがしかし、それでも、魔王には敵わない。人類は魔族から魔力を奪うという特性を持つが、それでも、魔王には、敵わない。そなたは人類最高の親和性すらも持ち合わせているだろうが、その程度では、まだまだ。ワシは一度だけ、魔王と会ったことがある。あの時は、命からがら逃げのびたが、今思えば、あれはただ逃がしただけなのだろう。もう覗いただろうが、魔王は、それほどの強さだ。そなたでは、敵わない

その言葉に、サヤは、やっぱりいつもの人たちと一緒にだ、と思った。しかし、勇者は笑っていた。それはいつも、侮蔑が混じった笑いではなかつた。

「確かに、その通りだ」

勇者は、そんなことを言つた。サヤは驚いたが、それに構わず、勇者は続ける。

「確かに、俺一人では、魔王には敵わない。だが、一人じゃなかつたら、どうだ？」

その言葉に、ヘクセルは怪訝な表情で「どういうことだ？」と訊ねた。すると、勇者は突然、サヤの肩に手を乗せた。サヤは「ひやつ」と声を漏らした。

「俺が、わざわざこいつを連れている理由。まあ、今までお前にすらわからなかつたことは、流石俺と自分を褒めたいところだが、それでも、教えてやればわかるだろう。どうだ？ わかつただろう。これが、俺の、秘密兵器だ」

勇者はにやりと笑みを見せた。ヘクセルはサヤの方をじっと見て、すると、はつとして、勇者の方を見た。「そういうことか。だが、これを教えて、よかつたのか？」

「問題ない。概念魔法の特性はわかつてているだろう？ 俺は、この情報自体に、概念魔法である、妨害魔法を使したんだ。この情報自体が、既に、俺の魔法によつて全てから隔絶される。その証拠に、

お前はもう、理解できなのはずだ」

「言われてみればそうだな。しかし、一瞬でも理解し、納得したのなら、そうなのだろう。……それにしても、なんだ、この妨害魔法は。どれほど重ねれば気が済むのだ。こんな魔法、普通に解除しようととしては、数か月以上かかるぞ」

「当然だ。この魔法だけで、俺はどれだけ時間をかけたと思つている。最初の妨害魔法だけでも、並みの魔法の使い手ならば解除することはできないだろう。だが、予想するに、お前はもう既に百層くらいは解除しているんじゃないか？まあ、それ以上は、けっこう面倒になつてきているだろうが」

勇者が言つと、ヘクセルは若干驚いた様子で、「これ以上、あるのか？」

「舐めるな。お前程度が数か月で解除できるような魔法じゃない。数か月以上はかかるが、数か月程度では解除できるはずもない。お前は死ぬまで、この魔法を解除することはできないさ」

「ふむ。本当に、そのようだな。しかし、ワシは一度、それを理解したのだろう？なら、もう一度理解することも可能なはずだ」

「そう言つてゐる時点で、不可能なんだよ。理解できるきっかけを与えない限り、お前は絶対に見つけられない。そちらにも、俺は何重もの魔法を行使したからな」

それにヘクセルは目を細め勇者を見たが、何もわからぬことがわかると、「そうか。まあよい。魔王を倒すことができるといふことさえわかれれば、それをワシが知る必要はないだろう。それに、ワシが知ると、逆に危険だろうしな」

「そうだな。じゃあ、今日のことは礼を言つぞ」

「ワシからも礼を言つ。あなたの頭の中は覗きにくくて仕方がなかつたが、かなりの情報を得ることができた」

「お前の頭の中も、けつこうな覗きにくさだったがな」

「では、また会おうか」

「ああ、またいすれ」

言い合つて、勇者はヘクセルに背を向けた。ヘクセルもまた同じように、自分が持つ書物に目を落とした。

サヤは途中から彼らが何を言つているのかわからなくなつていたが、勇者がすごいということをヘクセルがわかつてくれたようだつたので、とりあえず気分が良くなつた。

第二節 - 4 - 出発（繪書モ）

廻者と少女の出発。

「さつさとじっかに行つちまえ」と大勢の人々に見送られ、勇者たちは気分良く魔法都市から発つた。

魔法都市の障壁を破り、門を破り、撃退魔法で攻撃され、勇者のかけておいた魔法障壁もそれ自身もボロボロに壊れた魔法車だったが、勇者が一度手を触ると、魔法車は即座に元通りになつた。それを不思議に思ったサヤと驚いた魔法都市の人々だったが、勇者が「これはただの材料だ。術式さえ再構成してやれば、魔法車自身も再構成するに決まつてんだる」と言つたので、サヤは納得したふりをした。魔法都市の人々は感心したように頷いていた。

魔法車は馬車から馬を取り除いたような外見をしているが、その実、馬車としても扱うことができる。基本的に魔力で動く魔法車だが、もしもの時のことを考えて、馬車としても扱えるようにしたのだ。「そもそも馬車を改造しただけだしな」とは勇者の談。

「……あの人、よくわからない人でした」

魔法車の中、サヤはそんなことを言つた。  
「勇者様のことをバカにしているような気もして、だけど、勇者様の実力を認めているような気もして……。でも、魔王を倒せないっていうのは、むかつきました」

サヤはほんの少し、頬を膨らませ、口先を尖らせて言つた。それに勇者は思わず笑い、サヤに「どうして笑つてるんですか」と言われたので、答えた。

「あいつは正しいんだよ。俺だけじゃあ、魔王を倒せないのは確かなんだ」

その言葉にサヤは心底驚いたが、勇者の次の言葉ほどではなかつた。

「サヤ。魔王を倒すのは、お前だ」

「え?」とサヤは聞き間違えたとしか思えないその言葉に、完全に

思考が停止された。あまりの衝撃に、驚くことさえできなかつた。

「な、何を、言つてるんですか。私なんかに、魔王を倒せるわけが」

「……ま、今はそう思つていてもいいか」

勇者はそれだけを言い、それ以上を言わなかつた。サヤも納得していなかつたが、こうなつた勇者に何を言つても無駄と言つことは知つていたので、それ以上追及しなかつた。

「それにしても、今回は、かなりの成果だ」

勇者は嬉しそうに言つた。しかし、サヤはその言葉の意味がわからなかつた。勇者はこの都市で、ただ会話していただけではなかつたか。

「お前にはわからないだろうな。じゃあ、教えてやろう。見せてやろ。これが、俺がこの都市で得た、最大の収穫だ」

そして、サヤの脳に、突然、洪水のように情報が流れ込み——

つの映像が、思考を覆つた。

第三節 - 5 - 老人の記憶（前書き）

一人の老人の、記憶。

## 第三節 -5- 老人の記憶

そこには、瓦礫があり、血があり、人間の死骸があり 魔族がいた。

視界は揺れ、自らの身体を見る。血に濡れている。右腕を見て、左腕を見ようとして、あることに気付く。左腕がない。

「ああああああああああああああああああああああああ！」

視界の主が叫んだ。痛みや苦しみに、ではなかつた。そんなものはとつぐに枯れていた。左腕がないその事実に、驚き、恐れ、悲しみ、思わず、叫んだ。

「ほう。まだ、息があるか」

感心したような声が聞こえた。可愛らしく、しかし凛とした、存在感のある声だった。その声の方を見ると、そこには、全裸の少女がいた。

華奢な体躯。月を思わせる髪。白砂のよろに白き肌。幼げな、しかし凛とした顔立ち。宝石のように紅き眼。

美しく、可憐で、しかし、少なくとも、人間ではなかつた。

人間ではないように覚えるほどの美貌を持ち合わせて、その実、彼女は、人間ではなかつた。

「××！」

視界の主は、そんな言葉を叫んだ。何と叫んだ？ 何を、叫んだ？

「なんだ、人間？ 今更、自らの愚かしさを、後悔したのか？」

少女は楽しそうに笑っていた。視界の主を見下し、人間を見下しだが、彼女は、見下すだけの力があつた。人間のことを虫けらか何かだと思つてもおかしくないほどの、力が。

恐怖を覚えた。それがただ垂れ流している魔力の量だけで、今までに見たどの魔族を遥かに超えたものだつた。もし彼女が本気で人間を殺そうとしたのならば、それは一瞬で果たされることだろう。そう確信するだけの、力があつた。

「××！ お前だけは、殺してやる！」

視界の主が言った。それは憎悪がこもった声だったが、彼女の力量を、きちんと把握しているわけではないようだった。魔法の技術がまだまだの時代だ。仕方ないことだろう。

「我を見て、そんなことを言えるとは。勇者か、ただの愚者かそうだな、なら、試してやろう。もしもこれを見て、未だ我に刃向かおうとするならば、勇者だ。我が全身全靈をもって、跡形もなく、殺してやろう。しかし、ただの愚者ならば、殺す価値もない。わざわざ人間を殺す必要もない。さあ、勇者か、愚者か。どちらだろうな？」

「お前が何をしようとも」

視界の主が言いかけた、その時、

彼女の身体から、はつきりと視認できるほどの魔力が放出された。それはただ単に、垂れ流しているだけだった。となると、先ほどまでの魔力は、抑えつけていて、あれほどだったということになる。そして、そう思えるだけの魔力だった。

膨大な魔力。莫大な魔力。色など無い。実体など無い。だが、確かに視認できた。

その魔力は堰を切ったように 実際、それと同じようなことをしたのだろうが 大気に流れ、地に流れ、空間に流れた。 その魔力は一瞬で空を覆い、地を覆い、空間に満ちた。

「あ、ああ……」

視界の主はそんな声を出した。そして、わかつた。これは、無理だ。人間には、勝てない。ああ、何故、こんなことをしてしまったんだろうか。魔法なんて、望まなければよかつた。そう思つた。思つてしまつた。

呆然とする視界の主を見て、彼女は呆れたように息を吐いた。  
「やはり、そうか。もうよい。命は見逃してやる。だから、伝えよ。魔族には、もう、手を出すなと」

「××……」

「もつ、喋るな。虫睡が走る。」シャム

此處に

彼女が呼ぶと、いつの間にか、その隣に、最初からそこにいたかのように、魔族がいた。

その頭は牛と馬や羊が合わさつたかのようなもの。胴から下は人間のような形。だがその色は人間にはありえない黒い紫色で、その背は蠢く腕で覆われている。脚は一本だが、その人間ならば膝に当たる部分に風穴が開いており、そこにぴゅうぴゅうと風が吹き込んでいる。体長は先ほどの魔物よりもさらに巨大。12メートルはある。

「帰るぞ。もう用はない」

完全に興味を失ったように、魔王は視界の主を見ようとしなかつた。

「ですが、よろしいのですか？」

「ヨ」

「左様ですか。わかりました。では、帰りましょう」  
そうシャムと呼ばれた魔族が言った瞬間、少女とシャムの姿が一瞬で消えた。

一人残された 仲間は全て殺され、一人になつた視界の主は、  
ただ、そんな言葉を、呆然と呴いた。  
何を？ 何と呴いた？

「」

王? 王とは、なんだ?

歷二  
雜記  
河谷

「魔王がお出でなさる事は、おおきな災厄をもたらす事でござる。」

視界の主は、慟哭した。自分が何もできなかつた悲しみと、絶望に。

あの少女に勝てないことはわかつていた。何もできなかつたし、今でも、恐れている。

だが 何か、しなくてはならない。

自分は今日、死んだ。

故に、あの少女を 魔王を、恐れる必要は、ない。

魔王に絶対に、ばれることがないように、魔法を、研究し

「いつの日か、一矢、報いてやる」

視界の主は、言った。

第三節 - 6 - 勇者は勇者（前書き）

勇者は勇者。

思考が戻り、勇者の顔が見える。

サヤは、ぜえぜえと、何度も息を繰り返していた。汗をだらだらと流していた。だが、その目だけは、はつきりと、信じられないものを見た人間のように、見開いていた。

「どういう、ことですか？」

サヤは思わず、そんなことを訊ねていた。答えはわかつていていた。しかし、信じられなかつた。

「わかつているのだろう？」それが、答えた

勇者にはつきりと言われて、そして、サヤは、言葉を紡ぎ、吐きだした。

「あれが あれが、魔王？」

その言葉は、人間のよつた姿をした少女が魔王と言つ事實に驚いているわけではなかつた。ただ、その力に、恐れ、慄いたのだ。

「あ、あんな、あんなの、勝てるわけ」

サヤはすっかり怯えてしまつて、そんなことを口走つてしまつ。だが、

「勝つ」

勇者は、ただその一言で、サヤの怯えを否定した。

「確かに、姿形は予想外だつた。俺も男だから、あんな姿を見せられると、多少は欲情してしまつ。あれほどの美貌には、世界全土を旅する俺ですら、今まで会つたことがない。人間ではないよつた美しさ、つてのは、ああいうことなんだろうな」

そして、勇者は、サヤが怯えた魔力とは全く別の、『魔王が人間の少女の姿であつた』ということに関心を寄せているようだつた。確かに、魔王が人間の姿をしているなどと、誰も予想しなかつたであらう。今まで出会つてきた魔族に、人間の姿をした者はいなかつたのだ。その全てが、人間の持つ言語では形容し難い、様々な動物

の、様々な部分を組み合わせたような、異形。そんな魔族以外は見つことがなかつた。

だが、それでも、そんなことは瑣末だと思えるほどに、魔王の魔力は絶大だつた。

サヤは今まで、勇者が魔王を倒すことに何の疑問も持つていなかつた。当然ながら、最初は現実味がない話をしているようにしか思えなかつたが、勇者の実力を知つてからは、魔王を倒すことのできる人間は勇者しかないと確信していた。

しかし、今、サヤは、その確信が正しくも、間違つてることに気が付いた。

ああ、確かに、魔王を倒すことのできる人間がいれば、それは勇者以外には存在しないだろう。勇者は確実に人類最強だ。魔法の腕は無論のこと、それ以外に関しても、突出した才能を持つ。

その剣技は魔法を一切使わずとも、それだけで大抵の魔族を殺すことが可能なほどの実力を持つ。その観察眼は、魔法によって得た魔力や魔法の感知、解析を活かし、その揺れ動きを『見る』だけで、先の先を予測する。その頭脳は、その仕草、口調、喋る内容、その全てから、相手の性格を知り、心を読む。その話術は、頭脳と觀察眼から得た情報を最大限に活かし、自らの思つままに、相手を動かす。

そして、彼は、そんな人類最高の才能を持ちながら、決して、努力を怠らない。それは彼の性格故のことであり、彼の性格とは、（こう喻えるのは性格であるのかと問われれば答えに窮するが）、利己的である。自らの欲望のままに、利益のために、ただ、自分の意思だけを基準とし、ただ、自分の望みを叶えるためだけに、生きている。

彼は、人類最強であり、人類最高の才能を持ち、おそらくは、その努力も、人類最高に近いだろう。

だが、それでも、それでも。

魔王には、程遠い。

勇者であつても、絶対に、勝てはしない。

魔王は、それほどまでに、強かつた。食物連鎖。魔族は人間と違ひ、何も摂取せずに生きているが、もしも、彼らが食事をするのならば、魔王は、その頂点に君臨する者だつた。

それが、魔族の王。

魔王。

サヤは、今まで見てきた、戦つてきた魔族から、どうやって魔王は魔族を統べることができたのか、と疑問に思つことがあつた。しかし、そんなことは、考えるまでもなかつた。

魔王は、魔族全てを統べるだけの、力があつたのだ。

魔王ただ一人の戦力はその他全ての魔族を合わせた戦力を超える、なんていう噂が存在する理由がわかり、そして、本当にそつなのかもしれない、とさえ思つた。

それほどまで、魔王は、強い。

それなのに。

「だが、勝つ。勝つて、殺す。あれほどの美貌、殺すのは惜しいが、魔族なんて種族は、俺の理想郷には要らん。故に、殺す」

勇者は、当然のように、今までと同じように、言つ。

魔王を倒す。そんな、絵空事を、言つ。

勇者も、見たはずなのに

あの光景を、見たはずなのに

魔王を、その魔力を、見たはずなのに

それでも、勇者は、何も、変わらなかつた。

サヤは、思う。この人は、どれだけ、勇敢なんだ。どれだけ、勇

氣があるんだ。あんなものを見てもなお、そんなことを言えるなん

て

「やつぱり、勇者様は、『勇者』なんですね」

そう言つて、サヤは、笑つた。勇者はその言葉に、若干ながら驚いたが、「さすがは、俺の見込んだ人間だ」と言つて、同じように、笑つた。

勇者侵攻。

## 第二節 -7- 勇者侵攻

数時間経つと、彼らの町、一つの塔のよつたものが映った。

大きく、そびえ立つその塔は、少なくとも、人間の建造物ではなかつた。円が連なつたような形。継ぎ町などは見えず、素材も何かはわからない。少なくとも、木や石ではない。

「今日は、あれだ。あそこを、潰す」と勇者は言った。

「私、今日も、魔法を使っちゃいけないんですか？」

サヤが首を傾げて訊ねる。

「当然だ。お前は、魔族の前で、魔法を使うな」

「そろそろ、私も、魔族と戦えると思つんです」

「却下だ。戦えたとしても、まだ、戦つてはいけない。本当に、死ぬと思ったとき。それほどまでに危険が迫つた時になれば、使ってもいいが、それ以外では、まだ、戦うな」

「……わかりました」

サヤは納得していくとも、勇者の言葉に、そう答えた。自分には納得することはできないが、勇者の言葉には、全て意味があるのだ。無意味なことは、言わない。そして、言わないことにも意味があるのだ。

だから、これ以上は、訊かない。

「じゃあ、行くか」

勇者が言った。それに、サヤは口を一文字に引き締めて、「はい」と言った。

・ · ·

塔の周辺には様々な魔族が（警備だらうか？）徘徊しており、彼

らは勇者たちの乗る魔法車を見付けると、一斉に魔法車に向かってきた。

その姿は人間にどこか似ていた。魔族の形状は個体様々であるが、同じ場所にいる魔族には一種の傾向が見られることがある。この魔族たちの傾向は、おそらく、人間なのだろう。サヤは（実は勇者もだが）魔王以外に、人間の姿をした魔族を見たことがなかつた。と言つても、この魔族たちは、魔王ほどは人間に似ていなかつた。

その魔族の身体は、人間のような身体 一つの頭、首、二本の腕、胸、腹、腰、二本の脚 をベースに、様々なパートを附加したような身体だつた。

ある魔族は翼を。その背から一対の黒き翼を。

ある魔族は角を。その頭から、腕から、背から、膝から、角を。様々な人間との相違点を持つ、魔族。

それらが、一斉に、魔法車に向かつて、魔法を放つ。

様々な魔法が、一斉に、魔法車の障壁に当たり、障壁が砕け、魔法車に、当たる。

一瞬で、魔法車は完全に破壊され どうに魔法車から脱出していた勇者は、左腕でサヤを抱え、塔に右腕を向けていた。

「失せろ」

魔法が発動する。

勇者の腕から、ただ純粹な、攻撃魔法。威力のみを特化したことにより、不可視となつた、『攻撃』という概念を、そのまま対象にぶつける魔法。

それは、不可視だが、見えた。

魔法の進行方向にいた魔族の肉体が、その形に消滅したのだ。その消滅している場所を繋げば それこそが、勇者の魔法の通つた場所だ。

そして、それはどんどん塔に近づき、

「……チツ。無理か」

しかし、塔は消滅しなかつた。

勇者はこれまでに、この方法 最初にこの魔法で拠点ごとそこにいる魔族を消滅するという方法 で、少なくとも十の魔族の拠点を消滅させてきた。だが、今のように、できないこともある。

この理由は単純だ。拠点の障壁が、勇者の魔法でも消滅できないほどの強度を持っていたから。または、そのような細工が施されたいたから、だ。

つまり、今回の魔族は、それくらいの実力を持つ魔族だということ。

「面倒だな」

勇者は忌々しげに言った。それに、左腕に抱えられるサヤは、「そうですね。でも、そっちの方が、やりがい、ってやつがあるんじゃないですか？」

「その通りだ。たまには戦わないと、錆びちまつ」

勇者は微笑み、答えた。

そして、魔力を放出し、塔へと急接近。塔の前に立ち、田で、そこにある魔法がどんなものかを解析 完了し、手を、障壁へと当てる。すると、障壁が勇者の田の前だけ、消える。その隙に、勇者は障壁の中に入り、次は塔自体。勇者は手で触れ、認識の誤作動を誘発させる 魔族と同等の魔力親和性を持つ勇者やサヤだからこそできる芸当 塔が勇者たちを招き入れるよつて、開き、勇者たちは、塔の中に入った。

直後、勇者は地に膝をついた。

「どう、どうしたんですか！」

サヤが驚き、戸惑いながら訊ねる。しかし、勇者はそれに答えることができなかつた。勇者は田を押さえ、歯を軋ませていた。「くそつ！ 畜生の癖に！ ここまで魔法だと…」

そう、魔法だつた。

勇者の目には、勇者自身が何重もの魔法をかけている。その魔法の中では、最も処理能力が高い魔法の効果は、『解析』。魔法を解析する、効果。見ただけで、全ての魔法の構造を『見る』ことができ、

その構造が、どのようにしてなっているかを、解析する。

それ故に、勇者は、今、苦しんでいた。

「この塔の魔法が、多すぎたのだ。

勇者の目は、見た魔法の全てを解析する。その結果生じた情報量が、多すぎたのだ。

余りの情報量に、勇者の目ではなく、頭の処理能力が限界を迎えたのだ。

「……仕方、ないか」

そう呟くと、勇者は自らの目にかけた魔法の処理能力を、落とした。結果、勇者の目からは、常時の完全な解析はなくなつたが、その代わり、少々の頭痛しかしなくなつた。頭痛を完全になくすほど処理能力を落とすより、少々の頭痛（といっても、勇者が普通に動くのを耐えられる限界に近いほどのものだが）と引き換えて、魔法の解析を求めたのだ。

「だ、大丈夫ですか？」

サヤが心配げに勇者を見つめる。それに、勇者はいつものように笑い、「ああ、もう、大丈夫だ」と言った。

それでも、と勇者は思った。それにしても、ここは、なんだ？

明かりはないはずだが、ほんのりと、明るい。壁自体が光を帯びているのだろうか。それとも、この空間自体が、魔法なのか？

その可能性は大いにあった。勇者の頭の処理能力を超えるほどの魔法。そんなものは今までに体験したことがなく、ならば、空間自体が魔法という、まさに規格外の魔法だと考えるのが（勇者にとっては）自然だったのだ。

空間が魔法とは、どういふことか。

通常、空間には空気が満たされている。それが魔法になつていてると考えれば話が早い。

空気ではなく、魔法によつて存在する空間。それが、（おそらくは）この空間なのだ。

勇者は試しに、壁に向かって『攻撃魔法』を発動した。それはいつも簡単に発動され、しかし、何も破壊することはなかつた。

だが、これは、どちらなのだろうか。この空間の影響か、それとも、この建造物か？

勇者はざつと自らのいる場所を見渡した。これは、通路だろうか。夜と夕闇の狭間にあるような色の壁、天井、床。そこにある魔法を少し解析してみるが、完全にはわからない。勇者でもわからないほどの魔法。こここの魔族はかなりの使い手のようだ。勇者は思った。

「まあ、それでも、俺のやることは変わらないがな。さて、征服を始めようか」

勇者は言った。

サヤは興味深そうにきょろきょろと辺りを見回していた。

老人のもとに、ある来訪者が。

「あやつは面白かった」

ヘクセルはくつくつと笑いながら、呟いた。

「障壁を破壊するなど、普通ならば、即刻極刑だぞ。と言つても、あやつを極刑に処することができる人間など、この世界には存在しないだろうがな」

ヘクセルは自らの手の上に魔法陣を展開させる。

魔法の陣。それは幾何学的模様や、数式、様々な言語の文章、その魔法を表現する、最適の形をとる陣だ。可視化することによつて、魔法の構成をわかりやすく、展開を容易に……と様々な利点が存在する。しかし、魔法陣を描くのにも時間が必要だ。そのため、全ての魔法に魔法陣を使うのは愚の骨頂である。無論、魔法陣を使った方がいい魔法もある。そうでなければ、現在ヘクセルが魔法陣を開ける要因がない。難解な魔法であればあるほど、魔法陣の必要性は向上する。

そして現在、ヘクセルが手の上で展開している魔法陣は、この魔法都市の障壁を表すものだ。平凡な使い手が見れば卒倒するだろうほどの密度と複雑さを持った魔法陣だつた。しかし、ヘクセルはそれほどに高度な魔法陣を見て、笑つた。勇者ならば、この魔法陣の粗さえ指摘し、愚かだと笑うのだろう。そんなことを想像して、笑つたのだ。

実際のところ、魔法都市の障壁は、完全に破壊されたわけではない。

ヘクセルは勇者が魔法都市に訪れるより以前に、その人間にしては膨大な（ヘクセルが最初、魔族かと間違えるほど）魔力を感知し、それを人間だと悟り、その素性を調べようと、頭の中を見ようとすれば、それを予測していたかのような言葉が、危害は加えない。だが、そちらがどう出るかによつて、俺も、変わるぞ その者か

ら読み取れた。

そして、ヘクセルは魔法障壁を一度、戻した。結果、勇者はいとも簡単に魔法都市に入ることができたわけだが、本来、魔法都市の障壁はあれほどやわじやない。魔族（加えて、魔法に疎い人間）には不可視であり、もし発見できたとしても、大抵の魔族では傷一つつけることができないほどの強度なのだ。

だから今、ヘクセルは勇者の訪問によつて一度戻した障壁を、張り直し、その点検をしているのだ。勇者がこの都市に入る瞬間、そして、出る瞬間以外は、障壁は完全な状態であつたはずだが、念には念を入れて、である。

「勇者も、面倒くさいことをやつてくれる。本当に、迷惑だ」  
そう、ヘクセルは、口では言いながら、笑つた。

「ええ。本当に」

その言葉が、聞こえるまでは。

ヘクセルは、表情を固め、ゆつくりと、その声の方向へ、向いた。そこには一人の少女がいた。だが、すぐに魔族だとわかつた。膨大な魔力を内包していることを、一瞬で理解したからだ。

それにヘクセルは魔王を連想したが、すぐに違う、と思った。

この姿は、本来のこやつの姿ではない。

勇者と同じように、ヘクセルもまた、目に魔法をかけていた。勇者ほどの解析能力はないが、それでも、この魔族の本来の姿が人間ではなく、自らの肉体を変化させていることはわかつた。魔族の肉体は魔力で構築されている。故に、本来の肉体から自らの思いのままに肉体を変化させることが可能なのだ。

「……何者だ？」

ヘクセルは平静を装いながら、訊ねる。それに、魔族はふふつと笑い、

「そんなに怯えなくてもいいじゃない。私、けつこう美人でしょう？」

確かに、美人ではあつた。

人間の少女のような体躯。少女のように、天真爛漫な表情。星のように煌き輝く相貌に、淡い水色の長髪。シルクのような肌。そして、悪魔が持つような尾を持つていた。

「ま、それは置いといて」

そうして、その魔族は、本当に無邪気な笑みを見せて、言った。  
「勇者って人のことを、詳しく、教えてもらいましょうか」

梦幻の無限の世界。

「……見つけた」

勇者は咳き、歯を剥き出しにして、獰猛な笑みを見せた。  
「なにを見つけたんですか?」

そこらを興味深そうに観察していたサヤが、ひょこひょこと勇者に近づき、首を傾げる。

「魔族だ。この塔を　この大規模魔法を、構築した奴。そいつを見つけた」

そして、勇者は一瞬で魔法陣を展開。そこに描きこまれた模様は目を凝らさなければそれを『模様』と判断できないほどに複雑であり緻密だった。

「なあ、魔族?　これで、お前は絶体絶命だと思うが?」

勇者は魔法陣に向かつて話しかけた。それを不思議に思ったサヤだったが、その答えはすぐにわかった。

『面白くもない冗談は、やめてほしいなー。とゆーか、通信したいんだつたら、言つてくれれば良かつたのに。この魔法内の事象の全ては私の意のままなんだから』

声が、聞こえてきた。

どこから?　魔法陣からだ。

勇者が展開した魔法陣　それは、通信魔法の陣だった。

「そうか。だが、冗談でもないぞ?　お前に『こちらから』通信魔法をしたんだ。妨害魔法の膨大さに辟易したが、魔法陣の補助あつて、捕捉した。そう、『捕捉した』んだ」

『あは。それが既に、私の魔法だという可能性は考えないのー?』

「それはありえるな。だが、それならば、力づくでするだけだ』

『……力づくって?』

魔法陣の先の声は、訝しむような声で、言った。

それに、勇者は不敵に笑い、

「本当は無駄遣いはしたくないんだが、俺の全ての魔力を使ってでも、この塔」と壊す」

『そう。とりあえず、言つておくわ。『ダウト』』

その言葉に勇者の眉はぴくりと動いた。しかし、声は無視して続ける。

『あなたも、気付いているんでしょう？　この魔法に。あ、答えなくてもいいよ。もう、わかっているから。言つたよね？　この魔法内の事象の全ては私の意のままだつて。あなたがそれに気付いていることくらい、知つているわ』

そうして、声は『第一十』は、言つた。

『ここは夢幻の無限の空間。あなたは既に夢幻に惑わされ、無限に続く獄の中。自己紹介がまだだつたわね。私は第二十、ピー・ピー・ブリー。この時を待ち望んでいたわ。亡き同胞の仇を、私は、やつと、討てる』

勇者はその顔から笑みを消し、じつと、魔法陣を見た。

『無限に夢幻を味わつて、無間へと逝きなさい、人間』

老人と来訪者の対話。

「とりあえず、どこから入った、と訊いておこづか」「あえて言うなら、空から。障壁は壊していないから心配しないで」「どうやって、入った？」

「透過して。障壁が阻むものの範囲外へと存在を変えれば、簡単だつたわ」

「……光、か」

「よくわかつたわね。そう、光よ。まあ、私、太陽つてそんなに好きじゃないんだけど」

「魔族はするいな。そのようなことができるのだから」

「あら。人間だつてするいわよ。私、あなたたちの姿つて好きよ。だから、こんな姿になつているんだもの」

「ということは、そなたは、元から人間の姿をしているわけではないのか」

「ええ。魔王とか、ピーピリーピリーの姿は人間に似ているけれど、あんなの、ごく少数よ。人間の姿のようでも、全く似ていらない。忌々しき第三みたいになる方が多いわ」

「そうなのか。ふむ、それは新たな収穫だな」

「収穫ねえ。どうでもいいけど」

「それで、目的はなんだ？」

「単純明快。この都市を、ちょっと滅ぼしちゃおうつて思ったの」

「何故、この都市なのだ？」

「この都市が、人間の都市の中で最も戦力が大きそつたから」「戦力が大きそつたから、とは。普通、逆ではないか？」

「そんなことないわ。だつて、今回の目的は、この都市を滅ぼすことだけど、眞の目的は、その先にある」「先？」

「人間最大戦力を有する都市を滅ぼすことで、私たちとあなたたち

の彼我を、教えてあげようと思つて

「……そう簡単に、滅ぶとでも？」

「思つてゐるわよ？だから、言つてゐるじゃない。そう簡単に滅ぶことを、人間なんて、魔族が本氣を出せば、そんな簡単に滅ぶんだつてことを、教えてあげるつて」

「なら、そうすればいいじゃないか。何故、今までしなかつた」「簡単よ。魔族の中には、人間のことがあまり嫌いじゃない魔族もいるの」

「……なんだと？」

「だから、人間を好きな魔族もいるつてこと。私も一応、そうなのかもしないわね」

「そうには、とても見えないが」

「それはそうよ。私は人間が好きだけど、それは玩具とか人形とか、そんな好意でしかない。私の場合は、嗜好品としてしか、あなたたちを見ていないもの。でも……少し考えれば、理由はわかると思うけど？」

「……まさか、魔王？」

「そう。魔王よ。魔王は人間の姿をしている。だから、魔王を崇拜していると言つてもいい魔族たちは、人間を殺すことに若干の抵抗を覚えている。人間の少女を攫つたり、人間に化けてまでして、それに仕えるなんていうことをしている魔族もいるわ。人間の少女を魔王や私たちのような將軍の命令なしで殺す魔族はほとんどいないわ。魔族の魔王への忠誠心は、並大抵のものじゃない。それに似ている人間の少女を、どうして殺すことができるの？」

「そう考へれば、そうだったな。魔族から人間を殺すことはまれだ。あの理由は謎だつたが、今になつて解けたよ」

「それは良かつたわね。魔族を殺して、解剖して、魔法と言つ技術の代わりに、魔族の恨みを買つた人間さん」

「そうか？魔族は、あの時点でも魔族を解剖した後も、人間を襲うことは少なかつたはずだが」

「まあね。人間の生態も、少しあはわかっていたもの。人間は魔族とは違つて、他の生物を捕食して生きる生物だ。だから、これは仕方のないことなんだつて。そう思い込んでいたわ」

「だが、しかし、そうではなかつた」

「そうだけど、でも、それも人間の特性の一つとも言えるわ。人間は、他の生物を駆逐することで生きてきた。安全を確保するためには、私たちのような存在は危険だものね。安全を脅かす存在は、他のどんな方法でもなく、駆逐することで、絶対の安全を得ようとする。それが人間。だから、あなたたちは、私たちを駆逐しようとした」

「予想以上に強く、魔王なんて化物の存在まで知つたときは、あきらめかけたがな」

「あら、そうなの？ そのまでいてくれれば良かつたのに。でも、もう遅い。少なくとも、あなたは。この街は、生贊となつてもらうわ。人間に、あきらめてもらうために」

「人間を滅ぼすとは思わないのか？」

「何度も言つてるわよね。魔族は、できるならば人間を殺したくないと思つてゐる者も、けつこういるつて。特に、魔王は、できるだけ人間を受け入れようとしている。魔族の為に滅ぼすとも思つてゐるけれど、この世界のことを考へるならば、人間という存在も受け入れなければいけないかもしれない。なんてことを思つてゐるくらいよ」

「立派だな。人間は、自分たちだけが生き残ればいいと思つてゐる。同じ人間を殺してでも、な」

「それは仕方ないことよ。ずっと、ずっと昔。魔族がまだ魔王に統治されていなかつた時は、魔族もそんな感じだつたもの。魔王がその圧倒的な力によつて、魔族全てを支配下に置くまでは、ね」

「魔王か。人間にも、そのような者がいれば……いや、その可能性のある者ならばいるか」

「勇者？」

「ああ。確實に、人類で最強の人間だ。魔王がするように、あの圧倒的な力があれば、強引に人類を統治できるかもしない」

「力だけじゃあだめよ。魔王は、それ以外も魅力的だつたから、崇拜されるほどにまで、忠誠心を持たれて、魔族を統治できているんだから」

「その点は問題ない。若干ながら性格に問題はあるが、ワシはあるの性格も好きだ。傲慢で、利己的な しかし、それ故に、誰よりも利他的な、あの性格が」

「どんな性格なの？」

「自分の為ならば、何だつてする奴だ。なんたつて、この世界を自分の理想の世界にするために、魔王を倒し、魔族を滅ぼそうとする奴だからな。確か、『自分が動かなければ何も変わらない。ならば、自分が動き、自分の理想へと変えるしかない』といった思想だつたか」

「それは傲慢ね。自分の為に、世界を変えるなんて。でも、私も好きだわ、そういうの」

「ああ。ワシも、あやつにならば、世界を統治してほしいくらいだ。あやつは他人の不幸と幸福ならば、幸福の方が好きな奴だ。他人の幸福に自らも喜べる人間だ。そんな人間が、自分の為の、自分の理想の世界を作ろうと言うのだ。それはつまり、誰もが幸福な世界だと そうは、思わないか？」

「思わないわよ。だつて、それには、私たちは入つていない。……それにしても、なんて利己主義な勇者なんでしょう。同時に、なんて利他主義な勇者なんでしょう。利己＝利他、なんて、本当に存在するのね」

「あやつからすれば、利己＝利他にならない方がおかしいらしいがな。『自らの利益を追求するならば、他の利益も考えなければいけない。そして、自分が得る利益が最高になる選択は、ほとんどが他人が得る利益が最高になる選択なんだ』、と考えていた」

「あなたは一回見たらしいけれど、私も見たくなつてきたわ。勇者

## の頭の中

「面白いぞ、それはもう、な。常人の思考回路ではないことは確かだ。高次の思考。普通の人間ならば、あれほどまでに傲慢でいて崇高な、貪欲でいて清澄な、矛盾すらも内包するほどの思考。『狂っている』と思つてしまふほどに、理解できないものに遭遇した時、人間はそう思うのだ。それほどまでに、高次の、人間を超越した思考。それが、勇者の思考だ」

「魔王もなかなかよ？ はつきり言つて、私からすれば、狂つているとしか言いようがないわ。たぶん、他の魔族も、崇拜はしていても、理解はできていないんだと思うわ。魔王の思考は、勇者の思考に似ているかもしれない。でも、きっと、魔王は、利己的じやない。魔王は自分を『王』だと思つて、自分をできるだけ殺し、魔族全体の利益だけを考えている。それどころか さつきも言つた通り 人間や、他の生物のことまでも、考えている。それが、魔王。私たち魔族皆が大好きな、優しい王さま」

「それは羨ましい。魔王は、魔族にとつてはさぞ良き魔王なのだろうな。いや、この世界にとつても、良き魔王なのだろう。……しかし、人間は不安症でな。その最たる者が勇者なのだ。おそらく勇者は、他の人間とは誰よりもかけ離れた高次の思考をしているが、同時に、それこそが誰よりも人間らしい思考なのだろう。人間の生き方、歴史、そのものが、勇者の思考に内包されている。おそらく、勇者は『人間』を体現した者なのだろう。ただ、人間にしては賢すぎるが」

「それはつまり、人間は本来、それだけ賢いってことなんでしょうね。魔王も、『魔族』を体現した者だけど、魔族にしては優しすぎるし、ちょっと、バカ。だけど、魔王こそが、『魔族』である、と私は思う。だつて、魔族は、魔王を崇拜しているんだもの。その魔王の生き方を真似する魔族が、いないはずがないでしょ。ちょうど、宗教を信じる人間が、両性具有の誰かさんの教えに従い、その生き方を参考に、つまり、真似したように、ね」

「そうか。それで、長々と話したが、こんな情報、話しても良かつたのか？」

「良いわけないじゃない」

「なら、何故、話した？」

「当然、この会話は、『なかつたことになる』からよ」

「なかつたことに？ ワシが今すぐに通信魔法を使えば、ワシを殺しても、その情報は伝わるぞ？」

「あは。そうじゃない。正真正銘、『なかつたことになる』の」

「……どうこいことだ？」

「あら。理解できないの？ なら、それが人間と魔族の差よ。唯一つ、教えてあげる。魔法は、全ての理解を超越する。じゃあ、とりあえず、彼らが来るまでは、殺さないでいてあげるし、『なかつたことに』もしない」

「彼ら？」

「言つてなかつたかしら？ 今回の目的は、この都市の圧倒的な制圧。私だけでも充分だつたんだけど、他にも行きたいって魔族がいて、どうせなら、つてことで、みんなで行くことにしたの。私、第二レップグラム。そして、第三、第四、第五、第六。たぶん、第三が北から。第四が東。第五が南。第六が西から来るんじゃないかな」そして、レップグラムは笑つた。

「光と剣戟に蹂躪され、飲み込まれ、燃え散るがいい、人間」

第二節 - 11 - 夢幻攻略（前書き）

勇者は夢幻を攻略する。

その世界は夢幻だつた。

一瞬ごとに世界が移り変わり、その一瞬の間に、勇者はひどく傷つけられた。どのようにして傷つけられたかは筆舌に尽くしがたい。表現することすら難しい。非現実的な、物理的法則を完全に無視したような、まさに悪夢。しかし、これだけは事実だ。勇者はひどく傷つけられた。

勇者が今いるこの空間は、夢幻の世界だ。しかし、勇者が今いる世界そのものが夢幻なのだから、その中にいる勇者にとつて、それは現実と同じだ。故に、この世界では、傷つく。そして、おそらく、この世界で死ねば、現実でも死ぬのだろう。これは、そんな魔法だ。勇者が考えるに、この世界はあの塔という大規模魔法によつて創られた世界ではあるが、違う。あの塔の魔法は、おそらく、侵食魔法だ。塔に入った者を侵食し、その内に閉じ込める。そして、そこはもう、『魔法の中』だ。（魔法の中というのがどういう意味なのかは、勇者でさえはつきりと認識できていながら、そう言つ他ない）。つまり、ピーピリープリーが自由自在に動かせる世界ということだ。

そこは決して現実ではなく、だが、その内にいる『現実』たる勇者たちにとつては、現実と同じものだ。しかし……と勇者は歯を軋ませる。しかし、このような魔法の使い手とは、初めて会つた。どれだけ不条理な魔法なんだ。こんな、普通に考えたら、勝てるはずがない。この世界の神は、ピーピリープリーなのだから。

「無論、俺は常人の思考など及ばない存在であり、神すらも超えるわけなんだが」

勇者は夢幻に苦しむ中でさえ、そんなことを言つた。どこからか『勇者様、いきなり、何を言つておるんですか？』という声が聞こえる。そして、それに勇者は安堵する。ああ、俺の魔法は、まだ破

られてはいない、と。おそらくは、気付かれてすらいない、と。

その実、勇者の魔法 つまり、サヤへの隠蔽魔法は未だに破られても気付かれてもいなかつた。ならば当然、サヤの存在にすら、気付かれてはいない。サヤは、この夢幻の世界にいながらも、この世界の神であるはずのピーピリーフリーに、その存在を気付かれていない。

それがわかれれば、推測できた。

ピーピリーフリーは、無駄に歳を重ねたわけではないらしく、魔族の永遠とも言える寿命を上手く活用して、かなりの魔法の使い手になつっていた。勇者に匹敵、いや、勇者を超える技術を持つていることは容易に想像がついた。

だが、それでも、届かないほどじゃない。

勇者が現在していることは、この魔法の解析であつたが、先にもあつたように、ただ眼の魔法で解析しても、頭の方の処理能力の限界を超える。だから、現在していることは、ただの解析ではなかつた。正確には、解析だけではなかつた。

現在、勇者は眼の魔法の解析能力を最大にまで引き上げていた。そうすれば、頭の処理能力の限界を超えるはずだが、超えない。何

故か 魔法だ。

勇者は夢幻の世界で傷つくことを厭わず、死を回避する最低限の魔法以外は、自らの肉体から解除していた。その代わりに、勇者は他の場所に魔法を使つていた。

その魔法は、時間魔法。

時間という絶対不变の法であるそれを、扱う魔法だ。

時間魔法は、他の魔法の何倍もの難度であり、何倍もの魔力を必要とする。そのため、できるだけ魔力を温存しておきたい勇者としては、時間魔法は魔王と戦うまで使わないつもりだったのだが、ここで死んでは元も子もないの、使うことにした。

加速。

今、勇者にとつては、全てが遅い。そして、それ故に、処理能力

が限界を超えない。

眼の魔法の解析能力は最大であるが、自らの時を加速し、その解析結果を処理するだけの時間を作ったのだ。それでも途方もないほど情報量であることは確かだが、それを処理できるだけの能力を持つのが勇者である。

……これは言つまでもないが、時間魔法で時を止めることは不可能に等しい。勇者でさえ、自らの時にある程度加速することしかできないのだ。魔王でさえ、おそらくは不可能だろう。もし止めることができたとしても、（その止まった時間の中での）数秒くらいしか、止めることはできないだろう。それほどまでに、時間魔法とは高度な魔法であり、時間とは強制力の高い法なのである。

そして、その結果、勇者は、この魔法がどういう構造なのか、それを推測するに至つた。あとは、それを確認するだけ

そんな折、

『そろそろ、危なくなってきたんじゃないから?』  
ピーピリーブリーの声。頭の中に直接響くような、頭の中から直接響くような、頭を搖るがすような声。

勇者は、密かに拳を握り、よし、と思つた。これで、繋がる  
『許してほしい? 許してほしいよね? あなたは、夢幻の苦痛を、無限に受けた。はっきり言つて、狂つてしまつっていても、おかしくないわ』

フェイクに引っかかった。

俺の推測は、間違つていなかつた。

『でも、許さない。絶対に、許さないから。同胞を殺したあなたは、絶対に、許さない』

ピーピリーブリーは、もう勇者の心を読めていなかつた。読めていると思つているそれは勇者が創造した疑似思念体の心だ。勇者の心ではない。

まだ完全とは言えないが、ある程度は、征服した。

次は、ピーピリーブリー本体だ。

勇者は時間魔法を解除し、自らに向けられた夢幻を疑似精神体へと指向を変換する。勇者は夢幻から抜け、意識が、戻る。

「……勇者様？」

田の前に、サヤの不思議そうな顔。「どうか、しましたか？」「いいや、なんでもない」勇者は答え、そして言ひ。「じゃあ、そろそろ、行くか」

「どうですか？」サヤが訊ねた。

「ペーペー・ブリーのところに、だ」

勇者は当然のようすに呟つた。

老人は来訪者と戦おうとする。

「それは嫌だ、と答えてお」  
「うへクセルは出来る限り平静を保ち、そう答えた。すると、レップグラムは「だよねー」と笑った。笑うほどに余裕があると言つことか。へクセルは思った。

へクセルは密かに魔法の式を構築し始めた。勇者の魔法構築スピードは一瞬とさえ言えるほどの速さであるが、実際、普通の人間は魔法を構築するまでに一定の時間をする。故に、戦闘に魔法を扱う際は、元から魔法陣を描き、それだけを利用して戦うことがほとんどである。

しかし、勇者ほどではないにしても、へクセルはかなりの魔法構築スピードを誇る。だから、彼は今、魔法を構築し、すぐにでも、レップグラムに攻撃を仕掛けようとしていた。

「まだ、やめておかない?」レップグラムが首を傾げて、言った。「私以外が来て、この都市の大部分が壊れてからにしない?」

やはり、気付かれていた。だが、魔法はもう、完成している。

へクセルはレップグラムに魔法を行使した。レップグラムの身体が、何かに縛られたかのように、完全に止まる。

捕縛魔法 へクセルも当然、即興で構築しただけの、しかも、密かに構築した魔法で、レップグラムにダメージを与えることができるのは思っていない。また、そのような魔法でいつまでも捕縛できるような相手でないことはわかっている。

だから、へクセルは、今日まで勇者すら知らなかつた、(勇者の頭を覗いても、そのような知識は一つもなかつた)、大規模魔法を扱うことを、魔法陣よりも遥かに短い時間で、何もなく頭で構築するだけよりも、遥かに容易な、そして、強大な効力をもたらす方法を用いて、魔法を構築する。

それは、何か。そんな、誰もが望むような方法とは、何なのか。

## 詠唱。

「全ての生命行動の素よ、我が焰の糧となり、その苛烈を敵に『えよ』

たつた、それだけ。

しかし、それだけで、魔法は発動した。

レプグラムの周囲から、ちりつゝと音が聞こえた。

瞬間、全てが業火に包まれた。

「その色は血。生命の素に満ち満ちた血」

赤く、紅い。業火。劫火。

血の獄に溢れる焰とは、おそらくこのような焰なのだろう。

そう思うほどの焰だった。

「敵のそれを、喰らえ」

声に同調して、焰は、レプグラムを喰らひつけ、レプグラムを包み、飲み込む。

まるで生きているように、その焰はついめき、そして、焰の勢いを増す。

「 そなたが、燃え散れ」

焰の勢いは衰えず、煌々と鮮烈な紅に輝く。真っ赤な血を連想させる焰。そして、それは、やがて 散つた。

無論、この魔法は、そんな簡単に扱えるような魔法ではない。勇者であつても、扱うのにけつこうな時間が必要だろう。（勇者が攻撃の魔法に焰などの『附加価値』を与えることを苦手とするのも要因の一つだろうが）。それほどの魔法を、たつたあれだけで発動するなど、常人には考えられないことだった。

先の詠唱には、様々な意味が込められている。

詠唱によつて つまり、実際に言葉にすることによつて、『連想』を容易にする。魔法とは、結局を言えば、論理ではなく感覚でするものであり、その魔法の構築をイメージすることができれば、魔法の構築は速くなる。そのイメージに輪郭を与えるのが、詠唱なのである。それにより、魔法の構築スピードと正確性が向上する。

だから、詠唱の言葉は、その魔法が『連想』しやすいものが選ばれる。全く関係がない言葉を選んだら、詠唱を容易にするどころか、かえつて難しくなる。

単純すぎやしないか、曖昧すぎやしないか そう思うかもしれない。そして、それは正しい。

なぜなら、魔法は曖昧なものだからだ。

人間が理論を組み立てることによって、その発動を可能にしてはいるが、魔法はそのように、曖昧なものなのである。『実際に言葉に出す』。ただそれだけで、このように激烈な変化を生み出す。それが、魔法だ。

魔法の発見すら、偶然のものだつたのだ。偶然、魔族を殺したら魔力を奪うことができて、（無論、最初はそれが魔力だと言うことは知らず、何かが入つてきたとしか思わなかつたのだろうが）、偶然、それをある程度操作できることに気付いて、偶然、適当に組み合わせたら、魔法が発動した。焰の魔法だつた。蠟燭の先に灯つているような、そんな、小さな火。だが、人間たちは大きく驚いた。そして、魔法の研究が進められ、今に至る。

魔法の発見すら、それだけ偶然の積み重ねなのだ。（その他の技術の発見もほとんど偶然の産物であろうが）。魔法は、それだけ、曖昧なのだ。

故に、単純な方法も、途方もないほどに大きい変化の誘因になり得る。

詠唱。

それが、ヘクセルの 実際を言えば、この魔法都市の、とある学生の 発見だつた。驚くほど容易に、驚くほどの速さで、驚くほどに強大な魔法を行使できる。

現在、この魔法都市の全ての人間が、この詠唱を知つていて。魔法都市外にはまだ教えてはいないが、（勇者が持論を全ての人間に教えたかったのと同じく、未だに人間同士で戦争をしているのをこれ以上加速しないように、人の死の数を、これ以上増やさないよう

に、もしも、全ての人間が、詠唱を知れば、魔族に、勝つことができるかもしない。いや、きっと、勝てる。そう、魔王にすら「あー、びっくりした」

声が、した。

ヘクセルは驚き、その声の方を見た。焰は、どこにもない。先ほどまでの苛烈な焰は役目を果たし、もうとうに消えている。『消えている』？ 確かに、ヘクセルの魔法は、かなりの威力を持つた魔法だった。だが、あれだけの魔族を、そんな短時間で、燃やしつくせるか？

否。

「でも、無駄よ。私には、無駄」

また、声。

よく見ると、先ほどまで焰が舞っていたそこに、赤ではない、水色の粒子が見えた。

それはきらきらと輝き ヘクセルはダイヤモンドダストを連想した 幻想的な、綺麗な、光景だた。

だが、ヘクセルにとつては、それが何なのかを予想できるヘクセルにとつては、恐怖以外何の感情も導かない光景だった。

「私は『第一』だよ？ その意味が、わかっているの？ 面倒だから、シャムに『第一』を譲つてはいるけれど、それでも、『第一』。その意味が、わかる？」

粒子は集まり、人間の身体を形作った。輪郭が生じ、すると、そこにはレップグラムがいた。全く無傷のレップグラムが。

「まあ、わかつても、わからなくても、私にはあなたの攻撃の全てが無駄。だから、無駄な魔力なんて消費しないで、見ておきましょう。この都市の、滅亡を」

そう言って、レップグラムはぱちんとウインクをした。

ヘクセルは、魔力を練り、魔法を構築しようとして、やめた。  
もう、どうしようも、ない。

第二節 - 13 - 戰闘開始（前書き）

勇者と魔族の戦闘開始。

「……やつと、見付けた」

勇者は溜息を吐いて、言つた。その額は少し汗ばんでいる。後ろにいるサヤはぜえぜえと息を切らしていた。

「なん、で」

ピーピリー・ブリーが驚愕の面持ちで言つた。「なんで、ここに魔法を使わずに来たから、けつこう疲れたぞ。本当に、面倒くさい魔法を創りやがつて」

勇者の言葉は答えになつていなかつた。例外を除いて、だが。その例外である、ピーピリー・ブリーには、充分に答えになつていた。『魔法を使わずに』。その言葉と、今ここに勇者がいると言つて事実だけで、全てを悟つた。

魔法を、攻略された。

ピーピリー・ブリーの魔法は、人間どころか、大多数の魔族もしかすると、第五くらいまでにすら、攻略されないほどに高度で複雑な魔法だつた。力任せに破壊することなどできず、完全な技術をもつてしか、攻略できない魔法なのだ。

しかも、ピーピリー・ブリーはこれを構築するのに、三ヶ月以上の時間を要した。それほどまでに時間をかけて構築したこの魔法を、これほどの短時間で攻略されるなど、考えられるはずもない。

ただ想定外だったのは、勇者の『眼』。

勇者はピーピリー・ブリーの表情を読み、笑みを見せ、言つた。

「おそらくだが、お前、この魔法を構築するのに、三ヶ月くらいの時間をかけただろ」

ピーピリー・ブリーはその言葉に驚愕する。心を読まれた。そう思つた。

「心、つづりよりは表情だ。いつも思つたが、魔族の心は読めやす過ぎるぞ。人間とは違つて、善良だからか？ 表情にしろ、声にし

ろ、仕草にしる、全てにおいて、心が読めやすい。お前らの心なんて、魔法を使つまでもなく、読めるさ」

その言葉に、さりげに驚愕するピーピリー・ブリー。おそらく、全ての魔族がこの言葉を聞いた瞬間に、驚愕の谷に落とされるだらう。魔族は魔法を使うことが当然であり、『心を読む』と言えば、それは魔法以外に手段など存在しないはずだつたのだ。 そう言えば、第一とか第十三とかには、魔法を使わなくとも心を読まれていたような気がするけれど、あれは、魔法の発動を隠蔽していたわけじゃなく、本当に魔法を使つていなかつたのかもしれない。ピーピリー・ブリーは第一や第十三といつた同胞が自らをからかつた時のことを見い出した。

「さて、話を戻すが 三ヶ月？ お前、それくらいの時間しか使つていない魔法で、この俺を殺せるなんて思つていたのか？」

「え？」

ピーピリー・ブリーは啞然としてそんな言葉を漏らす。三ヶ月。それだけの時間、ずっと、一つの魔法の構築に集中していたのだ。元々、ピーピリー・ブリーは魔法構築スピードが他の魔族に比べて速く、技術に関してもかなりのものだと自負している。その自分が、三ヶ月も要した魔法だ。それが、『それくらいの時間』？ どういう意味だ。

だが、その心の中に抱いた問ひは、ピーピリー・ブリーの予想もしなかつた答えを返されることになつた。

「俺は、この『眼』に、数年の月日を費やした」

そう言つて、勇者は自らの『眼』を見せる。緻密すぎて、構造など全く分からぬ。それほどまでに、微細まで張り巡らされた、魔法。

ピーピリー・ブリーは最初、我が目を疑つた。数年？ 一つの魔法に？ いや、確かに、あれは、それほどの時間を費やしてもおかしくないような魔法だ。それほどの時間だけで終わつたことに驚くような魔法だ。 だが、あれを、人間如きが？ 人間如きが、あれ

ほどの魔法を？

しかし、疑つても、実際に、その『眼』は存在している。ピーピーリープリーが構築した、今、彼らがいる空間のような、大規模な魔法ではない。だが、もっと、もっと小さな空間　人間の『眼』に、ピーピーリープリーの魔法に満たされた空間にある全ての構造よりも緻密な構造が、内包されていた。これだけ大きな魔法に、これだけ緻密な魔法構造。その時点で、ピーピーリープリーはどこか安心していたのかもしれない。これが、破られるはずがないと。この魔法さえあれば、絶対に、仇を討てると。

だが、それは間違いだった。

勇者は、その上を行つていた。

だけど。

「だけど、まだ、負けたわけじゃない。この魔法だけが、私の全て

だとは、思つていないのでしょう？」

それに、勇者は笑つて答えた。

「当然だ。久しぶりに、楽しませてもらつぞ」

魔法都市の西に、それは来た。

魔法都市・西部。障壁の前。

そこに、一人の男がいた。

筋骨隆々とした肉体。獅子を思わせる金の髪。肌は浅黒く、表情は凶悪な笑み。そして、一本の尾が生えていた。

彼は目の前の障壁に手を伸ばし ある程度まで手を近づけた瞬間、バチツ、と刺激が走り、手を戻した。

「痛つてえなア」

男はそんな言葉を口にしたが、その表情には凶悪な笑みが深く刻まれていた。

そこで、この障壁に触れたことでなんらかの術式が発動したのか、男に向かって幾つもの魔法が障壁より放たれる。「迎撃魔法、か」紫電が走り、水流がうねり、風が刃となつて向かってくる。

「こ」の程度の魔法、この俺様に通用すると?」

男は凶悪な笑みをさらに深くして、自らに向かってくる魔法に手を向けた。

直後、男に向かっていた魔法は、全て『燃え散つた』。

魔法燃焼。

彼が今、使つた魔法は、名付けるのならば、そのような名前の魔法だつた。

魔法そのものを燃やす魔法。魔法を構築している、魔力そのものを燃やす魔法。

故に、魔法燃焼。

「おいおい、まさか、これで終わりじゃ、ねえヨな?」

男は期待外れだ、とでも言うように肩をすくめる。しかし、それだけで終わりなはずがなかつた。

「……ん?」

男は自らの真下に、不自然な魔力の流れを感じした。

いや、

これは、今、流れたんじゃない。最初から、流れていた！

男は気付き、だが、もう遅い。

迎撃魔法は発動した。

男の真下に亀裂が走り、その亀裂は、男を飲み込むように広く、深くなつていく。無論、それだけで落ちるよつた彼ではなかつたが、「重力、魔法かッ」

重力魔法により、男が自由に動けなくなつていた。そして、魔法によつてその縛りを強くした、重力という名の鎖によつて、男は、そのまま地中へと引きずり込まれた。

男が完全に地中へと引きずり込まれると、亀裂は自然に塞がつた。その数分後。

障壁の迎撃魔法が発動されたことを感知し、既に待機していた人間たちは、そつと、建物の陰から姿を現した。

そして、魔族が本当にいないかを確認し、ほつと息を吐いた。

「あらあら、倒されちゃつた」

レプグラムはくつくつと笑つていた。その言葉が本心からのものではないことは、ヘクセルが一番わかつっていた。

故に、ヘクセルは、懇願するように言つ。

「 今すぐに、そこから、逃げてくれッ！」

だが、その言葉が、聞こえるはずもなかつた。

人間たちは、死んだであろう魔族から魔力をもらおうと、障壁に正確には、障壁の近くに存在する魔法陣に近づいた。この魔法陣は障壁によつて倒された魔族と繋がるような性質を持つており、そこに手を触ることによつて、実際に魔族に触れることなく、そ

の魔力を奪うことができるといった装置だ。実際に魔族に手を触れるようになった場合、魔族が死んだフリをしているだけだった時に、危険だからこそその配慮である。

故に、人間たちは、魔法陣から魔力を奪えないことを知つても、『まだ死んでいないのか。早く、死なないかな』なんてことを思つてはいるだけで、自らの身の危険など、微塵も感じていなかつた。彼らにとつては、それが幸運だつた。

なぜなら

「燃え散れ」

その言葉と共に、魔法陣を伝つて、魔法が発動し、そこにいた人間のほとんどが一瞬で燃え散つた。

なぜなら、彼らは、何の痛みも恐怖も無しに、一瞬で、この世から消えたからだ。

「え？」

そして一方、かろうじて生き残つた人間は、何が起こつたのかを全く理解できずにいた。どういうことだ？ 何が、起こつた？ 生き残つた人間が、そんな動搖の内に囚われる中、障壁の外の地面が、突然『燃えた』。

地面が燃え、そこから出てきたのは、当然ながら、先ほどの男だつた。

「人間が重力魔法を使えるとはな。驚き驚いて、称賛の代わりに、かかるつてやつちまつたヨ」

男はその表情に、見る者に恐れを抱かせる凶悪な笑みを深く刻み、言う。

「だが、この俺様から魔力を奪おうとしたことは、許せねエ。不敬は、万死に値する」

男は燃え、穴の開いた地中から地上に出、障壁に触る。すると、それだけで、西側の障壁が燃え散つた。

魔法燃焼。

それは、魔法を燃やす魔法。魔法を構築している、魔力を燃やす

魔法。

先ほどの一突、突然、魔法陣の近くにいた人間たちが燃えたのも、これを考えれば理由は容易に想像できる。つまり、自らと魔法陣を結ぶ魔力の構造に火をつけ、魔力を通して、燃やしたのだ。その結果、魔法陣の近くにいた人間たちは、みな、一瞬で燃え散った。

しかし、魔法陣にあまり近づいていなかつた人間は、未だ完全には燃え散つていなかつた。誰一人として無傷な者はいないが、それでも、生きていた。

彼らは男が障壁を破壊したことを認識すると、その意識を動搖から戻すことに成功した。だが、それが、彼らの不幸の始まりだつた。最初に気付いたのは、炭化した脚。

あまりの熱に、燃え続けることなく、一瞬で炭化し、その傷を焼き塞いだ、脚。

「 ッ！」

声にならないほど、悲鳴。

さきほどまでは気にならなかつた恐怖が、激痛が、一気に押し寄せってきた。脚が、脚が、ない。炭になつてゐる。ぼろぼろと、崩れ落ちてゐる！ 触る？ いや、だめだ。触つたら、もつと早く、崩れ落ちてしまつ。ぽろぽろと、砂で固めたものに力を加えたら、砂が崩れしていくように、崩れ落ちてしまつ。しかも、自分の、この脚が

だが、それだけで済んだ者は、まだ、幸いだつた。

下半身がまるごと燃え散つた者もいた。位置関係的に、前方だけが燃え散り、残つた中身だけが炭になつていて、腹の中が、見えた。炭になつた皮膚の穴から、炭になつた内臓が見えた。炭化していることが一瞬でわかつた。血は、やはり出なかつた。通常、大量出血によつてパニックに陥るはずの人間は、今、血が出ないことにパニックになつてゐた。何故、血が出ない。これほどの傷で、何故、血が出ないのだ。腹に、穴が開いてゐるのに。真つ黒焦げの内臓が、見えてゐるのに。それなのに、何故、血が出ないんだ。

手だけが炭化した者もいた。指が炭となり、動かそうとしたら、ぽろぽろと崩れ、地に落ちた。骨が見えた。炭化していた。すぐに崩れた。

炎に晒されると、普通、人間は皮膚が焼け爛れるはずだが、そんなものは全くなかつた。燃え散るか、炭になるか、何もないか。それだけしかなかつた。

炭になつてゐる場所と、いつも通りの場所。それがはつきりと分かれつていて、それが、逆に痛ましさを増幅させた。こつちはいつも通りなのに、それなのに。比較対象が存在することによつて、悲惨なそれが、どれほどの悲惨なのか。その程度を知つてしまい、恐怖は増幅したのだ。

他にも、色々な者がいた。耳がない者。鼻がない者。腕がない者みな、同じように、悲惨であつた。

そして、その悲惨を生み出した者は、彼らの前に立つ。

わざと、大きな足音を立てる。すると、ビクツ、と身体を震えさせ、人間たちは、彼の方を向く。凶悪な笑み。悪魔のような笑み。「お前らへの罰は、まあ、一応は、これで終わりとしようか。俺様は、人間ほどに、悪ではないからなア。せめてもの、慈悲だ」

そうして、彼は『第六』は、言つた。

「この俺様、第六ゾオルが、炭にすらせらず、完全に、この世から燃え散らしてやる」

ゾオルは手を払うようにして振り、直後、その延長線上にあつた建造物なども巻き込んだ、炎が、舞つた。

しかし、それは一瞬で消え、後に残つたのは、きれいさっぱりに建造物や人間が消えた、地面だけだつた。

これで、西の一角は、消滅した。

これからは、この、無駄に大きな都市の、西側の全てを、燃やすことだけだ。

ゾオルは、埃がたまつた部屋を、久しぶりに掃除する時、埃を一気に掃除する、その爽快感を楽しみにする人間のように、笑つた。

第二節 - 15 - 『夢幻』(前書き)

夢幻は、『夢幻』。

本音を言つと、最初、ピーピリー・ブリーの姿を見た時は驚いた。この塔の外にいた魔族から予想していたが、よもや、ここまで人間に酷似している魔族が、魔王の他にもいるとは、想像していなかつたのだ。

人間の女性に似た体躯を持ち、（これが一番驚いたのだが）衣服を着用していた。魔族に裸を見られて恥ずかしがるような羞恥心など存在しないはず、と思っていた勇者だったが、その『眼』により衣服に隠された部分にびつしりと刻まれた紋様を見て、これを隠しているのか、と悟った。

魔族だからなのか、当然のように、人間と違つ部分は、その刻まれた紋様以外にも存在し、（自らの肉体に紋様を刻むのは人間にもする者は存在するのだが）、それは目だった。目の黒と白が、瞳と強膜がひっくり返り、白い瞳と黒い強膜と言つ、ありえない目を持つていた。肩にまで伸ばされた髪はこの空間の壁のような、夕と夜の狭間にあるような紫色。肌は『魔』族のくせに、白い。

目が若干ながら不気味だが、その不気味さを魅力として發揮しているような美貌だった。どうして、人間の姿をした魔族には、こう美人が多いのか。もし人間だつたら、この俺が直々に寵愛してやるのに。勇者はこの世界を運命の神とやらを、若干ながら恨んだ。だが、それでも、勇者がすることは変わらない。

こいつは、魔族だ。それも、かなり強力な。

勇者は、確かにピーピリー・ブリーの魔法を、この空間に満ち満ちた魔法を攻略した。だが、『攻略』しただけで、『征服』していいのだ。そして、おそらく、征服することは、余程膨大な時間がないと、不可能だろう。

勇者が征服できないほどの魔法の使い手。それはつまり、それほどまでの使い手と言つことだ。

その魔族を、野放しにすることなど、勇者に許せることがない。どんな美貌を持つていようと、関係ない。

勇者にとつて、魔族は、敵。

安全を脅かす、そんな可能性を有した、敵だ。

だから、今、勇者がすべきは、ただ、魔族を倒すことのみ。勇者は魔力を放出し、ピーピリープリーに急接近。同時に両手で構えた剣を振る。しかし、ピーピリープリーは魔法を発動。勇者ではなく、その『空間』に夢幻を見せ、『空間』を捻じ曲げることにより、勇者の進行方向を捻じ曲げる。

それによつて、くるんっと回転することになつた勇者は、一度、地に足の先を着け、重心移動を行い、足の先から踵に、地面との接着面を移す。その瞬間、踵は地を蹴るような状態になる。それを利し、勇者は地を踵で蹴り、後ろに跳ぶ。魔力の放出によつて補助されるため、ほんの少しの推進力でも、かなりのスピードで後ろに跳ぶことが可能だつた。

その直後、勇者が先ほどまでいた、通常ならば一度そこに着地したであろう地点に、魔法が発動され、空間が変に歪んだ。ピーピリープリーの魔法。もしも勇者があれほど早さで回避していなければ、確実に直撃していただろう魔法。

「あれを避ける、か。人間とは思えない」

「お前も、魔族とは思えないくらいだ。人間並みの頭を持つていやがる」

魔力放出により、後ろに跳んだ勇者は、空中にいるまま、剣から左手を放し、それをピーピリープリーに向ける。そして、魔法を発動。攻撃魔法。ただ『攻撃』という概念のみを、対象にぶつける魔法。

ピーピリープリーは難なくそれを防ぐ。そして、それを利用して、勇者へと攻撃魔法を放つ。俺の魔法に、自らの魔法を上乗せしたのか！ 勇者は驚愕の表情を見せながらも、その時には勇者は地に着地しており、地を蹴り、魔力を放出し、難なくそれを回避する。

「お前、魔法に関しては、魔族の中でもかなりの実力を持っているようだな」

その言葉は真実であり、ピーピリープリーはその魔力の総量は他の将軍級魔族に劣るもの、技術だけで『第一十』の地位にまで至ったほどには、魔法の技術が高かつた。『第十三』たるチャイオニヤも、かなりの技術を持つているだろうが、彼は技術と言うよりは、その頭脳が認められて、第十三にまで至ったのだろう。もつとも、ただ単純に、魔法という点でならピーピリープリーの方が上だが、その他の研究、開発に関しては、チャイオニヤに手も足も出ないのが現状である。第十三は、頭脳に置いても、研究、開発に置いても、おそらくは魔王に次ぐほどの実力を持っているだろう。魔力に関しては、ピーピリープリーよりも少ないが。

しかし、その事実があつても、それを勇者にわざわざ教えてやる義理はない。ピーピリープリーはふふんと笑い、「さあ、どうかしら？」と言った。

無論、勇者は表情や仕草によつて心を読むことに長けているので、ピーピリープリーが答えるよりも早く、つまり、自らが言葉を発した瞬間に、自分の予想通りであることを確信していた。自分の言葉による反応を見れば、それが正しいか否かくらい、わかつて当然だ。だが、それを見抜いたことをわざわざ言う義理は、勇者にもまた、存在しない。よつて、勇者はピーピリープリーの言葉に何も返はしなかつた。

その代わりとでも言つつもりか、勇者はまたもや攻撃魔法をピーピリープリーに放つた。

ピーピリープリーは、またか、と思いながら、それを先ほどのように防ぐつもりだった。だがしかし、勇者が無駄とわかつている攻撃を、一度繰り返すはずがない。

勇者は意図的に、先ほどの攻撃魔法の出力を落としていた。そして今、その出力を上げて、攻撃魔法を放つたのだ。さすれば当然、先ほどと同じ対処法では、防ぐことはできない。しかし、全く同じ

だと思つたピーピリー・ブリーが、同じ対処法をしようとしていた。

これはおそらく、勇者の攻撃魔法の特性も関係しているのだろう。勇者の攻撃魔法はただ『攻撃』という概念のみを相手にぶつけるという魔法であり、炎や水といった、目に見えるような魔法ではない。それ故に、勇者の魔法は、その出力によつて、その威力の程度を目に見ることができない。その大きさなどで判断することができないのだ。

だからこそ、ピーピリー・ブリーは選択を誤つた。勇者の魔法が、先ほどとは比べ物にならないくらい、強力だと言つことを。

ピーピリー・ブリーは先ほどと同じように魔法を展開、発動。勇者の攻撃魔法を防ぎ、利用して、勇者に返そうとする。だが、勇者の魔法は、ピーピリー・ブリーの魔法を、超えた。

「なつ――！」

ピーピリー・ブリーは驚きに目を瞠り、即座に魔法を改変する。しかし、もう遅い。

ピーピリー・ブリーに、魔法は直撃し　彼女は、消滅した。

これで、勝つた。

勇者とピーピリー・ブリーの戦闘を、隠れて見ていたサヤは、そう思つた。

そう、サヤ『は』。

そして、サヤは勇者に近づこうと、足を一歩、踏み出した。

だが、その足は、宙に浮いたまま、地を踏みしめることなく、止まつた。

戦闘は、まだ、続いている。

突如、勇者の背後にピーピリー・ブリーが出現した。「勇者様つ、危ない！」サヤは思わず叫んだが、言われるまでもなく、勇者はそれを読んでいた。第七エレクトロと戦つた時のように、罠を仕掛けていた。ピーピリー・ブリーが出現した場所に、それはあり、当然、それは発動した。勇者が第七エレクトロを倒した時の魔法よりも遥かにその力を増した罠魔法。それが、ピーピリー・ブリーを、襲う。

しかし、第七エレクトロと勇者の戦闘を見ていたピーピリー・ブリーが、それを予想していないはずがなかつた。ピーピリー・ブリーは罠に直撃し、その身体の一部が消滅した。だが、ピーピリー・ブリーはそれでも尚、勇者に向かつて魔法を発動した。

勇者はそれを見て、かすかに驚愕の色をその表情に見せた。しかし、すぐに納得したように「そういうことか」と呟き、ピーピリー・ブリーの魔法に襲われ、吹っ飛んだ。

ピーピリー・ブリーは追撃。勇者に向かつて魔法を幾つも発動させる。勇者は油断しないピーピリー・ブリーに驚きながら、即座に身を起こし、魔力の放出によって高速移動。魔法を回避する。

そして、勇者とピーピリー・ブリーは向き合い、互いにふつと鋭い息を吐いた。

「『夢幻』……か。そうだ、お前は、魔族だつた。それくらい予想して然るべき、だつたな。つたく、魔族は、こうこうとこで狡猾だから嫌いなんだ」

勇者は先の攻撃魔法が通用しなかつた理由、そして罠魔法が通用しなかつた理由を思い、言った。その言葉にこそ驚いたのはピーピリー・ブリーだつたが、勇者の『眼』を思い出し、納得した。

「あなたに言われたくないわ。あれだけの障壁を瞬時に展開して、私の渾身の魔法を防いだくせに、寝転んだまま、油断を誘うなんて、あれを狡猾と言わず、何と言うの」

「それこそ、すぐにそれを見破つて追撃を仕掛けた奴に言われたくないぞ。だが、それにしても、期待以上だ。『夢幻』……。この空間を見ても、それは容易に想像できるはずだつたが、それでも、俺の予想の範囲外だ。まさか、その肉体そのものも、魔法だとは」勇者は驚愕よりも、称賛や憧憬の念を込めて、言った。それにピーピリー・ブリーは不敵に笑つて、応える。

「魔族の肉体は魔力によつて構築される。これは、魔法と同じじゃないかしら？ それさえ考えれば、自らの肉体を変えることなんて簡単よ。人間の姿に変わるとか、そういう、外見上だけの変化では

なく、その在り様を変えることすら、ね

「つてことは、なんだ。その身体に刻まれた紋様は、後天的なものか？ その紋様は魔法陣に似ている。魔力の伝導性を上げることが目的だと思えるが」

その言葉に、「ああ、これ？」とピーピーリーブリーは自らの身体に這うようにして刻まれた紋様を見る。暗い光を帯びた紋様。「これは、後天的なものじゃないよ。これは、元々。その通り、魔力の伝導性を上げることが目的なんだろうけれど、私が意図して刻んだものじゃない。生来からのもの。そして、だから

ピーピーリーブリーはそこで言葉を止めた。そして、その言葉に続く言葉は、勇者には予想できた。「だから、魔力の伝導性が、後天的なものよりも、良いつてわけか」

「そう」ピーピーリーブリーは笑った。「この紋様は、私にとって、異物ではない。私の身体の一部。だから、当然、後付けなんかより、ずっと、強力な効果を得ることができる」

「厄介な……」

勇者は額を汗で滲ませ、ぎり、と歯を軋ませ、言った。「お褒め頂きありがとうございます。あなたほどの中者にそう言わわれるのは、私にとっても、誉れよ

ピーピーリーブリーは笑顔で言った。

それに勇者はチッと舌打ちをして、思つた。  
さて、どうするか。

魔法都市の南に、それは来た。

魔法都市・南部。障壁の前。

そこに、一人の男がいた。

巨漢と形容するにふさわしい男だつた。東洋人のような短い黒髪と黄色い肌を持つ、巨漢。その額からは、東洋の伝承にある『鬼』を想起させるような、巨大な角が額から生えていた。

「フツ！ ハツ！ ハツ！ ハア！ 久しい！ 久しいな！」

彼は豪快に笑つていた。そして障壁に触れようとして、バチッ、と音がして、弾かれる。

「む。このオレ、第五テドビシュに刃向かうか。これは良い。気にいった！ 特別に、賛辞を贈ろうではないか！」

そうして彼はまた豪快に特徴的な笑いを上げる。その時、幾つもの迎撃魔法が放たれたが、彼はそれに直撃しながら、全くの無傷だつた。逆に、「ほほう。まさか、このオレに攻撃をすることは。フツ！ ハツ！ ハツ！ これは面白い！ 面白いぞ、人間！」などということを言つた。

地に亀裂が走り、彼を飲み込もうとする。重力魔法も発動する。だが、彼はそれを全く意にすら介さず、障壁に手を当てた。

バチバチッと音が鳴り、だが、彼はそれを無視し、障壁に手を突つ込む。そして、力任せに、破つた。

「うん？ 意外と脆いな」

彼は拍子抜けとばかりにそう言つて、魔法都市の中に入る。同時に、物陰に隠れていた人間から幾つもの魔法を放たれる。だが、彼はそれに豪快に笑つた。

「フツ！ ハツ！ ハツ！ 恐れず、逃げず、向かつてくるか！ 良い！ 良いぞ！ もつと来るがいい！ 貴様等は、我が眼に適つた！」

彼は心底うれしそうに笑つたが、彼に魔法を放つていた人間たち

は、逆に恐怖が募つていった。これだけの魔法をぶつけていのに、どうして、無傷なんだ！

「水よ。流れよ。我が矛となりて　　」「雷よ。走れ。奔れ　　」

「地よ、知よ、智よ　　」

人間が必死に詠唱を使い、ありえないほどの高密度の魔法を浴びせ続けるが、それでも、無傷だった。バケモノ。そんな言葉が脳裏をよぎった。

「これは面白い！　何事かブツブツ言つていると思うたら、それによつて、魔法を強化しておるのか！　フツ！　ハツ！　ハツ！　人間はやはり、知恵をつけるものだなあ！　そのような方法、オレたちですら、知らなかつたぞ！　いや、もしやすると、それは人間の身に適用されるかもしだねな。まあ、どちらにせよ、そのようなまどろっこしいこと。このオレ、第五テドビシユがするはずもないがな！」

豪快に笑うテドビシユ。なにがおかしいのだ。じつは、こんなにも、必死なのに。

「こんなにも面白いものを魅せられては、このオレが何もせぬわけにはなるまい」

その言葉に、人間たちの背筋は言いようのない悪寒を感じた。背筋が凍り、嫌な予感がした。恐怖？　違う。そんなものじゃない。死？　そうかもしれない。だが、それは、何か、違うような気がする。

「最初だからな。手加減してやる。　死ぬなよ？」

諦観？

そう。きっと、そうだ。

それが、一番、近い。

テドビシユが手首を曲げ、伸ばす。それだけの動作だったが、その場に存在した人間の誰もそれを認識することができなかつた。それほどまでに素早い動作であり、そんな動作を見る余裕など、誰にもなかつたのだ。

津波のような衝撃が弾け、人間たちを襲う。竜巻が通った後のように、建造物がばらばらに壊れ、弾け飛ぶ。人間も同じように弾け飛ぶが、死んではいなかつた。死なないようテドビシュは手加減したのだ。 と言つても、内臓がぐちゃぐちゃになつて、骨もぐちゃぐちゃになつたが。

「がつ、あつ」

ほとんどの人間が、瓦礫の上に倒れたり、がれきの下敷きになつたりして、口からそんな言葉を漏らし、ひゅーひゅーと息を漏らし、だらだらと血を流していた。

血が流れていたのは口からだけではない。鼻からも、耳からも、目からさえ、流れていた。歯が折れ、欠けている。鼻の骨も折れ、顔はぐちゃぐちゃになつっていた。

腕は変な方向にねじ曲がり、足も変な方向にねじ曲がり、身体も変な方向にねじ曲がつている。魔族かと見間違える者もいるかもしれないほどに、ぐちゃぐちゃな肉体に成つていた。

テドビシュは自分の一番近くにいる人間に歩み寄り、「ほう」と嬉しそうな声を上げた。

「本当に死んでいなとは。流石は、このオレの目に適つた人間だ」そうしてテドビシュはその人間を親指と人差し指で頭をつまむようにして掴み、顔に顔を近づけ、踏み踏みするようにして見る。

「どうした？ 刃向かわないので？ オレは、この通り健全だぞ？ もしも、刃向かわないのであれば、この都市を、完膚なきまでに、壊滅させるぞ？」

テドビシュは挑発するようにして言つたが、人間は意識がないのか、何も答えることはなかつた。「……つまらん」そう呟き、テドビシュはその人間を放り投げた。

「光れ」

直後、その人間がそんな言葉を呟いた。同時に、テドビシュの視界を塗り潰すほどの光が閃いた。「む」テドビシュはあまりの眩さに、思わず目をつぶつた。

好機。

そう断じた人間たちは、一斉に魔法を発動した。倒れた振りをして、ずっと、詠唱をしていたのだ。遠くにいるから、聞こえないだろう。そう思い、自分ができる最高威力を誇る魔法を、それぞれ、長い長い詠唱の果てに、行使した。戦闘ではおそらく使うはずもない、そんな長い長い詠唱によって、自らの能力の限界を超える魔法を行使したのだ。

それは一斉にテドビシュを襲つた。地を搖り動かすほどの轟音とともに、テドビシュが魔法に飲み込まれる。様々な魔法、ではなかつた。ただ単一の、彼らが知る、最高威力を誇る魔法。魔力の全てを衝撃へと変換し、圧倒的な威力を得ると言う、勇者が使う『攻撃』の概念魔法にも似た、魔法。仲間の魔法と組み合わせることによつて、さらに強力になる魔法。一斉に使うことが目的だったのだから、打ち消し合うような魔法を使えるはずもなかつたのだ。

結果、テドビシュが受けた魔法は、驚くべきほどの威力を成したのだ。

魔力のほとんどを使いはたしてその魔法を行使した人間たちは、死を予感していた。この傷、もう長くは生きられないだろう。だが、彼らは満足していた。最後に、この都市を守れたことを。この世界に、貢献できたことを

だが、それは絶望に変わる。

「フツ！ ハツ！ ハツ！」

そんな、豪快な、特徴的な笑い声が、死の淵にあつた彼らの意識を呼び醒ました。

まさか。

まさか！

彼らは一縷の望みをかけた。それが聞き間違いであることを。自分たちは、無駄死になどではないのだと。

しかし、聞き間違いなどではなかつた。

「面白い！面白いぞ人間！よもや、このオレに『防御』をさせるとは！これは期待以上だ！人間！貴様らに、褒美をやろう！」

その言葉と共に、テドビシュは、魔力をその手に溜め始めた。そして、思い切り腕を振るうのと同時に、その魔力を解放した。先ほどとは比べ物にならないほどの轟音が響き、地面がめくれあがり、それもまた圧倒的なまでの魔力の奔流に飲み込まれる。『圧倒』。まさにその言葉が似合う魔法だった。

いや、これは、魔法なのか。

こんなのは、もう、ただの『暴力』ではないのか。

魔法とは言えないような魔法。

『暴力』としか思えない魔法。

ただただ圧倒的な魔力の奔流によつて対象を飲み込む『それ』は、確かに魔法と呼ばれるようなもののように思えなかつた。だが、それこそが、彼の、第五テドビシュの魔法なのだ。

「これこそが、我が魔法！第五テドビシュの魔法だ！さあ！

現世に疲れた者は、我が前に立て！この魔力の奔流に飲み込まれ、しばしの暇をとることを許す！」

テドビシュは豪胆と言つ他ないに王立ちの姿勢で、高らかに言い放つた。

応える者は、応えられる者は、既に、そこにはいなかつた。

勇者の本氣の一端。

「……仕方ない」

勇者が突然、頭を搔きながら、釈然としない様子で言った。

ピーピリープリーはそれを怪訝な様子で見る。

どうしたこと? 何が、仕方ないの?

そう思つてはいるが、決して表情は変えない。勇者の心が読めない今、勇者に心を読まれることは避けたいのだ。第七エレクトロの死を知るピーピリープリーだからこそその思考。勇者に心を読まれることの危険性を、しっかりと理解している故の思考。

「光榮に思え、魔族。俺は、お前を厄介だと判断する。だから、少しばかり、本気を出してやる」

その瞬間、勇者は音もなく消えた。

ピーピリープリーは魔法を制御。勇者に攻略されたからと黙つて、まだこの空間はピーピリープリーの魔法だ。この空間からの勇者への干渉は難しいが、だからこそ、干渉できないと黙つ事實から逆算して、勇者の位置を特定する。そんな戦法は勇者も予測しているだろうが、勇者はそれを妨げる術を持たない。干渉されることこそが、最も危険であることを理解しているからだ。

捕捉。

ピーピリープリーは魔法を行使した。勇者の存在する空間を惑わし、夢幻に墮とす。無限夢幻 無限の夢幻に惑わされ、世界自体が夢幻に惑わされ、無限に世界は変容する。

勇者のいるはずの空間が歪み、だが、避けられる。予測していたこと。そして、ピーピリープリーは夢幻ではない魔法を行使する。ピーピリープリーは夢幻以外の魔法を使うことができないなんてことはない。魔族屈指の魔法の使い手。それがピーピリープリーだ。その魔族が、たった一種の魔法しか使えないわけがない。

ピーピリープリーは背後から近づく勇者に向かって、単純な攻撃

魔法を　勇者が使う、『攻撃』という概念のみを対象に放つ魔法に似た魔法を行使する。完全模倣とまではいかないが、一度経験した魔法ならば、ある程度模倣することができる。たとえそれが不可視の魔法だろうとも、実際に受けたのだから、その魔法構造を解析するだけならば（彼女にとつては）容易だつたのだ。

背後で勇者が驚いているのが見える。案の定、驚いた。自らの魔法を模倣されたのならば、それは驚かないわけがない。

そう、驚かないわけがないのだ。

そして、実際、その表情は、明らかに、驚いているものだ。そのはず。そのはずなのだ。

それなのに。それなのに、それなのに！

ピーピリーブリーは確かに見た。背後であつても、この空間はまだ彼女の魔法だ。勇者に干渉することはできないが、それでも、その中の事象ならば全て見ることができる。

それなのに、どうして。どうして。

ピーピリーブリーは全く理解することができなかつた。見間違いだとしか思わなかつた。もし実際にそうだとしても、虚勢以外に考えられはしない。自分の魔法を模倣されたのだ。それなのに、それなのに。それなのに、どうして。

それなのに、どうして、こいつは『笑つて』いるんだ！

ピーピリーブリーの魔法は勇者に直撃し、勇者の肉体に大きな穴が開く。虚勢だつた？ 本当に？ もちろん、それは充分に考えられる。あの人は、そんな人間だ。もし自分が劣勢であつたとしても、絶体絶命の窮地に立たされていたとしても、虚勢を張り、相手の心を少しでも揺さぶり、自らが生きる道を選ぶよつな人間だ。だから、あの表情は、なにもおかしいことではない。虚勢であると考えれば、おかしくない、はずだ。

だが、ピーピリーブリーにはそれがただの虚勢であるとはどうしてか思えなかつた。あの表情が虚勢であるとは思えなかつた。あの表情は、確かに、『引っかかつた！』と思つてゐるような顔だつた。

そして、その疑惑は、正しかった。

気が付くと、ピーピリーブリーの身体に、何かが触れていた。恋を愛撫するように、首元に這うような腕があった。太腿の辺りを這うような腕があった。あまりにも優しく、あまりにも自然な手つきで、彼は、彼女の身体に触れていた。服の間から手を入れ、肉体に、直に触れていた。

ピーピリーブリーの視界に、突然、勇者が現れていた。

「なっ……！」ピーピリーブリーは驚きのあまりそんな声を上げ、だが、反射的に魔法を使い、夢幻により世界を変容させ、勇者のいる空間」と、勇者を歪ませる。

歪んだ。

勇者は空間」と歪み、だが彼はまたしても、笑っていた。

そこでピーピリーブリーは理解した。こいつは、エレクトロの魔法を使っている！ もちろん、勇者がエレクトロの魔法を使えることは知っていた。だが、それはただの模倣だとしか思つていなかつたし、それ以外には考えられなかつた。

しかし、勇者の使つた魔法は、ただのエレクトロの魔法ではなかつた。エレクトロの魔法だが、これは、もっと高度な魔法だ。あの、『第七』の、エレクトロの魔法を使い、あまつさえ、それをさらに高度化する？ 模倣なんてものじゃない。そんなのはもう、完全に模倣しているとか、そんな言葉では足りない。完全に、魔法を、自分の中にしている『征服』している。

「ほんの少しだが、驚いた。まさか、魔族如きが、この俺の魔法を理解するとはな」

気付くと、勇者がピーピリーブリーから離れた地点に立っていた。その輪郭に、滲み出すうな黒い影があった。

「だが、この俺が魔法を理解されたくらいで、そこまで驚くはずがないだろ？ そりやあ、俺のように征服したならば、結構な驚きだが、それでも、恐怖を覚えるほどじやない。現に俺は、色々と、魔族の魔法を征服しているからな」

そう、そこまで驚くはずがなかつたのだ。

それだけの魔法を征服した勇者ならば、そこまで驚くはずがなかつた。ピーピリープリーが勇者の魔法を模倣したところで、彼にとって、そんなことはなにも驚くことではないのだ。それでも、反射的に少し驚いた勇者だつたが、そこまで驚くことではない。隙を見せるほど、驚きに硬直するほど驚くことでは、ないのだ。

「それと、理解しているよな？　俺は、お前に触つたぞ？」

ピーピリープリーはぎつと歯を軋ませた。そう、『触れられた』。彼女の身体に　彼女の身体に刻まれた紋様に、触れられてしまつた。

それが、なにを意味するか。それがわからないピーピリープリーではない。

……だけど、私の魔法は、夢幻だけじゃない。

ピーピリープリーは思う。そう、彼女の腕前ならば、それ以外の魔法も使って当然だ。勇者の魔法の模倣だけでも当然ない。それ以外の自分の魔法も、確かに、あるのだ。

「お前が何を考えているか、手に取るようにわかるが、その思考は間違つている」

勇者の言葉に、ピーピリープリーは勇者を見た。そんなことがないことを、彼はさきほど見たところのはずだ。実際に、ピーピリー プリーは夢幻ではない魔法を使った。

「はつきりと言おう。わかっているだろ？　理解しているだろ？　？　目を背けるな。事実を知れ。事実を受け止める。『夢幻』以外の魔法で、この俺に敵うと、お前は、本当に思つているのか？」  
ピーピリープリーの動きが、止まつた。

「お前は確かに恐るべき魔法の使い手だ。だが、お前の固有魔法は『夢幻』だろ？　その紋様から解析したからわかる。『夢幻』自体、それはそれは高度な魔法だ。世界 자체を惑わすなんて、そんなの、俺ですら思いつかなかつたし、今の俺では、技術面から考えても不可能だろ。だが、だからこそ、お前はそれ以外の魔法は、『

夢幻』ほど強力な魔法を使えない。『夢幻』こそがお前の最強魔法、そうだろ？だから、お前は『夢幻』を使っていたんだしな」  
ピーピリープリーはその言葉に何も返すことはできなかつた。その通りだつたのだ。勇者の言つ通り、ピーピリープリーの最強魔法は『夢幻』。それを解析されるなどは考えたこともなかつた。それほどまでに高度であり、おそらくは、魔王や第一以外の全ての魔族にも、解析されはしなかつただろう。もし解析されたとしても、それは、膨大な時間を要するはずだつた。

だが、勇者は、違う。

彼の『眼』はそれほどまでの脅威であり、そんな『眼』を持つ者に触られたら、もうそれは、解析された以外は考えられない。

いや、待て。それこそが勇者の狙いではないのか？

ピーピリープリーは思つた。そうだ。そうだ。勇者なのだから、それくらいしてもおかしくはない。夢幻は、まだ、勇者に効果はあるはずだ。

ピーピリープリーは夢幻で世界を変容させた。勇者のいる空間を歪ませ、勇者に向かつて夢幻によつて惑わされた『世界そのもの』が勇者に攻撃を始める。

だが、やはり、効かない。

いや、そもそも、魔法を発動することができない。

「確かに、技術面では、俺はまだ『夢幻』を使うことはできない。だが、もう解析したんだ。そこから逆算すれば、その発動を妨げるだけならば、可能だろう？ その魔法構造は、既に、理解している。お前は技術面で優秀すぎた。だから、その技術を解析されれば、もうお前に為す術はない。力任せの魔法ならば、解析されたくらいでつていい。ならば、その魔法構造を理解し、『いじる』ことができ何のことはないが、お前の魔法は、超緻密な技術によつて成り立つていい。ならば、その魔法構造を理解し、『いじる』ことができるようになつた俺には、その魔法はもう通じないし、発動することすら妨げることができる。当然だろう？ お前の魔法は、それほどまでに高度で、それほどまでに正確性を求めるのだから

勇者がゆっくりと歩いてくる。ピーピリープリーは、それでも魔法を使ふ。夢幻ではない魔法を、様々な魔法を使ふし、勇者へと攻撃する。だが、勇者にはその程度の魔法は通用しない。エレクトロの魔法を改良したあの魔法によつて、今の勇者には、その全てがすり抜けるようにして当たらない。

もしも夢幻が使えたならば、それすら考慮して、世界を変容することによつて、勇者にダメージを与えることが可能だつただろう。だが、今はもう、夢幻は使えない。

絶望の淵に立ち、ピーピリープリーは自分の失態を嘆く。

勇者がこの空間に足を踏み入れた瞬間に殺せばよかつた。それが、おそらくは、ピーピリープリーには可能だつた。それなのに、ピーピリープリーはそれをしなかつた。何故か。仇を討つため。亡き同胞の仇を討つため。そのために、ピーピリープリーは勇者をすぐに殺そうとはしなかつた。だが、それが間違いだつた。

ピーピリープリーは知らないが、おそらくそれは今まで勇者に殺されたほとんどの魔族が思つたことである。実際にはどうかわからないが、全くの油断無しに最初から勇者を殺しにかかつていれば、と後悔する魔族は大勢いる。そして、勇者はそのようなことすらも考慮して、戦闘している。勇者からすれば、魔族はバカだ。勇者はしばしば魔族を『畜生』と蔑んでいるが、それはただの挑発ではなく、本当に思つてゐることでもあつた。勇者は、魔族の精神性が善良であることを理解してゐるのだ。だから、それを考慮して、勇者は戦闘を行い、その戦闘における魔力消費量を最低限に抑えるようにしている。だから、勇者はその程度の力でしか戦闘をすることはなく、最初から殺しにかかるつていれば、と魔族が後悔するのは当然であり、その思考こそがまんまと勇者の策略にはまつてゐる証拠なのだ。

だが、そんなことを知らないピーピリープリーの後悔は止まらない。

そして、勇者が、ピーピリー・ブリーの目前に至った。

「久しぶりに楽しかつたぞ、魔族。その礼をこめて、一瞬で葬つてやるわ」

そう言つて、勇者は、ピーピリー・ブリーに、左手を向けた。

ピーピリー・ブリーは死を覚悟した。悔いは、あつた。だが、それでも、彼女には 魔族には、希望があつた。

「魔王様に、殺される」

ピーピリー・ブリーはなんとかして笑みを作つた。最後に、勇者を、少しでも苛立たせることができれば、最高だ。

「逆だな。俺が、魔王を殺す」

勇者はそんなことを言つた。それにピーピリー・ブリーは思わず吹き出してしまつた。そんなこと不可能に決まつてゐるじゃないか。なにを言つてゐるのだ、この人間は。

「そ、そ、う。最後に面白い冗談をありがとう。でも、それは夢幻でしかない」

「いいや、これは夢幻ではないさ。俺が、現実にして見せる」

「私は『夢幻』よ？ その私が夢幻だと言つてゐる。それを、信じられない？」

「信じてやつてもいいが、俺はそれを超越する。現に、俺はお前を解析した。今はまだ無理だが、いずれ、俺はお前の『夢幻』を征服する。それと同じように、今はまだ、魔王には敵わない。だが、いずれ、俺は魔王を殺すほどの力を手に入れる」

勇者の言葉には妙な説得力があつた。ああ、確かに、この人間ならば、私の『夢幻』を、いずれ自分のものにするのかもしれない。征服するのかもしれない。

だが、それでも、魔王だけは

「……いや、これ以上言つても、無駄かな。私は『夢幻』。だから、あなたの夢幻を、否定しないわ、夢幻を抱くだけならば、自由だし

ね」

「ああ。そうだ。じゃあ、死ね」

勇者は笑い、左手に魔力が通つた。

そして、魔法が発動する はずだった。

しかし、その瞬間、勇者の背を、黒き閃光が襲つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6066w/>

利己主義勇者と良き魔王 序章『失われた過去』

2011年11月26日19時49分発行